

神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

羊飼いに倣い、言葉が出来事となったと告げ知らせる



明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。2023年は、この田平教会聖堂についてこれまで以上に具体的な決断をし、新しい聖堂に生まれ変わるため、動き出す年になると思います。主任司祭として果たすべきことを、誠実に果たしていくつもりです。

福音朗読は、羊飼いたちが天使から告げられた言葉を頼りに、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てたところから始まっています。私たちのこの一年も、羊飼いたちの行動に倣う必要があります。私たちもついこの前、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てたばかりだからです。

羊飼いたちの働きは探し当てただけでは終わりませんでした。「その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた」(2・17)とあります。天使に告げられた言葉は確かに出来事として形になっていました。言葉が見える姿になったことを確かめた彼らは、さらに人々に知らせたのです。

羊飼いたちは人々に知らせ、「あなたがたのために、救い主がお生まれになった」(ルカ 2・11)との天使の言葉がより多くの人の中でとどまるよう、力を尽くします。ここに、新しい一年を教会の門をくぐって始めようとする私たちの生き方が示されているのです。

どのように伝えましょうか。正月は、正月料理を毎年用意する家庭もあると思います。正月に家族が集まって正月料理を食べながらゆっくり過ごす。そうすると、長い時間家族団らんの楽しさが続きます。そしてその楽しさは、次の世代に受け継がれていくわけです。

かつてカトリック信者は貧しい暮らしの人が多かったわけですが、それでもお祝い日には新しい服を着せてもらい、ふくれ饅頭を作って祝ったものでした。これはお祝い日ならではの過ごし方をすることで、カトリック信者として大切に守るべきことを伝える工夫だったと思います。ここに伝えるヒントがあるかも知れません。

新しい年が始まりました。田平小教区のこれから一年の目標として、「ここに、イエスさまのところに連れていきましょう」を掲げました。黙想会でより詳しく説明したいと思いますが、まずは「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と理解して一年を過ごすことから始めましょう。私たちの喜びの源である幼子イエスを知っているわたしたちは、すでにすばらしい光景を目の当たりにしているのです。

救い主が、羊飼いにさえ訪ねて行くことのできる場所にお生まれになった。この神秘を知っているのは私たちキリスト者だけです。なぜみすばらしい場所で生まれたのか知らない人に、出来事のすばらしさを知らせに行きましょう。知らせてあげた人を馬小屋に導くならもっとすばらしい。ここには、出来事をすべて心に納めて、思い巡らすマリア様が待っておられます。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

私たちは一つ実現できたら、次にまた一つできることを積み重ね、そうして一年を前進させていきます。御公現までの一週間、新しく幼子イエスを訪ねに来てくれる人を見つけることができるよう、神の母聖マリアの取り次ぎを願うことにしましょう。

このあと、20歳を迎えた方の祝福式を行います。きっとこれから、人の前に出て自分の考えを述べたりする場面が増えるでしょう。イエスの仲間である皆さんが「何をどう言おうか」となったときは、三位一体の神が助けてくださいます。聖霊が言うべきことを教えてください。

中田神父は、まさに成人式の時にこの体験をしました。その日は午後一時から福岡サンパレスでの成人式が予定されていました。直前に、一緒に成人式に参加する大神学院の同級生と鴨鍋を食べ、日本酒も飲んで成人式の会場に行きました。タクシーから降りた私は、明らかに酔っていました。

式典が進み、「新成人の決意表明」という案内が会場に流れました。そして案内の女性が、「新成人を代表しまして、『ナカタコウジ』さんに決意表明をお願いします」と言うではありませんか。前もって連絡ももらっていません。「大丈夫か？」と同級生も心配しています。

一分ほど、考えを巡らせました。大神学生として少しカトリックの考えを混ぜた決意表明を考え終わった頃、司会を務めていた民放アナウンサーが「ではナカタさん、お願いします」と言うと、別の「ナカタコウジ」がマイクの前に立って決意表明をしていました。

たまたま同じ名前の方がいたというオチですが、言うべきことを聖霊は教えてくださる、その体験をするには十分でした。どんな窮極の場面でも、聖霊は必ず皆さんを助け導いてくださいます。聖霊の助けを願いながら、20歳の祝福式に臨むことにしましょう。

主の公現(マタイ 2:1-12)

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2023/1/8(No.1216)

主の公現 (マタイ 2:1-12)

お生まれになったイエスを拝む人は喜びに満たされる



御公現の祭日を迎えました。東方からやってきた学者たちが幼子イエスを拝むことで、ユダヤ人だけでなく、すべての人に神の救いの計画がおおやけになりました。私たちも、救いの計画が遠いユダヤのためだけでなく私たちのものとなったことを喜び合いましょう。

本日のミサ、昨年末に亡くなられた名誉教皇ベネディクト 16 世のため、また田平教会出身の死せる司祭亡くなった主任司祭及び教会建設で亡くなられた恩人のための意向を加えておささげしています。中田藤吉神父様は、1月8日。それぞれ、教会のために尽くし、教会のためにいのちをささげました。占星術の学者たちと重ねて、思い巡らしてみましよう。

占星術の学者たちが最初に語ったのは次のことでした。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(2・2) 東の国からやって来た学者に、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」が、どんな意味があるのでしょうか。それは、日本に住む私たちにとって、と置き換えることもできます。

学者たちは礼儀として、他国の王を拝み、贈り物を献げた、ということでしょうか。そうではないと思います。贈り物には意味があったと言われています。「黄金」がまことの王を表し、「乳香」がまことの祭司を表し、「没薬」が最も高貴な人として埋葬されるべき方を表すなら、出発の意味と最終的な意味は違うことも考えられます。

出発として「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」ではあっても、最終的には「人類すべてにとって王であり祭司であり高貴な人である」と理解して礼拝したのではないのでしょうか。ユダヤ人のためにお生まれになった方は、最終的に人類すべてのためにお生まれになったのです。

海外のニュースで、名誉教皇ベネディクト 16 世のご遺体がバチカンの礼拝堂に安置される様子が流れました。降誕節の中で旅立っていく姿は、「幼子イエスのそばに置かれ、救い主のそばに置かれて慰められた」という印象を持ちました。

田平教会出身で亡くなった司祭、また田平教会で主任司祭の務めを果たして今は亡くなった司祭、また聖堂建設の中で命を落とした信徒も、今日のミサの中で「幼子イエスのそばに置かれ、救い主のそばに置かれて今は慰めを受けている」と理解しています。イエスを信じたすべての人は、イエスのそばに置かれたとき、最終的な慰めを受けるわけです。

占星術の学者たちは、自分たちの持ち合わせの中で最高のものを幼子イエスの前に置いて自分たちの国へ帰って行きました。名誉教皇ベネディクト 16 世、田平教会出身の亡くなった司祭、田平教会の主任をなさって亡くなった司祭、教会建設で尊い命をおささげした信徒の皆さんも、

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

ご自分の命という、最高のものを幼子イエスの前に置いてくださいました。

主の公現のミサに集まった私たちは、何を幼子イエスさまのもとに置いて、喜びながら日常に戻っていくのでしょうか。私は何をささげようとして、ここに集まったのでしょうか。学者たちは黄金乳香没薬を置いて帰りました。田平教会の司祭、教会建設で亡くなった信徒たちは自分の命をイエスのもとに置きました。私たちは日々の生活の中で、何をイエスさまのもとに置きますか。

年間第 2 主日(ヨハネ 1:29-34)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第2主日 (ヨハネ 1:29-34)

キリスト者が最も輝く働き方に舵を切る



先日「光の園老人ホーム」に、毎月第2金曜日に頼まれているミサをしに行きまして、説教で厳しい注文をしてきました。「おじいさんおばあさんに、キツイことを言う人はあまりいないでしょう。だから私が、悪者になって言います。新しいミサの式次第を、きっちり身につけてください。」

これだけなら、いつかは誰かが言わなければならないことですが、式次第を身につける動機付けを、責任の持てないことまで持ち出して話しました。「高齢者の皆さん、天国では新しいミサの式次第の試験があります。合格しないと、いつまでも煉獄に留め置かれることになりますよ。」

「だから何度も練習して、身につけてください。『天国で試験だなんて、嘘に決まってる』そう思っている方は、試しに煉獄に行ってください。」ここまで言ってしまったので、言い過ぎたかも知れません。しかしいかにも中田神父が考えそうなことだと思いませんか？

典礼の季節が「年間」に切り替わりました。典礼の色は緑色です。四旬節まではしばらく、年間の典礼がつづきます。四旬節に入る直前、2月19日の年間第7主日は大司教様が公式訪問される日です。心を込めてミサをささげましょう。この日は午後から、紐差教会で合同堅信式も行われ、田平教会の男子一名が堅信を受けます。お祈りください。

本日の福音朗読で、洗礼者ヨハネが語る言葉はどれも一つの形を取っています。それは、「後から来られる方」イエスを、告げ知らせしているということです。洗礼者ヨハネは、水で洗礼を授けること、つまり悔い改めの洗礼を授けることで当時すでに輝きを放っていましたが、私は、洗礼者ヨハネが最も輝くのは、イエスを告げ知らせしているときだと言いたい。この考えに沿って、今日お話をしたいと思っています。

洗礼者ヨハネの言葉をいくつか拾ってみましょう。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(1・29)「この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た」(1・31)「わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである」(1・34)どれもイエスを告げ知らせしているだけでなく、イエスを告げ知らせしているときこそ、洗礼者ヨハネが最も輝いている。そう感じませんか。

勘の良い方はこのあと中田神父が何を皆さんに期待するか、お分かりでしょう。この七年間、同じ説教の仕方をしてきたので、慣れているはずです。つまり、洗礼者ヨハネの姿は私たちのお手本ですよ、ということです。私たちが何かを語り、行動するとき、最も輝くのは「自分の言葉と行いでイエスを告げ知らせるとき」なのです。

三つの例を挙げてみます。どれが、私たちに最もふさわしい語りでしょうか。一つ目は、自分のことを言う語りです。「私、すごいでしょ。」二つ目は、自分ではなく他の誰かのことを言う語りです。「○○さんは、

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

すごい人だよ。」三つ目は、イエスのことを言う語りです。「イエスさまって、すごい人だよ。」この中で、私を最も輝かせる語り口はどれでしょうか？

振る舞いについても同じです。自分を証しする振る舞い、人を証しする振る舞い、イエスを証しする振る舞い。私を最も輝かせてくれる振る舞いはどれなのでしょう。キリスト者として、救い主の誕生をほんの少し前に喜び合った者にとって、私を最も輝かせる言葉と振る舞いに、興味ありませんか？と投げかけたいのです。

2019年の教皇フランシスコの来日は、今も記憶に新しいと思います。圧倒的な存在感でした。しかし教皇フランシスコはご自身を告げ知らせるためにおいでになったのでしょうか。誰か他の人を告げ知らせるためだったのでしょうか。そのどちらでもありません。すべてのいのちを守るお方、イエス・キリストを告げ知らせるために、「王であるキリストの祭日」に、おいでになったのではないのでしょうか。

また2月19日に、私たちの中村大司教様がおいでになります。中村大司教様とついこの前公式訪問の内容を打ち合わせましたが、私は立場を踏まえ、たてまつってご相談したのですが大司教様は「よかと～よかと～そんなにかしこまらんでも」と仰いました。大司教様の気さくな姿から、ご自分を告げ知らせる大司教様ではなく、イエス・キリストを告げ知らせる大司教様だということがよく分かりました。

私たちが最も輝くのは、イエス・キリストを言葉や行いで告げ知らせるときです。洗礼者ヨハネは生涯のすべてをイエスを告げ知らせる場所に置きました。私たちも、自分自身をイエス・キリストを告げ知らせる場所に数多く置いて、最も輝く働きをしましょう。これこそ、中田神父が考える「働き方改革」です。

神のことばの主日(マタイ 4:12-23)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

神のことばの主日 (マタイ 4:12-23)

神のことばは深く掘られた汲み尽くせない井戸



フランシスコ教皇様が 2019 年 9 月 30 日に公布した自発教令に沿って、今週年間第 3 主日は「神のことばの主日」と呼ばれています。神のことばをより大切に心にとどめる、そのつもりで今週のミサを祝ってまいりましょう。

今週の朗読からイエスのことばを大切に心にとどめるとするなら、「悔い改めよ。天の国は近づいた」(4・17)と「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(4・19)の二箇所でしょう。始めのことばは、「人をイエスに向かわせることば」と考えました。あとのことばは、「イエスが人の心の中に入っていくことば」と考えました。私たちには、人をイエスに向かわせることばと、イエスが人の心の中に入ってこることば、両方が必要なのだと思います。

人を、イエスに向かわせることばは、今年の黙想会でいくらか触れることができると思いますので、そちらに委ねます。今回は、「イエスが人の心の中に入ってこることば」について考えてみましょう。

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」なぜこのイエスのことばは、ガリラヤの漁師たちに響いたのでしょうか。なぜ漁師たちの心の中に入ってこることができたのでしょうか。

単純に、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」このことばが「すべての漁師の心に響くことができる」とするなら、ガリラヤの漁師たちはわんさかイエスの弟子になったことでしょう。皆さんも薄々気付いているとは思いますが、そういうわけではありません。漁師たちのうち、特定の漁師たちの心に、イエスのことばが響き、深く心の中に入ってきたのです。

イエスのことばが響いた漁師たちと、そうでない漁師たちの違いは何だったのでしょうか。私はこう考えます。毎日繰り返される魚をとる仕事。どれだけとっても、何か満たされないものがあつた。そういう漁師にとって、イエスのことば「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」は特別な響きがあつたのではないのでしょうか。

私たち長崎教区の長であられるペトロ中村倫明大司教様には、あと二人同級生の長崎教区司祭がおられます。その中でも叙階の日も同じなのが牧山強美神父様です。小神学生時代に一緒に過ごしましたが、長崎の神学校で牧山先輩から言われた次のことばは、今でも深く心に刻まれています。「井戸は、深く掘らなければならない。浅い井戸は、すぐに涸れてしまう。」もう少し説明を加えましょう。

神学生はそれぞれが個性的な人たちです。ですから何かしら、自分が興味を持っている分野があり、たいていの場合、興味ある分野を掘り下げています。ただ、「どれくらい掘り下げているか」は神学生のやる気によって違ってきます。

たいして掘り下げていない人もいますでしょう。そうするとその人は

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

のちに司祭となったとき、自分の興味ある分野であってもワンパターンな話しかできないのです。ミサに集まる人たちはどこかで、喉が渴いている人たちです。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」（ヨハネ 7・37）とイエスに招かれている人たちです。集まった人たちが、変わり映えしない説教を何度も聞かされたら、あるいは何年も聞かされたら、その人たちは渴きを潤せない場所に見切りを付け、もはや来なくなるでしょう。

ある人は、興味ある分野を神学生の時から深く掘り下げています。この人がのちに神父様になると、その神父様が掘り下げた井戸から、たくさんの方が水を飲み、潤されるのです。仮に水がなくなっても、深く掘られた井戸にはあちこちから水が染み出て、また多くの人の渴きを潤すことができます。こんな井戸を、一人一人持つておくべきだ。牧山先輩はそんな思いで、井戸のことを語ってくれたのだと思います。

牧山先輩の井戸の話は、なぜ中田神父に響いたのでしょうか。それは中田神父自身が、説教を準備する中で何度も井戸が涸れて、倒れそうになったことがあるからです。しかし中田神父はそれでも、井戸を掘り下げようともがきました。そのおかげで、もうダメだと思ってもどこからか水が湧いて、私の井戸に水が溜まり、それが誰かの渴きを癒やすことになったのです。

私にとって掘り下げていく井戸、それは日曜日の福音朗読でした。神学生の時、出会った神父様の説教をよく聞いて水を汲みました。司祭になってからは、参考書も頼りにしてきましたが、何度も聖書の箇所を読み返しました。それだけ努力しても、「もうこれ以上何も出てこない」と思うこともありましたが、諦めずに固い地層に「のみ」を打ち続け、何とか水脈を当ててここまで来たわけです。

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」このイエスのことばは今も私を惹きつけています。実はイエスのことば一つ一つが、汲み尽くすことのできない井戸です。それは信徒の皆さんにとっても、どこかの時点で分かることです。神のことばは、渴いている人をいつも招いて潤してください。中田神父も引き続き、神のことばが汲み尽くせない宝であることを、伝え続けていきたいと思っています。

年間第 4 主日(マタイ 5:1-12a)

年間第4主日 (マタイ 5:1-12a)

受けた信仰を、積極的な生き方で完成させよう



年間第4主日で与えられた福音朗読は「山上の説教」として知られるマタイ5章冒頭の部分です。この山上の説教は、実は2月5日「日本26聖人殉教者」のミサの中でも朗読される箇所です。日本26聖人についても意識しながら、福音朗読の学びを得ることにしましょう。

山上の説教全体が、迫害の中に自分をおいて朗読に耳を傾けると、メッセージが生き生きと伝わってきます。前半部分を「迫害の中で耐え忍ぶ姿」姿だとすると、後半特徴的なのは、「迫害の中で積極的に生きる姿」です。今回は後半の7節以降に注目したいと思います。

山上の説教の物語です。迫害の中に自分を置くとメッセージがよく響くと言いましたが、今の日本で、迫害を体験する場面はどこにあるのでしょうか。ピッタリ当てはまるか分かりませんが、「いじめ」は日本社会が抱える大きな病巣であり、「迫害」と言えるかも知れません。

「いじめ」を受けた経験のある人は、「忍耐する」ことについてはこれまでたくさん強いられてきたと思います。しかし、悪質ないじめの場合、忍耐するだけでは乗り越えられません。相手が怯むような「反撃」をしたときに、状況が一変します。復讐のことを言っているのではありません。「目には目を、歯には歯を」という復讐ではなくて、積極的な行動ということです。

日本26聖人はまさに、この「積極的な行動」の鏡だと思います。京都で捕らえられ、耳たぶの一部を切り落とされ、着の身着のまま、長崎に向けて連行されていきました。長崎までの道は、「耐え忍ぶ」道だったと言えるでしょう。

しかし26人が長崎の処刑場に着いたとき、彼らは一目散に自分が磔にされる木を見つけ、抱きしめたと言われています。さらに磔にされたあとも、みなは「神をほめたたえよ」と聖歌を歌い、パウロ三木は自分たちが殺される理由とそれでも喜んでいること、そしてすべての人が神様を信じて救われるように願っていると叫んだのです。これは迫害者を怯ませるのに十分な、「積極的な行動」でした。

日本26聖人は、迫害のさなかにも積極的な行動ができることを、証明してくれました。きっとこれは、日本社会の根深い病である「いじめ」にも当てはまると思います。「耐える」とことと「積極的な行動」の両方が、深刻ないじめを乗り越える可能性を開くのだと思います。

もちろんいじめられているすべての人が積極的な行動が可能だとは言いきれません。それは認めます。ただ、誰かが「耐えるだけでなく、積極的な行動に打って出る」とき、さまざまないじめの問題を打開する影響が波及していくのではないのでしょうか。

そう考えて7節「憐れみ深い人々は、幸いである」を読み返すと、「憐れみ深い」が積極的な行動を引き起こします。これは迫害者を赦すということです。8節「心の清い」も、積極的な行動を引き起こします。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

これは迫害者を憎まないということです。9節「平和を実現する」ここには分かりやすく積極的な行動が見えます。これは迫害者と平和を作り出そうとすることです。

こんな行動が、迫害の中で可能なのだろうか。正直なところ疑問に思っていました。すばらしいお手本をテレビのニュースで目にしました。今のウクライナで実際にあった話だそうです。国内の体操競技での出来事でした。体操競技が実施されていた体育館が突然停電に襲われます。ロシアが電力施設に絶え間なく攻撃を仕掛けている影響でした。通常なら、演技が中断され、大会そのものも続行できないでしょう。

しかし体操競技を観戦に来ていたウクライナ国民が、驚くべき行動に出たのです。停電で電力が復旧しない中、観客が全員スマホのライトを付けて会場を照らしたのです。おかげで会場に明かりがとまり、演技を続行することができたのです。

この場面で、ロシアを非難し、会場にいる全員がロシアを罵ることもできたでしょう。しかしウクライナ国民はロシアを赦し、積極的な行動で「憐れみ深い人々」になる道を選んだのです。「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。」競技を続行した選手たちは、大いに慰められたことでしょう。

山上の説教は、二つの働きで神の国の幸いを完成させるのだ教えます。一つは忍耐です。ルカ 21 章 19 節で次のように言われています。「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」そしてもう一つは積極的な行動です。

これは私たちへのメッセージです。日本 26 聖人からのメッセージと言っても良いでしょう。「忍耐」と「積極的な生き方」で、信仰は完成するのです。迫害の中だけでなく、平和な時代でもそれは変わりません。信仰を自分が守るだけでなく、積極的に行動するとき、あなたの信仰は完成するのです。

250 年間迫害を耐えてきたキリシタンの信仰を受け継ぐ私たちは、これから積極的に信仰を表すことで、受けた信仰を完成することができます。250 年間耐えてきたのをこれからも続けるのではありません。もう十分耐えてきました。信仰の完成のために、日本 26 聖人は私たちに積極的な行動を求めているはずですよ。

年間第 5 主日(マタイ 5:13-16)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第5主日 (マタイ 5:13-16)

私たちは26聖人にささげられた教会の家族



ミサの初めでもお知らせしましたが、田平修道院のシスターが容態が良くないそうなので、お祈りください。今年は、2月5日が日曜日で回ってきました。長崎教区にとって、2月5日は日本26聖人殉教者の祝日です。さらに私たちが今ミサをささげている聖堂は、日本26聖人に献げられていますから、日本26聖人そのものに親しみがなくても、この聖堂への愛着を通して、2月5日を心に刻んでほしいと思います。

さて、田平教会は山の上にある教会です。台風の影響もいちばん受けますし、雷の影響もしばしばです。献堂百周年の時に記念誌のタイトル募集をしたことを思い出します。「祈りは未来へ」というタイトルが選ばれましたが、中田神父も応募していました。「天空の教会」です。気温差の大きな日、田平教会はときおり霧に包まれました。そこに教会だけが浮かび上がる光景を想像して書いたのですが、一次審査で即刻ボツになりました。

ところで新約聖書の舞台であるパレスチナでは、「山の上にある」ということはおおいに利点があったようです。「山の上にある町は、隠れることができない」(5・14)と言われていきますし、「ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らす」このことにも触れています。

当然、山の上にある町がたいまつをともしたり、それぞれの家がともし火を燭台の上に置けば、その町全体が周囲からよく見えるようになり、「世の光」の役割を果たすでしょう。同じ役割を、田平教会聖堂は百年以上、果たしてきました。今現在であれば、土曜日の繰り上げミサの明かりは、きっと平戸瀬戸を通過する大型船、大小さまざまな漁船の目に留まり、対岸の平戸島の人々の目にも留まっていることと思います。

日本26聖人に置き換えて考えてみましょう。彼らが殉教した場所は、当時は最も見晴らしの良い場所だったかもしれません。彼らはともし火は持ってなかったでしょうが、彼ら自身が「世の光」でした。そして「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」(5・16) このイエスのことばを完全に実行したのです。

振り返って、田平教会聖堂は、人が居ないのに明かりがともるでしょうか？そんなことはありません。田平教会の家族が、ミサに参加したり、聖堂内での典礼行事や、黙想会に出席したりすることで、夜の時間に明かりをともしることになります。

ではもう少し踏み込んで、田平教会聖堂を、「山の上にあって、明かりがともる聖堂」にする人々は、募集して集めた人々でしょうか。バイト代を払って集められたのでしょうか。そうではありません。この聖堂に集まる一人一人、自分の中に光があって、その光を人々の前に輝かそうと、この聖堂に集まっているのではないのでしょうか。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

もちろん、漠然とこの聖堂に集まっている人もいるでしょう。けれども今日から皆さんは全員、この聖堂を「山の上にある町」「燭台の上のともし火」にするために集まる人々に変わりました。イエスの次のことばを聞いたからです。「あなたがたは世の光である。」(5・14)

念のために言っておきますが、「あなたがたは世の光である」この光は、暗闇の中でだけ働くものではありません。日曜日が一番ミサ二番ミサの人にも当てはまります。田平教会聖堂に集まるすべての人が、田平教会聖堂を「山の上にある町」「燭台の上のともし火」にしてくれている人々です。

「この教会が燦然と輝くのは、レンガで作られた百年前の聖堂だから」それもありますが、この百年の歴史を繋いできた皆さんの中にある光が、この聖堂を輝かせているのです。その自覚と誇りが必要です。

最後に残っているのは次の言葉です。「人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」先日一組の夫婦が田平教会聖堂を訪ねてくれました。一年半前に訪ねたとき、県道に沿って柵が設けられていて敷地内にも入れなかった経験をしたそうです。けれども今回は、「お祈りをなさるための訪問でしたらどうぞお入りください」と案内所にお伝えして、聖堂内で熱心にお祈りをささげて帰られたそうです。

この夫婦は、私たちと同じようにこの田平教会聖堂を「山の上にある町」にしてくれました。田平教会を訪問して、レンガと、ステンドグラスまでたどり着く人はいくらでもいます。けれどもこの聖堂で祈る人々がいて、ミサをささげる人々がいる。そこまでたどり着く人は数えるほどしかいません。レンガとステンドグラスをたたえる人がどれだけいても、その人々は「地の塩、世の光」ではないので、天の父をあがめる人は増えないのです。

私たちは違います。私たちが集まる時、私たちは天の父をあがめる人を増やすのです。いつその結果が見えてくるかは分かりませんが、私たちは信じて、この聖堂を「山の上にある町」「燭台の上のともし火」にするために引き続き集まらしましょう。2月19日、ペトロ中村倫明大司教様の小教区訪問が実現すると、「人々があなたがたの天の父をあがめるようになる」その時が現実のものとなるかも知れません。

年間第6主日(マタイ 5:17-37)



年間第 6 主日 (マタイ 5:17-37)

わたしが来たのは堅信を受けるあなたのためである

今日は、今年堅信を受ける中学生、来年堅信を受ける中学生のために話したいと思います。日曜日にここで話している内容を「説教」と言います。あまり聞いたことのない言葉でしょうね。「お父さんお母さんに説教された」そういう経験ありませんか？

たまに中田神父もお父さんお母さんがするような説教をすることもありますが、ミサの中での「説教」は、直前の福音朗読、イエス様のみことばを「解き明かして教える」ということです。

イエス様のみことばを「解き明かす」と言っても、中田神父がイエス様より偉いわけではありません。イエス様の言いたいこと、伝えたいことを 10 分の 1 でもいいから、伝えようとしているのが「説教」です。

ですから、できるだけ、その日の朗読を繰り返し読んで、「イエス様は何を伝えたいのだろうか」と考え、それを毎日の生活と結び付くように工夫して中田神父は説教をしています。結構苦勞して準備しているので、頭は禿げてしまいました。

今週の朗読箇所、長かったのですが、鍵になっているみことば、全体をまとめるようなみことばが最初に語られています。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」(5・17) 今日ここで終わりです。この一節を味わうために、いろいろ話したいと思います。

イエス様は「わたしが来たのは(中略)廃止するためではなく、完成するためである」と言っています。今週朗読しているイエス様の物語はマタイ福音書から取られています。福音書は四つありますから、福音書全体で、「わたしが来たのは、〇〇のためである」という言い方を何回しているのでしょうか。

福音書全体を見渡すと、重なっている箇所を除いて、5箇所、見つけることができました。5つとも、並べてみましょう。

マタイ 5:17「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」

マタイ 9:13「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

マタイ 10:34「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。」

ルカ 12:49「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」

ヨハネ 10:10「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

これから堅信を受ける、中学生の皆さんに当てはめてみましょう。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」イエス様は堅信の秘跡で、中学生のあなたを完成するために来るのです。知恵と理解、判断と勇気、神様を知り、神様を愛し、神様を敬う。これらはまだまだ十分ではありませんでした。けれどもイエス様がおいでになって、聖霊によって堅信の恵みを注いでくださり、あなたを完成させてくれるのです。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」堅信を受ける中学生は直前に赦しの秘跡を受けました。正しい人、立派な人だから堅信のお恵みを受けるのではないのです。自分の力だけではとても正しい道を歩けないので、イエス様が導いて聖霊によって堅信のお恵みを授けてくださるのです。

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。」剣は何かをぶった切るためのものです。テレビゲームをなかなか止めず、お父さんお母さんに頼まれたことを後回しにし、しまいには果たさなかったことがないでしょうか。テレビゲームの誘惑をぶった切るために、イエス様は堅信を受ける中学生のもとに剣を用意します。

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」これも同じようなものです。誘惑から離れないときに、誘惑を燃やしてしまっ離れることができるように、イエス様は堅信を受けるあなたのもとに火を投げ込むのです。

そして最後に、「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」イエス様は堅信を受けるあなたが命を受けるために、それも豊かに受けるために、聖霊を通しておいでになるのです。

ここまで話した四つ五つのことが、堅信を受ける中学生に豊かに命を与えてくれるのです。口から食べるものばかりではなく、ミサに来て読み聞かせてもらったイエスのみことばと、私たちの中に来てくださる御聖体が、堅信を受けた中学生を豊かに命を育んでくださいます。信頼して、2月19日の堅信式に臨むことにしましょう。

年間第7主日(マタイ 5:38-48)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第7主日 (マタイ 5:38-48)

希望の扉を開く家族になろう



本日、親子での洗礼式が入りました。特にお子さんと一緒に洗礼を受けるお母さんは、朗読された聖書の言葉から、洗礼を受けた後の人生をどのように歩いたらよいか、汲み取ってほしいと思います。

朗読された箇所は、「敵に対してどのように振る舞うべきか」を教えてくださいますが、いくつかは、「敵」ではなく「自分の子」に対してどのように振る舞うべきか、と受けとめて考えてみると良いと思います。

例を挙げましょう。「だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。」(5・41)一ミリオンはだいたい1480メートルだそうです。遊園地、例えばハウステンボスに出かけたとしましょう。すると子どもはあっちにも行こうこっちにも行こう、まあ次々と両親を引っ張り回すと思います。子どもが行きたいと言っても、親は足が疲れたらいつまでも付き合えません。そんな事情を子どもは考えませんから、一日くたくたになるまで付き合わされることになります。

しかしもし、子どもに最後まで付き合っ、子どものほうが降参するまで一緒に歩けば、子どもは親の深い愛を受けとめるでしょう。それは遊園地だけのことではありません。今日洗礼を受けるこの子は、二週間もすれば初聖体を受けます。初聖体を受け、卒園して小学校に上がると、教会では教会学校に通うでしょう。お母さんよりも早く、祈りを覚え、先へ先へと進む子どもと、ぜひどこまでも付き合ってください。

初聖体、その後の堅信へと、子どものカトリック信仰が成長し、先へ進むのに合わせて、お母さんもたとえ一ミリオンだろうが二ミリオンだろうが、ずっと一緒に歩いてほしいのです。

「求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」(5・42)これも子どもと親の間で当てはまります。ついこの前与えたばかりなのに、子どもは平気で壊したり無くしたりします。「あんまりひどいから、代わりの物はあげない。」そう言いたくなりそうですが、背を向けず、辛抱強く与えてください。

私は小学生の時、祈祷書を無くす困った子どもでした。「無くす」というよりは、教会バックを持って回るのが面倒くさかったのです。そのためどこで無くしたのかも分からず、母親を大変困らせていました。あまりにも無くすものだから、最終的に母親は、祈りを一つ覚えてからでないと外に遊びに行くのを許さなくなり、そのせいで中田神父はほとんどの祈りを覚えたのでした。ちなみに学校内の漢字の試験は、祈りを暗記する習慣が付いてから同級生に負けたことはありませんでした。

今日親子で洗礼を受けることで、親子はあらためて教会の扉を開いた、と中田神父は考えています。この扉は、洗礼を受けた親子と家族にとってどんな扉でしょうか。中田神父は「希望の扉」と言って良いと思います。洗礼によって希望の扉を開いた親子は、扉の先で、イエス・キリストからたくさんのお世話を受け、恵みで満たされるのです。扉の向

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

こうにイエス・キリストが待っていて、迎えてくださるから「希望の扉」なのです。

ぜひこれからも、「希望の扉を開く家族」として成長して行ってください。教会でこれからお世話になる扉は、「向こうに誰が迎えてくれるのか分からない」そういう扉を開けようとしているわけではありません。扉の向こうで必ずイエス様が待っていて、恵みでいっぱいにしていただきます。喜びでいっぱいにしてくださるのです。

日々の生活では、「この扉の向こうはどうなっているのだろう」そんな心配をしながら前に進むこともあるかも知れません。しかし教会でお世話になる扉は常に「希望の扉」です。安心して、信頼して教会生活を進めていきましょう。

できれば、家庭で一日の始まりにお祈りをちよっとして（たとえば家族で主の祈り、アヴェ・マリアの祈り、栄唱を唱える）、一日の始まりも、神様に向かって扉を開いてくれると、希望に満ちた一日を始めることができると思います。

今日の洗礼式を通して、ご家族みな「希望の扉を開く生活」がどんなものかを知りました。周りの方々も、どうか良いお手本となって、田平教会家族がそろって、「希望の扉を開く」教会家族となりますように。それではこれから、洗礼式を始めることにしましょう。

四旬節第1主日(マタイ 4:1-11)

四旬節第1主日 (マタイ 4:1-11)

今年は「これらの石がパンに」を黙想します



「瀬戸山の風」3月号に書いたのですが、中村大司教様の田平小教区公式訪問の際は、皆様にご協力頂き、感謝申し上げます。それなのに、私は信徒との集いの式次第の中で、評議会議長あいさつをすっ飛ばしてしまい、穴があったら入りたくらいです。責任を取って田平教会主任司祭を降りたくらいです。まだ、降りませんけど。

四旬節第1主日は、イエスが悪魔から誘惑を受ける場面が朗読されます。悪魔は三つの誘惑で挑みます。三つとも考える材料にするのではなく、今年はその中の最初の誘惑「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」を考えてみたいと思います。

この誘惑で、「空腹を覚えられたイエス」がパンを欲しがるというのは分かるのですが、なぜ悪魔が「石」「石ころ」をパンになるように命じたらどうだと誘惑するのだろうか？とふと考えました。30年このかた、考えたことも無かったのですが、イエスにパンの誘惑をするだけだったら、何も無いところからパンを生み出すことだってできそうなものです。悪魔はなぜ、「石」「石ころ」を最初に取り上げたのか。

どこかの解説に書かれていたわけではないのですが、「聖書の分かち合い」だと思って聞いてください。この「石」をパン屋に持ち込んだら、パンと交換してくれるとしたらどうでしょうか。どこにも説明されていませんが、石にいくらかの価値があって、パン屋が喜んでパンと交換してくれる。その可能性も無くはありませんね。

しかしそれでも悪魔はイエスを、この世のものに依存して神への信頼から引き離してしまおうとしていることに変わりはありません。こうしてみると、悪魔の誘惑は私たちへの誘惑でもあるわけです。

私たちも日常で神への信頼から遠ざかっているなら、追い詰められた事態になるとますますこの世のものにすがろうとしてしまいます。まんまと悪魔の誘惑に引っかかってしまいます。そこをイエスのご自分の模範で戒めようとするのです。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」(4・4)

ただ実際は、私たちは誰かを通して、「神の口から出る一つ一つの言葉」を聞きます。中田神父は二人の神父様に助任司祭としてお仕えし、それぞれの神父様の言葉でこれまで活かされてきたと強く感じています。一つは川添神父様の、「お前なあ。六十(歳)にならんと言えんこともあっとぞ」です。私は調子に乗りすぎて公の場で失言したことがありました。それを戒めた言葉です。今中田神父は、もう少しで六十歳になろうとしている中で、「あの言葉は神の口から出る一つ一つの言葉であった」としみじみ思うのです。

もう一つは、竹山神父様の言葉です。教会建設を本腰入れて始めようとする時期で、肺炎でお亡くなりになる前、個人的に言われた言葉です。振り返ると私への遺言となってしまいました。「聖堂は、どうやっ

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

て建つか分かるか？聖堂はな、祈らんば建たんとぞ。」今まさに耐震工事が目の前に迫っている。その準備として積立もしている。しかししかし、祈らなければ、耐震工事は完成しない。そういうことではないでしょうか。

祈りの積立が十分でなければ、ルカ 14 章 30 節の「あの人は建て始めたが、完成することはできなかつた」ということにもなりかねません。祈りが込められた聖堂として、耐震工事は完了しなければなりません。竹山神父様の言葉も、六十歳を間近にようやく「神の口から出る一つ一つの言葉であった」と思います。

私たちを活かしているのは、「神の口から出る一つ一つの言葉」です。微量の金が混じっている石で活かされているのでもなく、行列ができるほどのパン屋さんのパンでもありません。むしろこの世のパンを犠牲にして、100 年以上前に聖堂を完成させた先祖の祈り、先祖の口を通して唱えられた「神の口から出る一つ一つの言葉」が、私たちを活かしているのです。

悪魔は、この世のものにすぎり、しがみつく人を簡単に誘惑して自分よりも悪い存在にしてしまいます。しかし「神の口から出る一つ一つの言葉」に拠り所をおいて生きる人は、たとえその人がか弱い子どもであっても、誘惑し征服することはできないのです。

神の口から出る一つ一つの言葉は、特にこのミサを通して私たちに豊かに与えられます。悪魔に隙を見せず、神のことばが一人一人を満たし、強めてくださるよう、このミサの中で祈っていきましょう。

四旬節第 2 主日(マタイ 17:1-9)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。



四旬節第2主日(マタイ 17:1-9)

わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです

今日は、初聖体を迎える方々のためにお話をしたいと思います。皆さんがいただく御聖体は、白い小さなパンで、そこにはイエス様がおられます。「アーメン」と声を出して受け取って、舌に乗せていただきます。「聖体拝領」と言います。これから、ミサに出ている大人の人と同じだけ、ミサのお恵みを全部いただけるようになります。だから聖体拝領できるようになった今日は、素晴らしい日です。

このお話の前に、神父様がイエス様の物語を読みました。イエス様と何人かの弟子たちで山に登ると、イエス様が「顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった」(17・2)とありました。弟子のペトロはビックリしましたが、それでも嬉しかったので「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」(17・4)と言ったのです。

イエス様の光り輝く姿を、大人の人たちは「神々しい」と言うと思います。神様にしかできないことを見たり、触ったりする。それを「神々しい」というのです。山の上でペトロとヤコブ、ヨハネの三人は、神々しいものを見たのです。

初聖体の皆さん。皆さんがいただく御聖体のイエス様は、「顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった」あのイエス様と同じ方です。神々しい方です。そのイエス様が、私たちの心と身体に来てくださいます。物語のペトロと一緒に言いましょう。「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。」

初聖体を受ける皆さんのお父さんお母さんも、大切なお子さんが、大切な家族が、初聖体を受けます。この素晴らしい体験を一度きりにすることなく、これからも大切にしてください。御聖体をいただく「素晴らしい体験」を続けるために、田平教会は土曜日の夜7時、日曜日の6時と9時にミサを用意しています。家族でミサに参加し、素晴らしい体験を続けていけるよう、ミサに参加するための時間を確保してください。

イエス様と一緒に山に登って素晴らしい体験をした弟子たちは、もう一つの声を聞きました。光り輝く雲が彼らを覆って「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・6)という声が雲の中から聞こえたのです。

教会にこれから来て、御聖体をいただいて素晴らしいことを味わいますが、では「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声を聞くのでしょうか？中田神父様の答えは「はい」です。聖書を通して、日曜日でしたら三つの朗読を通して、「これはわたしの愛する子ですよ。愛する子イエスの招きに耳を傾けてくださいね」という招きを、父なる神様が日曜日の三つの朗読から聞かせてくれます。

初聖体のお恵みはもうそこまで来ています。「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」の体験はもうすぐそこまで来ています。大きな期待を胸に、このミサを続けていきましょう。



四旬節第3主日(ヨハネ 4:5-42)

行って、ここに呼んで来なさい

3月12日をもって57歳になりました。何かいいことあるのでしょうか？ミサ中に「儀式書」を開く際、指に油がなくて頁がめくれません。歳を取るといえるのはこういうことです。それでもなお、今年一年に良いことがあるのでしょうか？贅沢かも知れませんが、中村大司教様のように、儀式書の頁を隣でめくってもらえる日が来たら、それは私にとっては良いことの始まりかも知れません。

さて朗読された福音は「イエスとサマリアの女」の場面です。今年四旬節は驚きの連続です。黙想会で田平教会の年間テーマを掘り下げるつもりで準備しましたが、講話で用いた聖書の箇所が、今過ごしている四旬節の朗読といくつも重なりました。怖いくらいに重なりました。

朗読された箇所はいくつかの省略が施されていますが、省略をうかがわせる箇所から入りたいと思います。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」(4・42)サマリア人の女性が何かを話しているはずですが、省略された部分はこうです。

「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれない。」(4・29)サマリア人の女性が村人に語った言葉が、中田神父の目に留まりました。多くの村人たちはこの言葉に導かれてイエスを信じました。これはつまり、サマリア人の女性が実行した信徒による信徒のための宣教活動「信徒使徒職」だったのです。

彼女が「さあ、見に来てください」と村人たちに語りかけるまでに、彼女はどのような準備をしたのでしょうか。実は準備をしたのは彼女ではなく、彼女と「永遠の命に至る水」について語り合ったイエス・キリストだったのです。わたしたちの宣教活動も、準備してくれるのはイエス・キリストです。

「わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。」これは女性が村人に語った言葉です。彼女はイエスに呼ばれ、集められて、御父の御心を行う使命を与えられました。きっかけは自分で井戸に水を汲みに行ったことでしたが、そこで導かれたのは偶然ではなかったのです。

私たちに当てはめてみましょう。私たちがこのミサに呼ばれるのも、きっかけは自分でミサに足を運んだことですが、このミサに呼び、集め、御父の御心を説き、使命を与えるイエスの働きは偶然ではありません。最初から私たちを、使命を与えるためにお呼びになっているのです。

あとは、私たちがどう答えるかにかかっています。「さあ、見に来てください」と、生活の中で出会う人を連れて来るのか、生活に戻っても、ここで与えられた恵みや使命を誰にも知らせないで眠らせてしまうのか。私たちがにかかっています。私たちができれば、イエスに永遠の命に至る水を与えられた者として生活に戻りましょう。私たちと出会う人が、「その水をください」と言ってくれるチャンスを届けてあげる人になりますように。

四旬節第4主日(ヨハネ 9:1-41)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

四旬節第4主日 (ヨハネ 9:1-41)

主よ、その方はどなたですか



いよいよ、中田神父にも転勤の時がやってまいりました。「中田神父がいなくなって寂しい」と言う人と、「中田神父がやっと転勤してくれる」と思っている人がいると思います。どちらの人にとっても、私が転勤することは耐震工事を完成させる司祭がやって来るわけですから、良いことです。

長い福音朗読でした。その中で生まれつき目の不自由だった人が、目の前に救い主がいるのを知らずに言った言葉が印象的です。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」(9・36) 彼にとっては、「見て、信じる」ということも生まれて初めて経験することでした。触って信じる、聞いて信じるということはあったかも知れませんが、触覚も聴覚も、きっとこの人には良い思い出が無かったでしょう。

これまで、周りの人は「この人は目が見えないから」と言っていていい加減にあしらってきた可能性があります。「そのへんにあるものでも触らせておけ」「そのへんにあるものを聞かせておけ」そんなひどい扱いをされてきたのではないのでしょうか。そうしたひどい扱いを考えたら、目の前に救い主が立っておられても、「この人だ」とにわかには信じる事ができないのです。

笑うに笑えない体験をしました。書面で転勤先が書かれた任命書が届き、恐る恐るその教会の主任神父様と連絡を取りました。行き先は田平教会よりも信徒の数が多く、三つの教会の主任司祭であり、しかも地区長という肩書きまでくっついていたのです。これを恐れなくて、何を恐れましょう？

相手の主任神父様とのやり取りの一部です。「神父様、私はそちらの教会の主任を拝命しました」「おー、近いうちに引き継ぎをしようか」「分かりました」「ところで、田平教会は耐震補強があるとよね」「そうです。あと二年後でしょうか」「それからさ、教会で所有している車とかあるのかなあ」

「あー、軽トラを置いていこうと思っています」「それはもしかしたら釣り専用のトラックね？」「いえ、そう言うわけではありませんが・・・」私はここまで、電話の相手の神父様が、会話を弾ませるために田平教会の話をしているのだと思っていたのです。すると向こうの神父様がしびれを切らしてこう打ち明けました。「中田神父さん、もしかして状況を分かってないのかな。今回は私とあなたと、入れ替わるとよ」「ええ！」

これには驚きました。電話の向こうの神父様も、次の教会のことを考えなければならぬはずなのに、田平教会のことを根掘り葉掘り聞いてくるなあ、と勘違いしていたのです。

ここでようやく、私の中で今週の福音朗読がすんなり納得できました。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」（9・36,37）声で聞いただけでは信じることができませんでした。実績十分のその人のお名前を祝日表で見て、そうかと納得しました。

中田神父は、霊名が聖トマスなので、「見ないと信じない」人間です。その中田神父に、書面で見える形で次の任地を示してくださったのは、大司教様であり、イエス・キリストです。そして、田平教会の後任の神父様に選ばれた人と電話していたのに気づかずにいましたが、祝日表に書かれた後任の神父様の名前を見て、神の計らいを信じたのです。

神様は通常の任期を一年延ばしてでも、本当に必要とされる方を準備なさったのだと、信じることができました。信じたいと思っている方が目の前にいても気づかない愚かな人間である中田神父に、信じて前に進む力をイエス様は与えてくださいました。皆様とのお別れの時まであと一ヶ月、その思いを（今日は「平戸瀬戸の花嫁」という替え歌に託して、説教の結びとしたいと思います。）この一ヶ月噛みしめたいと思います。

平戸瀬戸 日暮れて 夕波小波
福江教会へ お嫁に行くの
助任司祭の教育 心配するけれど
兄弟司祭だから 大丈夫なの
瀬戸山教会と サヨナラするのよ
かなととはやとが 行くなと泣いた
男だったら 泣いたりせずに
満（みつる）神父様 大事にしてね

四旬節第5主日(ヨハネ 11:1-45)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

四旬節第5主日 (ヨハネ 11:1-45)

その石を取りのけなさい



最近、歳を取ったと感ずることがあります。もう二ヶ月くらい前から、「あー、私は転勤しますって、言わないといけないんだな」と思って、皆さんの顔をまともに見るができなくなっていました。もっと若い頃は、「知らない教会に巡礼気分で行く」そんな感覚でしたが、今は「これから田平教会の家族がまた、知らない神父様と時間をかけて関係を築き上げないといけないんだな」みたいに、家族を残していく感覚があります。

四旬節第5主日A年は、ラザロの死と、イエスがラザロを生き返らせる場面です。私はイエスの一つのことばを皆さんと分かち合いたいと思います。これも年の功でしょうか、新鮮な学びがありましたので分かち合わせてください。

イエスの一つのことば、それは今週のヨハネ福音書 11章 39節「その石を取りのけなさい」です。もう7年も皆さんと一緒に居るので、ただ単にお墓を閉めている蓋の石を取りのけなさいと言ったわけではないだろうな、ということはお分かりでしょう。

そこで、何を「取りのけなさい」と言っておられるのかを考えましょう。中田神父は、皆さんの身近なところに理解の鍵があると思っています。たとえば、夫婦で考えを伝えようとするときに、「これを言ったら機嫌悪くするから、言うのをやめようかなあ」とためらうことがないでしょうか。もうすでに諦めて言わなくなっているかも知れません。

その、「ためらい」はイエスが言っておられる「石」であり、「その石を取りのけなさい」と指摘される部分です。「石」を置いた人がいるし、「石」に遮られている人がいます。両方に、イエスは「その石を取りのけなさい」と言おうとしているのです。

ラザロの墓の前にあった「石」は、生きている人と死んでいる人とを分け隔てる「石」でした。そして死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」(11・39)と言ったように、もはやどうすることもできないもの、諦めと無力感を表していました。

そのすべてに、イエスは答えます。「その石を取りのけなさい」生きている人と死んでいる人を分けるのは石の蓋ではないことを証明するために、イエスは答えてくださったのです。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(11・25)

これは私たちに、次のように当てはめることができるでしょう。夫婦が生き生きとしているのは互いの力関係ではない。家族が生き生きとしているのも、親のおかげだけではない。イエス・キリストが夫婦、家族の中で恵みを注いでくださるおかげ。イエスがいつでも自由に恵みを届けられるように、「その石を取りのけなさい」そう呼びかけているのです。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

私は、イエスの呼びかけに応えるでしょうか。イエスは障壁となるすべてを取りのけて、喜びを届けてくださいます。喜びを受け取れるか否かは、私たちが石を取り除くか否かにかかっています。これからイエスは聖なる三日間を経て復活の栄光に入られます。復活のイエスを迎え入れるために、あなたの中にある石を取りのけますか、取りのけませんか？運命を左右する二週間です。

今年も、何とかして受難の主日までには、御復活までの説教案を用意したいと思っています。今回は紙の印刷はしません。とてもその時間がありません。代わりに、**QR**コードを用意しますので、それをカメラで読み取って、参加していただければと思います。聖なる三日間に参加できない方も、ぜひ先に用意する説教案で、救い主の歩みを一緒に辿っていくことにしましょう。

受難の主日(マタイ 27:11-54)

受難の主日 (マタイ 27:11-54)

今年、自分をイエスのもとに連れて行こう



受難の主日は、聖なる一週間、その中のさらに聖なる三日間を先取りし、平日の参加が難しい人のために十字架による救いのわざを思い起こす大切な日曜日です。あとで聖なる三日間に参加する人には、受難の主日に参加することで直前の心の準備にあてることにもなります。

田平教会の今年の年間テーマは「ここに、イエス様のところに連れていきましょう」です。今日の場面に私たちが連れて来られたら、私たちは最後まで留まることができるでしょうか。怖くてイエス様のもとに留まれないかも知れません。キレネ人のシモンのように、通りかかっただけで十字架を担がされるかも知れない。そうなるとますます、「イエス様のそば近くに」というのはおとぎ話かも知れません。

弟子たちはどこに行ったのでしょうか？受難の主日に選ばれる福音朗読では弟子たちは姿を現しません。聖金曜日のヨハネによるイエス・キリストの受難では、十字架のもとに母マリアと愛する弟子とが立っていました。弟子たちはいったいどこに行ったのでしょうか。

弟子たちが見当たらないのは、福音記者が弟子たちをあえて登場させていないのでしょうか。弟子たちでさえも、怖くてイエスのそばに留まることができなかつた。それを伝えたくて姿が見えない。そうだとしたらイエス様の悲しさはどれほどでしょう。悲しんでくれる人さえ見当たらない中で、イエスはご自分の命をささげるのです。

しかし、わずかの希望はあります。本日の朗読からは見えませんが、百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」と言ったその直後にこう記されています。「またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。」(27・55-56)

「遠くから見守っていた。」これは火の粉を浴びないためです。自分が可愛いからです。私たちも同じです。怖くて遠巻きにしか眺めることができないでいます。「ここに、イエス様のところに連れていきましょう」どころか、「私は遠慮します」と、覚悟も何も見られないのです。

それでも、私たちはこの一週間を過ごします。聖なる三日間に参加する人もいます。今日は怖くて近づけない自分であっても、聖金曜日の受難の典礼には、イエスの母と愛する弟子のように、イエスの十字架のそばに立つ人になりましょう。

今週一週間は、遠くにいる人からそばに立つ人になるための一週間です。怖くて近づけない私をゆるしてくださり、愛してくださるイエスが一日ごとに私たちを引き寄せ、聖なる三日間に招いてくださいます。あなたがもし、生涯一度も聖なる三日間の典礼にあずかったことがないとしたら、今年が初めて参加する年です。今年、自分をイエスのもとに連れて行く歩みが始まるのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

あなたにも、わたしは模範を示した



聖木曜日と聖金曜日は、形は違いますが、イエスが弟子たちにすべてを与え尽くす一日です。聖木曜日は過越の食事の儀式を通して、聖金曜日は命をかけてです。今日、イエスは食事の中でご自身を与えるために、できるすべてのことをしてくださいました。

まずイエスは、この最後の晩餐の席をご自身用意してくださいました。そして食事が始まると、仕えられる者という態度を捨てて、進んで仕える者となられたのです。弟子たちにすべてを与え尽くすため、「先生」という立場さえもご自分のもとに残さなかったのです。

すべてを与え尽くされたイエスが最後に言われたみことばはこうです。「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」 (13・15)

先生がするようなことではなく、使用人がするようなことを模範として示された。それは、委ねられた務めの中で、出し惜しみをしてはならない。報いすらも期待してはならない。そうしてすべてを与える者となりなさい。これが最後に与えられた命令だったのです。

イエスが最後に残された模範を見るために、私たちは今晚ここに集まりました。このあと、洗足式があります。何人かの人が弟子の役割をお願いされています。足を洗ってもらうご方々は、自分は教会の中で、どうやって惜しみなく自分を与えることができるだろうか、考えるチャンスを与えられました。

実は足を洗ってもらう様子を見るほかのすべての参列者も、足を洗ってもらっている人を通してあなたも足を洗ってもらっているのです。足を洗ってもらっている人を見て自分も考え、どうやって惜しみなく自分を与えることができるだろうか、見ている間ずっと考えるのです。

聖木曜日に見たことを、私たちはどこで見倣ったら良いのでしょうか。まずは自宅です。自宅で同居する人との間で、仕えられる者ではなく仕える者となりましょう。「家庭で何かしらの手伝いをする」それでも良いでしょう。あるいは一緒に暮らす人に「これまでかけてこなかった言葉をかけてあげる」でも良いでしょう。私たちは仕える者となるための何かができるはずです。

次、もう一度私たちが聖堂に集まるのは聖金曜日です。「ここに、イエスさまのところに連れていきましょう」年間テーマを実行すべきです。交通手段がなくて聖金曜日に来ることのできない人もいるかも知れない。「私がその人の車椅子となり、杖となつてあげる」こうして自分を砕いてお手伝いしてあげてください。そうすれば必ず、弟子たちの足を洗ってくれたイエスに倣うことができるでしょう。

ペトロは自分の足を洗おうとするイエスにこう言いました。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」 (13・9) イエスの模範に倣うためには、頭も、一から洗い直さなければなりません。イエスが私たちの不足を洗い流し、主の晩さんにふさわしいものとしてくださるよう、心を合わせて祈りましょう。洗足式にあずかり、また見ることによって、イエスの模範を確かに受け取りましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

イエスは神の国の生き方で私たちを救われた



「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」(18・9)。中田神父はイエスの語られたことばに下を向くしかありません。一つは、イエスのことばを、私は今日まで見つけることができなかったからです。もう一つは、田平教会の七年間で、きっと何人もの人を失った、父なる神様が与えてくださった人を何人も失ったからです。

今年も私は受難の典礼を始めるにあたり、床にひれ伏しました。ただ今年は、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」そういう思いからひれ伏してはいませんでした。ただひたすら、「あなたが与えてくださった人を何人も失いました」その後悔と、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

そして、主イエスが成し遂げたことに比べて、私が果たせたことはあまりにもつたないと感じたのです。主は「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言っているのに、私は「何人かは失ったかも知れない。けれどもその代わりにこれこれのことを成し遂げた」と強がっているのです。

主イエスは「一人も失いませんでした」と父なる神に感謝しますが、ご自身の命を失ってしまいました。主イエスにとって、ご自身の命をなげうってでも、御父が与えてくださった人々を一人も失わないことは大切でした。それなのに中田神父は、「何人かは失ったが、それを上回ることをした」と言い張っているのです。

どんなにイエスの思いから遠かったことでしょうか。イエスの思いを知らずに、こんなにも長い間主イエスに成り代わって祭壇上でいけにえをささげていたのです。どんなに恥知らずだったことでしょうか。そんな愚かな司祭のためにも、主イエスは十字架にかかってくくださったのです。

ここにお集まりの皆さんが、中田神父と同じような体験をしていたら、ここに集まっていることはすばらしいことです。今の今まで私たちは、自分だけは生き残ろうとしてきました。生きようとする人にとってそれは自然なことですが、この世の生き残り方では誰かが犠牲になってしまいます。私たちはどこかでそれに目をつむってきたのです。目をつむってきた私を、ここに、イエスさまのもとに連れていきましょう。

この世の生き残り方では、私もイエスを十字架に付けてしまいます。イエスは「羊のためにいのちを捨てる」方です。神の国の生き方で私たちを救ってくださったのです。私たちは神の国の生き方を忠実に生きられない弱さを認めます。

今はただ感謝しましょう。一人も失わないために、主は自らを犠牲にしてくださったのですから。私たちは一人も失わないよう全力を尽くしてくださった主によって生かされているのです。「生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」(ローマ 14・8) 胸を打ちながら「主は私たちの救い」と唱えて、今日の典礼に最後まで参加することにしましょう。

復活徹夜祭(マタイ 28:1-10)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

復活徹夜祭 (マタイ 28:1-10)

家族



主の御復活おめでとうございます。今年は中村大司教様の「ご復活の喜びの手紙」を復活徹夜祭の説教としたいと思います。手を加えるのは最小限にとどめて、大司教様の皆様への手紙を読み上げます。

2023年 ご復活の喜びの手紙 「おはよう」

大司教 ペトロ 中村 倫明

子どもたち、青年の皆さん、大人の皆さま、イエスさまのご復活おめでとうございます。

(質問) 復活のイエスさまが 一番初めに話された言葉は何？

のっけから申し訳ございません。イエスさまがご復活なされて、一番初めに話された言葉はどんな言葉でしたか？マタイの福音書に記してあります。どうぞ聖書を開いて確かめてみてください。

復活されたイエスさまが、ご自分のことを最初に示されたのは、女性の方々にでした。それは、女性たちが、安息日が終わるとすぐにイエスさまのご遺体のところに向かったからかもしれません。いくつかの聖書によれば、「香料と香油を塗るために」(マルコ、ルカ)とあります。

ところが、イエスさまは墓の中にはおいでになりませんでした。復活なされたことを天使から知らされた女性たちは、そのことを弟子たちに伝えに向かう時に、イエスさまは女性たちに現われて、「おはよう」と声をかけてくださいました(マタイ 28・9 参照)。イエスさまが復活されて、最初に話された言葉は「おはよう」です。

確かに、別の福音書(ヨハネ福音書)では、イエスさまのご遺体が墓にないことを悲しんでいるマグダラのマリアに「なぜ泣いているのか」(ヨハネ 20・13)という言葉をかけておられて、この言葉がご復活後のイエスさまの一番初めの言葉として登場しています。

この言葉にも、わたしたちに対するイエスさまの深いいつくしみを感ずますが、より「おはよう」という言葉にはそれを感じますし、やはり一番初めの言葉は「おはよう」ではなかったかと思えます。このことは、その後、弟子たちにイエスさまがご出現なされた時におっしゃった言葉からも、想像できそうです。

イエスさまが弟子たちにおっしゃった言葉

弟子たちは、イエスさまを十字架に付けたユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけ隠れていました。そこにイエスさまが現れておっしゃいます。「あなたがたに平和があるように」(ヨハネ 20・19,26、ルカ 24・36)。

この時にイエスさまが用いられたヘブライ語は「シャローム」ではなかったかと思われます。シャロームは、文字通りには「平和」を意味する言葉ですが、人々は「おはよう」とか「こんにちは」などのあいさつとして使っている言葉です。ですから、やはり、「おはよう」という言葉を、復活後のイエスさまは、一番初めに語っておられたのではない

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

でしょうか。

わたしたちが普段に使う言葉

わたし中村倫明大司教は今年の新年号でお願いしました。「声をかけていこう」と。

声をかけておられますか。教会の行き帰りに、出会う人たちに声をかけていますか。その中でも、「おはよう」という言葉は、出会う時の普段の一番初めのあいさつの言葉です。この普段のあいさつを大切に丁寧に行っているでしょうか。出会う人を無視したり、無愛想で笑顔でなかったりしていませんか。ちゃんとわたしたちは基本的なあいさつや対応ができていますでしょうか。

聖書の「おはよう」

面白いことにこの普段の基本的な「おはよう」という言葉は、聖書の中では、ご復活の場面にしか登場しません。もちろん、普段の言葉ですので、ことさら記述することもなかったでしょう。ならば、ご復活の時の特別な記述の「おはよう」には特別の含みがあるはずですよ。

英語では「good morning」（良い朝）。「良い朝ですね。良い日になりますように」という思いがあるのでしょうか。雨が降っても「グッドモーニング」です。そして、ご復活の時の「おはよう」は、まさに「おはよう」の中の「おはよう」です。

だってイエスさまは3日前に亡くなって、墓に葬られていました。「おはよう」と言える朝が来るなんてありえない「おはよう」なんです。あるいは、もしそこに言葉が存在するなら、「おはよう」よりも「うらめしや」「おれを見捨てたな」「呪い殺してやる」の言葉が人間の世界かもしれません。でも復活の世界は、何もなかったかのように、いつものように「おはよう」で始まっていきます。

以前、聖フランシスコ病院の玄関に立つ機会がありました。ある日、知っている方がやってきて、笑顔で「おはようございます」と声をかけてもらいました。「何事ですか？」と尋ねると、「おふくろが危篤で呼び出されました」。わたしは言葉が出ませんでした。次の日、「おはようございます」と同じ方でした。「どうでしたか」勇気を出して尋ねました。「まだ頑張っています」うれしかったです。3日目、同じ方が「おはようございます。お世話になりました。今から葬儀の準備です。お祈りください」。悲しいのにつらいはずなのに、感謝を知っている人の「おはよう」でした。

ならば、復活の主に出会ったなら、どんな時だって「おはよう」です。苦しくつらい時も悲しい時も、過ちや罪を犯しても、どんな時だって、復活された主はともにおられます。

あらためてお願いいたします。「主はともにおられます」「主の平和がありますように」の思いを込めての、わたしたちの「おはよう」の声かけを復活させていきましょう。

子どもたちへ

「オッハー！」（だいぶふるいかなあ）

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

後任の神父様も、田平教会に「来なさい」と呼ばれた



あらためて主の復活おめでとうございます。復活徹夜祭は、中村倫明大司教様の復活の喜びの手紙をお借りして届けました。この復活の主日日中のミサの説教は、私の言葉で伝えたいと思います。

復活徹夜祭の説教を通して、私たちは復活したイエスさまの「おはよう」を聞ききました。イエスさまの「おはよう」「平和があるように」を聞いた人たちは、自分のしなければならないことにすぐに気づき、動き出します。マグダラのマリアは弟子たちのところに走って行きました。

ヨハネ福音書ではありませんが、エマオに向かう弟子たちもイエスから使命を託され、すぐに使徒たちのもとへ走って行きました。ここでは「おはよう」「平和があるように」以外のほかの言葉でしたが、復活したイエスから声をかけられた人は、使命を感じて出かけていくのです。

では私たちはどこで、イエスの声を聞くのでしょうか？「おはよう」「平和があるように」またはその他の声かけを、どこで聞くのでしょうか。いろんな考えがあるかも知れませんが、私たちを田平教会聖堂に集めてくださる声が聞こえた場所が、「復活したイエスが声をかけてくださった場所」ではないか。そう考えています。

中田神父は七年間、評議会の役員に一つの声をかけ続けました。「困った困った。」「お酒があるぞ」とか「おいしいケーキがあるぞ」ではありません。いつも「困った困った」と声をかけていました。するといつもすぐに役員の方が「どうしましたか？」と飛んできてくれました。

中田神父の「困った困った」は、評議会の役員からすれば、「あー。すぐに来い」ということだなと理解して、本当にすぐに来て用件を聞き、対処してもらいました。福江にこのまま連れて行きたいくらいです。

イエスも、皆さんを田平教会聖堂に集めるために、巧みに声をかけてくださっています。私たちはただ単に「来なさい」と言われてもすぐには動かないことが多いのです。そこで、一人一人、気が付いたら田平教会聖堂に集められている。そんな仕掛けを、復活したイエスさまは用意するのです。あなたがどうしても、この聖堂に集まって復活を祝う気になるように、工夫して声をかけておられるのです。

「中田神父は、あと2回しか田平で日曜日のミサをしないよ。行く？行かない？」そんな形で「来なさい」と呼びかけるかも知れません。「今年は何回、ミサに行ったかな？」そういう呼びかけかも知れません。「家族のために、みんなで祈ってもらったら？」この声かも知れません。

つまり、復活したイエスの声は、日常生活の中で聞こえるということです。その声はあなたを田平教会聖堂に導きます。あなた自身をこの聖堂に導くだけではありません。あなたの家族も、あなたの友人も、導きが必要としているすべての人も、「来なさい」と呼ばれています。

田平教会聖堂には、復活したイエスから、もう一人「来なさい」と声をかけられました。それは後任の主任神父様です。後任の神父様は初めて平戸地区で司牧活動を始めます。どうか、惜しみない協力をお願いします。復活したイエスの声に、田平教会家族はきっと応じてくれる。そう信じています。

神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

イエスが鳴らす教会の鐘に応えるのはあなた



皆さまと主日のミサをささげるのも最後となりました。今週は「神のいつくしみの主日」と名付けられた主日です。長崎教区で転勤の絡む教会は、ほとんど、今週がお別れの説教となっていることでしょう。

福音朗読は復活のイエスが弟子たちに現れる場面、特にトマスにあらためて現れる場面が選ばれます。今日の説教、わたしたちすべてが神のいつくしみを感じるための助けになればと思います。

イエスがお亡くなりになった後、弟子たちは心を閉ざし、家の戸にも鍵を掛けて隠れるようにしていました。誰に従って生きていけばいいのか、何を頼りに生きていけばいいのか、全く分からなかったからです。

そこへ、復活したイエスが現れてくださいました。戸に鍵が掛けているのにおいでになったのですから、心理的・物理的、あらゆる形で自分を閉ざしていても、復活した主はおいで下さり、わたしたちを解放して下さることが分かります。

復活したイエスはすべてを閉ざしていた弟子たちに現れて、何を仰ったのでしょうか。いちばん印象的な言葉は、「あなたがたに平和があるように」(20・19)というものでした。この点に絞って、わたしの考えをまとめたと思います。

復活した主がおいでになる前、弟子たちの心は不安でいっぱいだったでしょう。「不安」は「平安」がない状態です。どんな平安が奪い去られていたのでしょうか。何より、従っていく相手を失ったことです。エマオに向かう弟子たちは、次のようにイエスを言い表しました。「この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。」(ルカ 24・19) 誇りを持って、胸を張って従っていく。その相手を失ったのです。

従っていく相手を失ったことで、何を頼りに生きていけばいいのか、全く分からなくなりました。かつて2人ずつ組になって町々に出かけ、宣教しましたが、今はそのことも思い付きません。「わたしたちにも祈りを教えてください」(ルカ 11・1)と願って教えていただいた「主の祈り」を唱えてみることも思い付きませんでした。何かの抜け殻のようになっていたのです。

そこへイエスが現れ、「あなたがたに平和があるように」と仰いました。何もかも奪い取られ呆然としていた弟子たちに、復活したイエスが現れ、すべてを取り戻してくださったのです。弟子たちはこれまで通り従っていく相手を取り戻し、頼りにすべき道標を取り戻したのです。

イエスは「あなたがたに平和があるように」と言いました。すなわち、不安のどん底に突き落とされていた弟子たちを、まずは引き上げてくださったのでした。細かいことを言う前に、根本的な部分に救いの手を差し伸べてくださったのです。

「弟子たちは、主を見て喜んだ」(ヨハネ 20・20)とあります。喜びが満ち始めれば、あとは問題ありません。必要な指示を与えさえすれば、弟子たちは本来の姿に立ち帰っていきます。

心が喜びに満たされたところで、イエスは弟子たちに指示を出します。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」(20・21) 「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(20・22-23) 弟子たちはもはや以前の抜け殻ではなく、よく準備された状態にすっかり戻っていたので、イエスの指示に耳を傾けることができたのです。

トマスは、イエスの最初の出現に立ち会うことができませんでした。それでも、トマスもその後のイエスの出現で「信じない者ではなく、信じる者に」(20・27) 変わります。トマスの中にも喜びが満ちて、「わたしの主、わたしの神よ」(20・28) と答える人になっていきます。

喜びが満ちあふれば、人は、イエスの証し人として十分働けるようになります。イエスの復活後の弟子たちがそうでした。同じことはわたしたちにも当てはまります。わたしたちの心が平安であり、喜びが満ちあふれているなら、イエスの証し人として働くことができるのです。

問題は、どのようにしてわたしたちが平安を得て、喜びに満ちた人になるかということです。答えは身近にあります。ふだんの生活で、当たり前のように実行していることです。「どこに、何があるかを知っていること。」これは信仰生活にも当てはまります。

わたしたちが信仰者として必要なものが、どこにあるかを知っているなら、当然そこへ行くことで平安を得て、喜びが満ちあふれるはずで、信仰者に必要なものは、どこへ行けば手に入るのでしょうか。疑いもなく、教会へ行くということです。「ここに、イエスさまのところに連れていきましょう」

教会は司祭の手を通して皆さんを招き、集会祭儀を開き、秘跡を授け、恵みを与えます。その最初の合図は、本来は教会の鐘だと思います。今、田平教会は鐘の修理が必要で鳴らすことができませんが、心の中では教会の鐘の音が聞こえていると思います。教会の鐘は始まりを知らせ、信仰者を集めるためです。

今から鳴らすのは、献堂百周年の頃に録音しておいた田平教会の鐘の音です。この鐘、修理が済めばいつか鳴らすことができるようになるでしょう。

そこで、皆さんへの置きみやげに、歌を歌って説教の結びとしたいと思います。「あの鐘を鳴らすのはあなた」和田アキ子さんの代表曲です。わたしがこの歌に込める思いは、信仰者を呼び集め、秘跡を執行して恵みを授ける、そのしるしとなる教会の鐘を鳴らす人がこれからもずっと必要で、鳴らすのはあなたですよ、ということです。

実際に鐘を鳴らしているのはシスターや数人の信徒だけですが、鐘を鳴らす人の背中を押し続けているのは皆さんお一人お一人です。イエスさまがあなたを教会に呼んでいますよ、あの鐘の音に応えるのはあなたですよ。そういう気持ちを込めて歌いたいと思います。

「あの鐘を鳴らすのはあなた」

作詞 阿久 悠

作曲 森田 公一

まもなく、新しい主任司祭がやってきます。次の主任司祭も、皆さんを祭儀に招き、秘跡を執行し、恵みを届けます。わたしも、新しい教会の鐘を鳴らすために、旅立ちます。

復活節第3主日(ルカ 24:13-35)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2023/4/23(No.1234)

復活節第3主日 (ルカ 24:13-35)

大阪ではふつうに「エマオでの道で」をやったぞ



これからこの福江教会でお世話になります中田輝次神父です。出身教会は上五島の鯛ノ浦教会です。「あっぱよ」「ぎーまよ」「ほんなごてや」「なんのそーん」「およおよ」「およさよ」全て通訳なしで理解できます。しかし「ばえ〜」だけは上五島は使いません。ここに居る間に通訳なしで「ばえ〜」と言えるようになりたいです。

スマホをいじっている方は YouTube の「こうじ神父」というチャンネルで、すでに中田神父のことをご存知の方もおられるでしょう。もし登録がお済みでなかったら必ず「こうじ神父」でチャンネル登録をしてください。他にも、日曜日の説教を、文字で読むことができます。同じく「こうじ神父」でブログを検索してください。

今週の説教は、一つのことを伝える。これだけ実行していただければ結構です。盛りだくさんの内容に目移りせず、持ち帰ってほしいのの一つです。福音朗読で弟子たちが、歩きながらイエスさまについて起こった一切の出来事について話し合い論じ合ってエルサレムからエマオという村に出かけていった。これを実行してほしい。これだけです。

さて中田神父も、この福江教会に着任するまでに一連の出来事がありました。中村大司教様は私を含め 50 代後半の神父に、地区長の教会に赴任するよう打診しました。浦上教会、滑石教会、青方教会、福江教会です。ある神父様は「考えさせてほしい」と保留し、ある神父様は「無理です。務まりません」と言いました。中田神父はたまたま直接お目にかかったときに打診を受けたのですが、「大司教様の決めたことですから、何も異存はありません」と答えました。それが正しかったかどうかは、今後の結果が全てだと思っています。

辞令を公式に発表することができる 3 月 19 日、「瀬戸の花嫁」の替え歌を歌いました。歌っていいですか？ダメと言われても歌うつもりでした。小学校の時から音楽は「2」、小神学校と大神学校での聖歌隊試験もことごとく落第しましたが、いつもこの歌をその教会に合わせて替え歌して歌ってきました。

田平教会を離れるときは、四弦の「一期一会」という、三味線とギターの「間の子」の楽器で「島人ぬ宝」の替え歌で離任しました。一節だけ披露しましょう。「ぼくが赴任する下五島のことをぼくはどれくらい知ってるんだらう。浜脇教会も井持浦教会も名前を聞かれても分からない」

正直に話します。下五島地区のことを中田神父は何も知りません。下五島地区のカトリック信者がどんな暮らしぶりをしているのか。長崎の町の教会と比べて、重い負担を担っていたりしないか。信者としての恩恵を下五島地区が教区の中で公平にあずかっているのか。いろいろ心配していたらこんなにハゲてしまいました。

中田神父は付き添いの人と一緒に 19 日夜の 12 時ちょっと前に博多

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

港からフェリー太古に乗り、20日の朝8時15分に福江港に着きました。船の中でお付きの人たちとあれこれ話しながら、議論しながら向かったのです。実はそこに、復活したイエスさまがおられたのです。「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」(24・17)。不安や心配やさまざまな疑問、課題を、人間の知恵だけでああでもない、こうでもない議論していたのです。

イエスははっきりと道を示してくださいました。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」(24・25-26) 復活したイエスがどこに行ってもどこにいてもそばにいてくれる。何を戸惑うことがあるだろうか。何を恐れることがあるかと。

大阪に、上五島仲知教会出身の前田万葉枢機卿様がおられますね。私は枢機卿新任のお披露目ミサに参加したのですが、教会近くまで途中電車に乗りました。その電車で、信じられない光景を見ましたよ。こんな感じでした。

「前田さんは枢機卿になったんやてなあ」

「そうや、教皇様から選ばれたんや」

「そしたら、忙しゅうて大阪のことには手が回らんようになるんかいな？」

「んなことはあれへん。枢機卿を補佐するようにて、司教を二人付けてくれはったんやから」

「ほな、前田さんが枢機卿なら、教皇様になる可能性もあるんちゃうか？」

「そらないやろ。教皇様は世界の教会のリーダーやけど、日本の教会はまだ世界をリードする教会には育ってへんからな」

中田神父はこの会話を、真向かいに座って聞いていたのです。大勢の人がいる電車の中ですよ？すぐにエマオの弟子の物語を思い出しました。そしてこう考えたのです。「大阪には道すがら、自分たちの枢機卿の話をして帰る『エマオの弟子』みたいな人がいるんだ。」

なぜこの話を持ち出したと思いますか？皆さんも、真似をしてほしいからです。今日、家に帰るまでに、今週、家から職場に出かけるまでに、公共の乗り物の中で枢機卿様の話をしていた大阪の信徒のように、皆さんも「福江に中田神父が来た。中田神父はどんなことを私たちのためにしてくれるだろうか」と、声に出して欲しいのです。

エマオの弟子たちが、イエスのことを話し、議論していた。議論しても答えは出なかったけれども、復活したイエスがそばで支え、導いて、彼らはイエスの復活の証人になりました。皆さんも、復活したイエスの証人になる。ならなければいけません。何かを知らせるために、イエスさまは中田神父を福江教会に派遣しました。下五島地区に派遣しました。私が皆さんに最初に知らせたいことは一つです。あなたも、あなたも、エマオの弟子のように今起こっていることを帰り道話題にしてほしいのです。

復活節第4主日(ヨハネ 10:1-10)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

復活節第4主日 (ヨハネ 10:1-10)

「門」「門番」になってくれる人を支えてほしい



「わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」(10・9) 「門」は、「門番」でもあります。すべての人がこの門、また門番を通過して豊かに命を受けます。中田神父は「見える姿の門番」として、井持浦小教区・浜脇小教区・福江小教区に派遣されました。

三十年の司祭生活を経て、ようやくこの小教区の門番を任されました。この門を出入りして、この教会のみことばと御聖体で、説教で、豊かに命を得ることができるよう、精一杯尽くしたいと思います。今日は「世界召命祈願の日」ですから、召命に結びつけて話したいと思います。

中田神父がこの教会の門を開くまでに、たくさんの出会いをしました。たくさんの人に助けられてきました。その最初の出会いと言える体験を、今日は話したいと思います。今から四十年以上前の話です。

当時私はすでに神学生でした。夏休みの終わり、8月31日、五島から神学校に帰る日のことです。前の日に私は荷物を準備し、翌日いつものように神学校に帰る予定でした。ところが8月30日の夜中に、弟がひどい熱を出して、救急車で病院に運ばれていきました。

母もいっしょに病院に行きました。その時母は、「自分で何とかして帰りなさい」とだけ言って病院に行ったのです。けれども困ったことに私は母親からお金を1円も預かっていなかったのです。バス代も、船賃もありませんでした。

悪いことは続きます。バス停に行ってみると、もうバスは出発していました。私が時間を間違えたのかも知れません。当時、鯛ノ浦から奈良尾フェリーターミナルに行くためには、バスに2時間以上乗らなければなりません。お金は持っていないので、もうほかに港に行く方法はありませんでした。

悲しくなって、バス停に立ち尽くしていると、知らないおじさんが声をかけてきました。「あんた、輝明さんとこの神学生やろ」「はい」「神学校に今日帰るとね?」「はい、けれども、バスに乗り損ねて行けなくなりました。」私は前の日からのことを話して、もうバスもないし、帰ることが出来なくなったと話しました。泣きたい気持ちでした。

すると、そのおじさんはポケットからお金を出して、私に握らせてくれました。一万円でした。当時の一万円です。今なら五万円の価値があるでしょう。おじさんは私に、「タクシーばつかまえてすぐ港に行かんね」と言ってくれました。

私はお礼を言わなければいけないので、「おじさん、名前を教えてください」と言いました。するとそのおじさんは、「おじさんはおじさんたい。子どもは心配せんでよか。はよう行け」と言って、いなくなりました。

今でも、そのおじさんの名前は分かりません。生きていたかどうかとも分かりません。けれども、そのおじさんは神学生になったばかりの私、海の物とも山の物とも知れぬ私に大金をくださったのです。四十年前の一万円を、惜しげも無く、「この子が将来司祭となって、イエス様の代

理として教会の門番になってくれればそれでいい」ただそれだけで、差し出してくれたのです。

そのおじさんは、実際には聖書や信仰のことを話したわけではありません。けれども、イエスの教えを完全に実行したと思っています。災難の前に打ちひしがれている哀れな神学生を見て、私より先にイエス様の「門」「門番」になってくれて、神学校に無事に導いてくれたのです。「あなたもこのような門番になれ。迷える羊の羊飼いになれ。」姿で、教えてくださったのです。

当時のおじさんのことを、私は決して忘れません。おじさんは私に、羊の門であるイエス様をはっきりと示してくれたのです。私のように、途方に暮れている人を見つけて、一人でも多く教会の門をくぐらせてくれよと、態度で教えてくれたのです。

タクシー代を持たせてくれたおじさんに、私は返すものが何もありませんでした。一万円よりも尊いものを、私は持っていなかったのです。けれども、私が司祭を目指している。イエスのために長崎で勉強している。それでおじさんには十分だったので、託してくれたのです。

さて今日は、「世界召命祈願の日」です。イエスは今でも、私たちに声をかけて、「わたしについて来なさい」と言っています。父や母を愛することは当然のことです。親が、息子や娘を愛することも当然のことです。それでも、神のことを優先する人がいます。神の招きが何よりも大切だと感じた人は、今までいちばん大事だと思っていたものでも、順番を一つ下げることができるのです。

そしてそれはイエスの時代だけでなく、今でも続いているのです。私が出会ったおじさんは、ポケットの一万円を、他のことにも使えたはずですが、けれども考えていた順番を一つ下げて、神学校に帰れなくなって困っている少年に使うことにしたのです。神様のためにお金を使うことを、順番を最優先にしてくれたのです。

長崎教区で、社会人から神学校に入った人たちがいます。私の知っている人を二人挙げます。上五島・曾根教会の青田神父様、また大村・水主町教会の山田良明神父様。いずれも社会人としてすでに立ち位置があった人でした。能力もあり、社会で成功できる人でした。それを、神のために順番を一つ下げて、神の招きを最優先にして司祭となられたのです。喜んで、イエスに仕える人になったのです。

私たちも、見倣うことができると思います。イエスが期待しておられることに照らして、自分の生活で何が優先なのかを考える。いざとなったら、今まで最重要だった目の前のものの順番を一つ下げる。それは痛みを伴うかも知れませんが、実行すれば周囲の人を驚かせる証になると思います。「カトリック信者は、今日の前のことよりも、神様のことを優先できる人なんだな」と、尊敬してくれると思います。

「この世のものの価値を、永遠のものの価値と置き換えることはできません。これが私の信仰です。」この一言だけ、イエスに返事をして今週も生活に戻っていきましょう。その答えがあれば、生活すべてに、神の心にかなう順番を付けることができるようになるはずですよ。

復活節第 5 主日 (ヨハネ 14:1-12)

通らなければならない道をきっちり通りましょう



先週、教区評議会総会がありまして、前任地田平教会の新しい議長になられた方とお会いしました。その際お菓子を二種類頂きまして、そのうちの一つは「平戸こいしや」というお菓子でした。平戸ではよく知られたお菓子です。でも心の中でこう思ったんです。「これは、食っちゃいけない。」どうしてだと思いませんか？

中田神父は意地悪な人間なので、答えを言わずに説教の本題に入ろうと思います。イエスはこう仰いました。「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」(14・4)けれどもトマスは理解していません。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」(14・5)

トマスが福音書で登場する場面が三つあって、そのうちの 하나가ここですが、トマスはどんくさいですね。三回とも、格好悪い役回りで登場します。トマスの霊名をいただいている中田神父は、一回くらいは格好いい場面で登場していたらとどんなに思ったことでしょうか。

イエスはこのどんくさいトマスも含めて、どのようにして弟子たちが「父に至る道」を知ることができるかを教えてくださいました。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」(14・6) イエスを通ることで、弟子たちは「父に至る道」を知ることになります。これから、弟子たちは皆、イエスを通られた道を通して、御父に至るのです。

イエスを通られた道。それは易しい道ばかりではありません。「イエスがガリラヤ中をめぐるって宣教された」それを同じように見倣うだけなら、そう難しくはないでしょう。しかしイエス様は血の汗を流すほど悩み苦しまれたのです。むち打たれ、茨の冠をかぶせられ、十字架にかけられ、槍で貫かれたのです。ありとあらゆる苦しみを通られたのです。

弟子たちも、この道を通らなければなりません。イエス様ですら、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」(マタイ 26・39)と願った道ですが、それでも通らなければ御父に至ることは叶わないのです。

そしてこの、イエスを通られた「父に至る道」は、十二人だけに要求していることなのではないでしょうか？いいえ、違います。洗礼を受けてキリスト者になったすべての人にイエスは同じことを求めるのです。「あなたも、わたしを通らなければなりませんよ」今もイエスはそう言っておられるのです。

「こんな道は通れない。」誰にとってもそのような体験はあるでしょう。恥をかかされるようなことや、自分を捨てなければとても引き受けられないようなことを、あるとき強いられるかも知れません。しかし、キリスト者であればどんな人も、それぞれ置かれた場所で、イエスを通られた道を通らなければならないのです。同じ道を通らなければ、私た

ちは御父のもとにたどり着けないのです。

教区評議会を終えて、中田神父は三日間実家の鯛ノ浦に帰りました。茨城に住んでいる妹と、私の甥っ子になる妹の子が、里帰りしていました。甥っ子は小学六年生ですが洗礼を受けていません。カトリックのことを全く知りません。ですから私を呼ぶときに、「おー、こうじ神父。ひさしぶり」と呼びます。カトリックの中で育っている中田神父は「何を！」と思いますが、カトリックの中で育っていなければ、「こうじ神父。今度また会おうね」と言われてもしかたがありません。

そこで私は、木曜日と金曜日、甥っ子を朝5時半に起こして、ミサに連れて行きました。「わたしを見た者は、父を見たのだ」(14・9)これを体験させるためです。「こうじ神父」に過ぎない私を通して、何か聖なるもの、見えない何かに中田神父がお仕えしていることを感じさせるためです。いつか甥っ子も、「おーい神父」から「神父さん」と呼んでくれる日を、もっと言えば洗礼を受けて「神父様」と呼ぶ日を、ひたすら願い続けています。

冗談と思われるかも知れませんが、今週の説教をこう結びましょう。「主任神父様、なぜ『平戸こいしや』を食べてはいけないのか、わたしたちには分かりません。どうして、その理由を知ることができるでしょうか。」

中田神父は言った。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも私を理解できない。」これから数年間、中田神父の言葉と行いを通してください。そうして初めて、私が皆さんをどんな方法で御父のもとに連れて行こうとしているのかが分かると思います。

復活節第6主日(ヨハネ 14:15-21)

復活節第6主日 (ヨハネ 14:15-21)

あなたが、これから人を喜ばせる「ルルド」になる



復活節第6主日を迎えました。来週からの一連の祭日で復活節が締めくくられ、年間の主日に移っていきます。一連の祭日を覚えましょう。「主の昇天・聖霊降臨・三位一体・キリストの聖体」です。これに「イエスのみ心」も付け加えると、五つの祭日がこの順番でやって来て、典礼暦は復活節から年間へと移っていきます。典礼暦をお勉強している子どもたちには、すごく役に立つ知識です。

今週の福音朗読は、朗読の始まりが「わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」(14・15)、朗読の結びが「わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である」(14・21)となっていて、「イエスを愛することと掟を守ることは、互いに密接な関係がありますよ」そう教えてください。

イエスを心からお慕いし、敬っているなら、喜んで掟を守るでしょうし、神が示される掟を守る原動力は、いつもイエスへの愛から出ているのです。私たちが日々カトリック信者として実行している掟は、イエスを愛している証しにもなっています。さらにイエスへの愛と、守るべき掟は互いに関係して、聖霊の恵みが豊かに湧き出る泉となるのです。

5月14日、下五島地区で四年ぶりに地区の行事として井持浦ルルド祭が行われます。ルルドの由来は、1858年、ベルナデッタがマッサビエルの小さな洞窟で聖母の出現を受けて、近くに住む人々が集まるようになり、それから多くの巡礼者も集まって祈りの場所になっていった、そういう場所でした。

ベルナデッタは聖母マリアの出現の前も出現後も、変わらず真っ直ぐに神様を見つめる目を持っていました。澄んだ心と目を持っていた彼女に、聖母マリアは現れてくださいました。マリアはベルナデッタに、15日間続けて洞窟に来るようにお願いします。神様への敬虔な心を持っていた彼女は、素直にこのお願いに従いました。神様への愛が、約束を守るベルナデッタの原動力でした。

2月25日のご出現のときです。「そのお方」は水をすくって飲むようにお命じになります。けれども洞窟のくぼみに水はなく、近くの川に行って水を飲もうとしましたが、「そうではなく、洞窟から水を汲んで飲み、顔を洗いなさい」と促されました。

泥を手ですくってみますが、少しの水しかなく、しかも泥だらけです。三回、すくってはその水を捨てました。四度目に、ようやく水を飲んだのです。ベルナデッタの目には「水のない場所」でしたが、「そのお方」の言葉を信じ、神様への愛に動かされて、命じられたことを実行したのです。

実はこの日のうちに、二人の人が洞窟の水を瓶に詰めて持ち帰りました。一人は病気の父親に飲ませようと考えた人、もう一人は片方の目を病んで眼帯をしているたばこ屋の息子でした。二人目のたばこ屋の息

子のほうは、何と数日経って眼帯が取れていました。

さて、2月25日の聖母マリアのご出現を中田神父はこう考えました。のちにルルドとして知られるこの洞窟で、水のない場所から水を飲んだのです。実際、水は見つけれず、ベルナデッタは別の川から水を飲もうとしていたのです。「水のないところから水を飲んだ。」それがルルドの最初の出来事だったのではないのでしょうか。

私たちは、井持浦ルルド祭を祝っています。私たちがここをルルドと言うなら、それは「聖母マリアを通して、水のないところから水を与えてくれる神様を信じている」ということになります。ベルナデッタが、水なんて流れていないと考えていた場所を、神様は水の湧き出る場所にしてくださいました。聖母マリアを通して、それは実現しました。

私たちはこの一連の出来事を信じているのでしょうか？この井持浦ルルドもまた、私たちに信仰の豊かな水を湧き出させてくれる場所だということを知っているのでしょうか。そこからさらに、お一人お一人の生活そのものが、イエスを愛し掟を守るなら、聖霊の豊かな恵みが湧き出る泉となる、いわば「ルルド」となることを信じているのでしょうか。

結婚生活に置かれている人は互いに相手信じ、イエスを愛し掟を守ることで、この生活を聖霊の豊かな恵みが湧き出る泉、ルルドにすることができます。そのことを信じているのでしょうか。親子での生活も、親が子どもを信じ、子が親を信頼する中で、家庭を聖霊の豊かな恵みが湧き出る泉、ルルドとしていくのです。

奉献生活者も、共同生活を続ける姉妹たちが、神への愛に根を張って掟を実践するなら、修道院は聖霊の恵みが湧き出るルルドとなるのです。人のことばかり言っていますが、中田神父も、主任司祭として自分の助任を信じて、互いに愛し合い、掟を守ることで、司祭館が聖霊の豊かな恵みの湧き出るルルドとなる。そう信じています。

今年、四年ぶりに地区行事として井持浦ルルド祭を祝うことができました。ルルドで起こった出来事を持ち帰り、生活の場所がこれからの「ルルド」となるようにしましょう。「わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」愛するイエスの示す掟を生きて、出会う人に恵みの水を飲ませる人になりましょう。

ベルナデッタの時のように、三回目くらいまでは、泥水かも知れません。ですがきっと四回目あたりには良い水が湧き出て、人を喜ばせることができるに違いありません。あなたが、これから人を喜ばせる「ルルド」になるのです。

主の昇天(マタイ 28:16-20)

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

話した場合、もしこの世の体や時間や場所に縛られていたら、ほかの教会で全く同じ時間に主日のミサをささげているとき、そこには留まることができないわけです。中田神父も、三つの教会の主任神父ですから、井持浦にも浜脇にも、定期的に姿を見せたいなと思っています。ただ人間である中田神父は、同じ時間に別の場所に存在することはできないのです。毎週福江教会の主日ミサをささげたいですが、復活し、昇天したイエス様と同じようにはいかないのです。

天に昇られたイエス様は、この世のすべての制約から解かれて、自由にすべての時間と場所にいてくださり、私たちのために配慮してくださいます。ですから私たちは、主の昇天を心から喜びます。復活された主が、御父の右におられるから、日本中で主日のミサに同時におられ、世界中で主日のミサに同時にいてくださいます。中村大司教様のささげるミサにも、私のささげるミサにもいてくださいます。心から感謝します。

この喜びは、教会に来たときだけのものでしょうか？朗読された福音を読み返してください。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(28・20) あなたがたはだれでしょうか？使徒たちだけの話でしょうか？もちろん私たちもです。

私たちが聖母月のロザリオを唱えるとき、朝晩の祈りをささげるとき、食前食後の祈りの時も、この世の一切の制約から解き放たれて御父の右におられるイエスが、いつもあなたがたと共にいるのです。だから、主の昇天を喜びましょう。「復活したイエス様は、今や、いつも私たちと共にいてくださいます！」この信仰を携えて、今週一週間に入りましょう。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 20:19-23)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

聖霊降臨の主日 (ヨハネ 20:19-23)

聖霊体験は身近なところにある。それを伝えよう



聖霊降臨の主日を迎えました。この祭日が終わると、教会の暦は復活節から年間の季節に移ります。「アレルヤの祈り」も聖霊降臨翌日から「お告げの祈り」に戻ります。「お告げの祈り」と「アレルヤの祈り」の切り替えは、幼い頃母親がていねいに教えてくれました。中学までしか卒業していない母ですが、今も人生の教師でいてくれます。有難いことです。

「お告げの祈り」「アレルヤの祈り」でも気づかれた方がおられると思いますが、聖霊降臨の出来事もご昇天の出来事同様に、復活したイエスの結びつきを大切に考えて黙想するのが良いと思います。聖霊降臨の出来事は、イエスが教えておいたことをことごとく理解させ、悟らせる体験でした。

第一朗読で、あらゆる国からエルサレムに帰って来ていた信心深いユダヤ人たちは、地方出身の田舎者に過ぎない弟子たちが神の偉大な業を語っているのを聞いて、あっけにとられてしまったとあります。聖霊がとどまっていた弟子たちは、神の国の福音を、単なる読み聞かせとか受け売りのように語ったのではなく、「イエス・キリストの身分において」大胆に語りました。「霊」が語らせるままに語ったのです。

「霊」が語らせるままに語った。それは止まらないおしゃべりや、いつまでも続く世間話ではありません。弟子たちは、三年間共にいたイエス・キリストの教えを、聖霊の導きによって深く悟り、正確に語り始めたのです。聖霊は、イエスが弟子たちのそばにいたときと同じように、教え導いてくれるのです。

聖霊降臨の出来事を、中田神父の体験から「こうではないかな」と思う時があります。それは、一度にたくさんの方ができたときです。たとえば、受難の主日の一週間、司祭たちはいくつもの説教を準備しなければなりません。受難の主日・聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭・復活の主日(日中)と、一週間の合計で五つの説教を準備しなければならないのです。

すべて朗読が違っていれば、すべて違う内容を用意する必要があります。生涯に一度だけ、一週間に五回の説教を用意するものではありません。毎年、たぶん50年くらい用意しなければならないのです。50年分、材料がどこかにあれば良いですが、おそらくそんなものはどこにもないでしょう。この、聖なる一週間の準備を、すべての司祭がかろうじてできているのは、私は聖霊の働き、聖霊降臨の働きだと思っています。

芸術家や作家、画家や漫画家、こうした人が言うセリフがあります。「作品が降りてきた」と。中田神父も、そういう体験をしてきました。説教が降りてくることがあるのです。それは突然やって来て、まごまごしていたら去って行きます。突然降りてくる説教を、ただ私は書き留める。そんな体験がまれにあるのです。

もちろん、そんなにめったに起こるわけではありません。多くの説教は悪戦苦闘して、ばた狂いながら用意したものです。話しながら「納得はしていないのだけれども」と思いながら話していることも、実際にはあります。

それでも、聖霊降臨の恵みは十分信じるに値します。私たちは聖霊の照らしによって、自分では解決できなかったことを解決し、理解できなかったことを理解することがあるのです。それは間違いなく、聖霊が注がれて、あなたを助けてくれたのです。

口でどれだけ説明を受けても理解できなかったことが、ある日理解できるようになる。父親になる前は父親の話が理解できませんでした。母親になる前は母親の言い聞かせが理解できませんでした。いざ父親・母親になって、父母が教えてくれたことが理解できるようになる。そこには、聖霊の働きがあるのです。父親母親になれば誰でも理解できるようになる。そんなものではないのです。

私たちは、聖霊降臨を難しく考えていたかも知れません。復活したイエスの語る言葉がしみじみと分かるようになった。私たちはこのような形で、聖霊降臨の体験をしているのです。選ばれた人の、特殊な体験ではないということです。

聖霊を受けた弟子たちはあちこちで宣教するようになりました。私たちは堅信の秘跡によってすでに聖霊を受けた人ですから、宣教の務めは私たちにも向けられているのです。「いつかあなたが父親母親になったときに分かるよ。そのとき聖霊が働いて、理解させてくれるよ。」私たちの宣教は、こんな声かけから始まるのではないのでしょうか。

三位一体の主日(ヨハネ 3:16-18)

三位一体の主日 (ヨハネ 3:16-18)

父と子と聖霊の溢れる愛を私も受けた



三位一体の主日を迎えました。父と子と聖霊の神を身近に感じられるようになりたい。その思いで与えられた朗読に耳を傾けましょう。短い朗読の中で、「御子を信じる」ということが四回も出てきます。これは御子を信じるのがどれほど大切かを考えさせたためです。

御子を信じる事ができれば、御父を信じる事ができます。「子」がいらっしゃれば「父」がおられるのは当然のことですね。そして「御子」を信じる事ができれば、御子自身が約束してくださった、弁護者として遣わしてくださる「聖霊」も信じる事ができます。御子を信じる事ができるか。そこにすべてがかかっているわけです。

中田神父は、御子イエス・キリストを信じる事のできる十分な理由が聖書の中にあると思っています。神は、私たちのためにその独り子をお与えくださいました。神は人類の救いのために、その独り子を示してくださるだけで十分だったはずですが、それだけで終わらず、御父は御子を人類に与えてくださったのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」(3・16)

神はその独り子を、一度だけ与えてくださったのでしょうか。人となって私たちのためにおいでくださった。この時だけでしょうか。そうではありません。人類は神が人となっただけでは心を神に向け直す事ができませんでした。そこで神はもう一度、独り子をお与えになったのです。十字架上で、そして祭壇の上で、罪の赦しと救いの完成のために、再び与えてくださったのです。

たとえを用意しました。比べて考えてみましょう。私たちが少し大きな買い物をして、支払いを済ませたとしましょう。間違いなく支払いを済ませたのに、お店から「支払いをお願いします」と言われたとします。お店の言い分は正しいでしょうか？

確実に支払ったのですから、支払う理由はありません。二度支払う、二度与えるというのは、これと同じ体験です。買い戻すために、二重になってしまうと分かっているのに、もう一度支払った。これと同じことを、神は人類のためにしてくださったのです。私たちが罪から解放するため、罪に支配されている状態から買い戻すために、二度も御子を与えてくださったのです。

これが聖書が示してくださる御子イエス・キリストを信じる事のできる理由です。私たちには決して支払えない代償を、父なる神は御子を通して支払ってくださった。神はここまで私たちが愛してくださったのです。御子をご自分を二度与えることで愛を示してくださったのです。この世のすべてが信じられなくなったとしても、神が示された愛は十分信じる事ができます。

そして、世を愛してくださった神は、今も人類を愛し続けておられます。そのしるしは聖霊です。神はいつも、いつまでも人類を愛し続け

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

るため、恵みを与え続けるために聖霊を与えてくださったのです。父と子と聖霊がそれぞれの働きを通して、人類を愛し続けていることを証明してくださっています。これは「神が人類を愛してくださっている」という一つの働きの、三つの側面なのです。

三位一体の神様は、つねに豊かで、愛に溢れておられます。愛が溢れているなら、それはどこかへ注がれるはずですが、神の愛は、人間に注がれました。御子を通してこれ以上無いほどに注がれましたが、この神の愛は今も、聖霊を通して注がれています。父と子と聖霊の、これほどの愛を、今日特に感謝しましょう。

三位一体の神の、溢れる愛を私たちが受けているなら、私たちの中でも、神の愛は溢れることでしょうか。溢れるほどの愛は、次はどこに注がれるのでしょうか。あふれるほどに注がれた愛を、心に浮かぶあの人に届ける。三位一体の神様が、今週私たちにお与えになる使命だと思えます。

キリストの聖体(ヨハネ 6:51-58)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。



キリストの聖体 (ヨハネ 6:51-58)

イエスが求める姿に造り変えられるのを受け入れますか

キリストの聖体の祭日を迎えました。聖体を拝領することが何よりイエスが残された愛の記念に応える方法ですが、他にも聖体礼拝の時間を取って聖体に対する信仰を深めることもできます。個人的に聖体訪問をすることも、一日のふさわしい過ごし方です。今年は具体的な計画を考えておりませんでした。何が可能か考えてみたいと思います。

聖体は、ご承知の通り教会が保ち続けている七つの秘跡の一つです。「洗礼・堅信・聖体・罪の赦し・病者の塗油・叙階・婚姻」教会はこの七つの秘跡を通して、人生の始まりから終わりまで、信仰生活を豊かに過ごすことができるように配慮しています。

七つの秘跡は教会での要理教育でしっかり学んだことでしょう。小学生の時代にも学ぶ機会がありますが、やはり堅信組の時期に、暗記だけではなく理解させて、覚えてきたはず。神の子供として生き始める洗礼の恵みに始まって、命の危険にさしかかったときに受ける病者の塗油まで、「人生の折々の場面に、恵みが受けられる」そのことを理解して、堅信組には覚えてもらうようにしていました。

そんな、ある教会の堅信組の出来事です。七つの秘跡を教えて、七つとも覚えたら中田神父の前で口頭で答えを確認します。一人の子が「洗礼・堅信・罪の赦し・病者の塗油・叙階・婚姻」とすらすら並べました。指を折って答えたのですが一つ足りません。聖体の秘跡を言い忘れたのです。もう一度言ってもらいましたが、なぜか「聖体の秘跡」を飛ばしてしまいます。

そこでヒントを出しました。「出血大サービス。これ以上のヒントは言えないからね。『キリストの御体』。」何と答えたと思いますか？そう言ったら堅信組のその子は「アーメン」と答えました。私は子どもの教育、指導にはあまり向いてないのかも知れません。

主イエスは、私たちにご自分の肉をパンとして食べることができるように与えてくださいました。御聖体は遠くから拝むものではなく、「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」(6・51)と約束してくださる食べものです。ミサの中で「みな、これを取って食べなさい」と唱えているのは単なる儀式ではなく、イエスが「わたしの体を食べなさい」と招く部分です。

パンとぶどう酒の形で、イエスはご自身を与えることをお望みになりました。食べもの・飲み物は、人が食すと完全に姿を無くします。形あるものは有限のもので、「永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」その食べ物は、形にとらわれない、形の向こうにあるものとなって私たちを養い、永遠の命と復活の希望を与えるのです。

中田神父は最近しみじみと思うのです。私たちの周りでは、たくさんの出来事が立派に行われます。特に記念行事は、長い期間準備してその日を迎えます。その中で、名前が残る人はごく僅かです。けれども、

名前が全く残らない人たちの奉仕や努力がなければ、その記念行事は果たして成功したのだろうか。形も、名前も、何も残さず、自分を無にして協力してくれた人たちの働きが、何倍も尊いのではないか。そんなことをしみじみと思うのです。

キリストの聖体も、私たちが拝領すれば形は完全に無くなります。聖体の秘跡を残されたイエスは、自分を無にして、誰も与えることのできない尊いものを与えようと考えたのです。何も残さず与えるからこそ、尊い恵みなのではないでしょうか。

パウロは、イエスが私たちのためにおいでくださったことをフィリピの信徒への手紙の中でこう言っています。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。」(フィリピ 2・6-7) ご自身を無にしたことが、誰も与えることのできない「まことの食べ物」「まことの飲み物」を与える源となりました。

幸いにも私たちは、キリストの聖体の恵みをしばしば受けることができます。時間と都合がゆるせば、毎日でもミサに参加して聖体をいただくことができます。ところで聖体拝領をすることは、何かが増えることなのでしょう。買い物に行くとポイントがたまって、たくさん増えたら先で買い物に使える。聖体拝領にあずかることって、そういうものなのでしょうか？

私は、むしろ日々自分を謙虚にする、自分の名前や功績を何も残さない、その積み重ねをさせてくれる恵みなのではないかと思っています。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる」(6・56) このイエス様は聖体拝領のたびにご自身に似る者となるように、造り変えてくださるのです。

食べられ、飲み干され、完全に姿がなくなる。キリストの聖体の有様が私たちをイエスに似る者となるように招いています。名前を残したい気持ちも少なからずあるでしょう。この仕事はこの人のおかげと語り継がれたい気持ちもどこかにあるでしょう。

しかし聖体の恵みは、私たちをこの世が欲しがるものには向かわせないのです。それでもあなたは、今日聖体を拝領したいですか？一人ひとり、問われています。

年間第 11 主日(マタイ 9:36-10:8)

年間第 11 主日 (マタイ 9:36-10:8)

ただで与えるために、私たちは召された



年間の主日が再開しました。これから待降節まで、年間の主日が続きます。年間最後の主日が「王であるキリスト」であることは皆さんご存知と思いますが、今年はあと一回、日曜日に祝日が挟まっています。8月6日に、「主の変容」の祝日が挟み込まれました。

与えられた福音朗読は、イエスが群衆を深く憐れみ、弟子たちの中から特に十二人を使徒としてお選びになる場面です。名前が書き残されることで、特別に選び出された弟子であることが分かります。汚れた霊に対する権能を授けられ、あらゆる病気や患いをいやす力を与えられました。6月の第3日曜日は「父の日」ですが、イエスが深く群衆を憐れみ、弟子たちを派遣する様子は私たちに対する「父の愛」を感じます。

さて、十二人の弟子の名前を、マタイ福音書が紹介する順に皆さん言うことができますか？どなたか典礼委員に当ててみましょう。一瞬で顔色が変わったのでやめときます。シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスとマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、イスカリオテのユダでしたね。名前を覚えておくのは、福音書でどんな登場の仕方をしていたかを思い出す呼び水になるので、非常に役に立つと思います。

ちなみに、聖書の書名も覚えておくとおおよその中身を思い出せます。「出エジプト記」と聞けば、「エジプトを脱出したんだな」と分かりますし、その前後も膨らんでいきます。名前・書名を覚えておくことは、暗記をあまり勧めない現代社会にあっても十分役に立ちます。

ここでは書名を並べませんが、中田神父は旧約聖書書名を「鉄道唱歌」に乗せて覚えました。新約聖書は運動会でよく流れる「クシコポスト」で覚えました。前任地の子どもたちにも、この歌で覚えさせました。今でも覚えてくれていると思います。楽しく覚えることができますので、皆さんには大人の黙想会の時にでも、教えてあげられたらなと思います。

イエスはこうして選んだ十二人を宣教のために派遣します。派遣するにあたって注意点や指示を与えています。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。」(10・5-6)

これは、マタイ福音書の最後の部分での派遣「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」(28・19)と矛盾するように見えるかも知れませんが、ここでは段階を踏んで、まずイエスはイスラエルの民に福音を伝えるよう弟子たちに指示し、復活後は異邦人宣教を指示したということでしょう。

ところで、「イエスはこの十二人を派遣するにあたり」ここからの部分で、指示とはちょっと違う部分があると思いませんか。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」(10・8)これは、指示や命令とは少し違う気がしませんか。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」中田神父はこの言葉に、「感謝を忘れてはいけない」とか「初心を忘れてはいけない」そんな響きを感じました。長く務めを果たしていく中では、どこかで自分勝手になるとか、驕りが生じてしまうこともあるでしょう。きちんと初心に戻り、ただで与えられた恵み深い務めを、感謝して果たしなさい。そんな戒めが、込められているのではないのでしょうか。

父の日、母の日を迎えてあらためて思います。父となった喜び、母となった喜びは、神から、無償で与えられたもののはずです。ですから父として、子に対する務めを無償で果たしていく。それが今週のイエスの呼びかけに応える道だと思います。

それぞれ、報いとして与えられたものではなく、ただで与えられた恵みがあるはずです。無償で与えられたその恵みを、誰かに、何かに、無償で与えるよう心がけているのでしょうか。いただいた恵みを与えることを、自分の喜びとしているのでしょうか。

中田神父もこれまで手に入れたもの身につけたものを、出し惜しみしてはいけないと、心の底から感じています。もうすでに司祭生活 31 年です。今日仮に倒れて、これまで通りの奉仕ができなくなった場合に、「あのことを話しておけば良かった」「こんな方法で身につけたんだよと、教えておくべきだった」そんな後悔はしたくありません。

それはあと 20 年仮に司祭生活が与えられても、考え方は同じです。私たちは皆、「ただで受けたものを、ただで与えるために」それぞれの使命に召されているのです。

年間第 12 主日(マタイ 10:26-33)

年間第 12 主日 (マタイ 10:26-33)

あなたは行って、屋根の上で言い広めなさい



こちらへの4月23日正式着任からおよそ二ヶ月が経ちました。中田神父は未だに恐れと不安を抱えて生きています。誰も知らない中で、初めて果たす任務がこんなにキツイものだとは想像していませんでした。そんな中、今週与えられた福音朗読箇所は本当に考えさせられます。

「人々を恐れてはならない。」(10・26) イエスは「恐れるな」と三度も呼びかけます。恐れは、現在と未来に繋がっていきます。「これを言ったら、受け入れてもらえるだろうか。」「これを言ったら、あとで困らないだろうか。」誰に何を言われようが構わない。そんな時期もかつてはありましたが、今はやはり、恐れが先に来るのです。

イエスが、「恐れるな」と言われるからには、「あなたが心配している、現在に対しても未来に対しても、守ってあげるよ」と保障してくださるのだと受け取るべきです。見ず知らずの環境に置いてもらった、それをチャンスと受けとめ、自分のため、委ねられた人々のため、後ろを振り返らずに進んでみなさい。中田神父は今週イエスの呼びかけをこのように受けとめました。

「必ず守ってあげます。恐れなくて。」イエスがそう仰るのですから、信頼して働きたいと思います。二つのことが期待されています。一つは自分自身が個人的に学んだことを、人々の前で言い広めなさいと命じています。イエスのもとに留まって得られた学びや喜びを、多くの人が必要としています。学んだことは個人的なものでも、分かち合う人の中には「それが聞きたかった」と思ってくれる人もいるわけです。

もう一つは、「人々の前で人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す」(10・32) このことも期待されています。場面によって自分の身分を隠したりするのはふさわしくありません。いつでも、「私はイエス・キリストの仲間です」と言い表す人を、イエスも「天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す」(同) のです。

こんなことがありました。青年会と大村の「轟の滝キャンプ場」に出かけました。私は新米司祭、集まった青年は青年会の常連でした。キャンプの中で私の歓迎会がありましたが、私は飲み過ぎてしまいました。その後、風に当たろうと思って一人で外に出ました。ところが酔っていたために敷地の端から足を滑らせ、七メートルくらい下の沢に転落してしまったのです。

足を滑らせたことも、その後どうなったのかも記憶がありません。気づいたときには運ばれて横に寝かされていました。身体のアチコチを打ったようですが、幸いに足を滑らせた場所にはむき出しの排水パイプがあり、それを掴もうとしたらしく、命に別状はありませんでした。

あとで振り返るとゾッとしますが、あの時から、私の司祭職は神に無償で与えられたものだと自分に言い聞かせています。そして、「私は今日守られた。今日守ってくださる神は、明日も守ってくださるに違い

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

ない」と感謝したのです。現在も、未来にあっても、イエスは守ってくださるのだから、人々の前でイエスの仲間ですと証しすることにどうしてためらう必要があるのでしょうか。

これは誰も味わったことのない、個人的な体験ですが、こうして分かち合うとき、「それが聞きたかった」と思ってくれる人がいるのかも知れません。偶然命拾いしたと考える人もいるかも知れませんが、中田神父にとってこの体験は、「わたしが現在も未来もあなたを守る」と、耳打ちしてくれた体験なのだと思います。

私には、人々の前でイエスを「知らない」と言うことはできません。これほど圧倒的な関わり方をしてくださった方を、「知らない」とはとても言えません。イエスは私たちのそばを通るとき、決して道の向こう側を通る人ではなく、善いサマリア人として通りかかってくくださる方なのです。

ぜひ皆さんも、「暗闇で語られたこと」「耳打ちされたこと」こんな本当に個人的な体験であっても、「私はイエス・キリストの仲間です」と語る、とっておきの道具にしてください。きっと話を聞く人の中に「それが聞きたかった」と応じてくれて、導かれていく人がいるに違いありません。

年間第 13 主日(マタイ 10:37-42)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第 13 主日 (マタイ 10:37-42)

砕かれて、さらにイエスの弟子となる



司祭の黙想会に参加してきました。黙想指導をしてくださったのは福岡教区の桜井神父様で、現在手取教会と帯山教会の主任をしておられます。私が大神学生の頃ご一緒に過ごしたことがあります。カナダでの留学を終えてしばらく大神学校で教えていただきました。

お話の中で特に印象に残ったのは、今を生きる教会は、入信の秘跡を直前に控えた求道者のような姿を備えていなければならないということです。皆さんの中に、大人になって洗礼を受けた人がいるかと思いますが、もうすぐ洗礼を受ける人たちの集まり、そんな緊張感を持った姿でいてほしいということでした。たいへん参考になりました。

7月3日にいちばん近い本日2日、トマスの霊名のお祝いを設けてくださり、感謝します。実は同じ霊名なのに長崎教区の祝日表には「トマ」「トマス」「使徒トマ」書き方が三通りあります。どれが正しいとかはないので、呼びやすい形を使ってください。

福音の学びに入りましょう。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」(10・37) この勧告は自然な家族への愛を無条件に捨てなさいというものではなくて、たとえば迫害を目の前にして、イエスをどうしても証しすべき時にそれが妨げとなつてはいけないという意味で受け取ると無理がないと思います。

イエスはおよそ30年間、両親に仕えてお暮らしになりました。「御父の元にいることが当たり前」と知っておられても、ヨセフとマリアにお仕えしました。そのことと矛盾しないよう考えると、「証しすべき時」これを踏まえて考えるというのが妥当です。

ついこの前は聖ペトロ聖パウロ使徒の祭日でした。私たちの教区長中村倫明大司教様は聖ペトロの霊名をいただいています。大司教様もご自分の歩みの中で、どうしても証しすべき時が来て、父母よりもイエスを愛することを選びました。

ご存知ないかもしれませんが、中村大司教様は両親が授かったたった一人のご子息でした。司祭の中には、第一子長男や、一人っ子がほかにいます。このような環境にあって司祭召命を選ぶということは、時が経つにつれてたいへん重い決断を迫られることになります。両親も歳を取っていくからです。司祭叙階式は、重い決断の最たるものです。司祭は、すべての人に仕えることが家族よりも優先されるからです。

司祭に叙階されると、祭壇でのミサが働きの中心です。ミサに参加するすべての人を代表して、ミサをささげます。そこにご両親が参加していても、特別なことをするわけではありません。すべての人を分け隔てなく祭儀に招くのです。聖体拝領のときも、順番通りに聖体を拝領する。それだけです。自分の親が聖体拝領の列にいる。不思議な感覚です。

浦上では叙階式ミサの終わりに両親を祝福する場面があります。本

来なら、祝福を受けるのは親ではなく、子のほうかも知れません。それをでも両親は「預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受け、正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。」(10・41) この言葉の通りに、新司祭の祝福をうやうやしく受けるのです。

最近思うことですが、司祭叙階の時まで家族が生きて、その場を見守ることができるのは本当に幸せなことです。司祭は自分が受けたもの、叙階の恵みも含めて、イエスからいただいた「命」をすべての人にもたらす使命があります。十字架を担うこと、何よりもイエスを愛する生き方を貫くことは、両親、祖父母が「預言者を預言者として受け入れる」その中で培われていくのではないのでしょうか。

ただ、司祭になってみて、中田神父が迎えたくないと思っている場面が二つあります。一つは赦しの秘跡の列に両親が並ぶことです。赦しの秘跡の時に親の声が聞こえるのはあまり想像したくありません。もう一つは、病者の塗油です。すべての信徒の赦しの秘跡、病者の塗油を私は拒みませんが、父親母親が、赦しの秘跡に並ぶことと、病者の塗油を授けることになる、その場面だけは勘弁願いたいと思っています。

そう願ってきましたが、亡くなった父には病者の塗油を授けました。赦しの秘跡は、病者の塗油を授けた時点で告白を聴くのが困難だったので経験しておりません。しかしもし、そのような場面が母親を通して巡ってきたら、どうすれば良いのか。本当に困ると思います。

よくよく考えるとこれも「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない」を体験する大切な場面なのかも知れません。司祭もまた、つねに司祭の務めの中で永遠の祭司イエスに近づいていくからです。

赦しの秘跡は司祭にとっても自分を謙虚にさせますが、自分の家族の赦しの秘跡を通してもっと砕かれる必要があるなら、それも受け入れなければならないと思います。本音を言うと、人間的には誰かに代わってほしいくらいです。

最終的には、「自分の十字架を担ってイエスに従う」この姿が必要になるのでしょうか。皆さんが、「わたしよりも父や母を愛する」その場面はいつでしょうか。「わたしよりも息子や娘を愛する」その場面はいつでしょうか。

何かしらの特別扱いが、イエスを証しすることの妨げとなりませんように。その場面を乗り越えて、もっとイエスの弟子としてふさわしくなる。もっと砕かれてイエスに従う者となる。今週の担うべき十字架といたしましょう。

年間第14主日(マタイ 11:25-30)



年間第 14 主日 (マタイ 11:25-30)

神の愛とつくしみに触れるための軛でありたい

水曜日、葬儀ミサを終えて火葬場に向かいました。火葬場で、同業他社に会いました。体型は助任司祭の一人にそっくりでした。「別の教会で葬式を頼まれていたのかな？」と勘違いするほどでした。様子を見ているとその方が車の脇で白い布を何枚か重ね着して、最後に烏帽子をかぶったので「ああ、神主さんだ」と理解しました。

福音朗読に移りましょう。今週の朗読は、偶然かも知れませんが葬儀のミサで頻繁に選ばれる朗読です。故人を振り返って「疲れた」「重荷を負った」いろんなことがあった人生に、イエス様が「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(11・28)と招くのは本当に慰められます。

もちろんイエスは、人生を終えたときのことだけを言っているのではありません。「だれでもわたしのもとに来なさい」と言っておられます。今「疲れている人」、今「重荷を負っている人」そういう人にも「来なさい」と招いています。

「だれでもわたしのもとに来なさい。」これは「もしよければ来てもいいよ」ではなさそうです。強い促しを感じます。そこにはそれなりの理由があるに違いありません。二つのことを考えてみました。

「疲れた者」は、疲れを実際に感じている人のことでしょう。「あー疲れた」と言える人は、休みが必要だと理解していて、休む場所を探しています。イエスはその人たちを休ませてくださいます。「重荷を負う者」は、疲れていることに気づいていない人たちかも知れません。最近中田神父は休養日にしている水曜日に二週連続で公務が入りました。助任司祭に任せて良かったかも知れませんが自分で引き受けました。

その後、用事があって御像を製作している中田ザビエル工房に電話をしたのですが、用件を話している私に「こうじ神父様、声に元気なかよ。大丈夫ね？」と心配されたのです。それは明らかに、疲れているのに本人が疲れに気づいていない状態でした。

イエスはどちらにも「休ませてあげよう」と言ってくださいます。疲れていると自覚している人も、疲れていることに気づいていない人にも、イエスは配慮してくださり、休ませてくださるのです。「私は誰からも気づいてもらえない」そんな無力感に打ちのめされた経験がある人は、ぜひイエスの「だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」との招きに信頼を寄せることにしましょう。

イエスがご自分のもとで休むようにと強く促す理由がもう一つあると思います。それは、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」この招きが示しています。

「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」しかしなぜ、軛を負う

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

ことが、安らぎを得られることになるのでしょうか。たいてい、軛を負うことは、新たな重荷を負わされることに繋がります。すでに疲れて、重荷にあえいでいるのに、さらにイエスの言う軛を負う。なぜ安らぎを得られるのでしょうか。

そこで「軛」について見直してみると次のような説明がありました。

「軛」とは、人間が生きるようにと神が与える指示に、心を開くという態度を指すそうです。当時のユダヤ教指導者も、律法を忠実に守ることが神の前に正しく生きることだ教えていました。しかし、自分たちは律法を実行していると誇る彼らから見れば、それを果たせない弱い者は神の救いからのけ者にされていると考えていました。

こうしてユダヤ教指導者の「軛」は神と人とを結ぶものにはならず、むしろ圧迫となってしまうのです。イエスはこのような「重荷」を負わされて疲れ果てた人々を招いて、全く新しい神と人とを結ぶ「軛」を示したのです。イエス自身が身をもって示したこの生き方こそ、新しい「軛」であり、神と人とを結ぶ「絆」だったのでした。

イエスの生き方、イエスが共に生きるようにと招く「軛」は、神の愛といつくしみに結ばれる「軛」です。ですからイエスの軛には安らぎがあります。イエスの「軛」が負いやすく軽いのは、神の愛といつくしみに人を結び合わせたいという神の思いを知るイエスが、その人の横に立ってともに背負ってくれるからです。

私たちは今週もこうして教会に来て、ミサに参加しています。「義務」に縛り付けられてここまで来ているなら、それは「疲れ」と「重荷」でしかありません。ミサに来ることが、神の愛といつくしみに少しでも触れる機会となっているなら、たとえミサ参加が「軛」であってもその軛は軽いはずです。

このミサが、参加する皆さんを休ませてあげるミサとなりますように。祭儀を執り行う司祭はもちろん、毎週の典礼奉仕者も、ミサが「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」とのイエスのみことばを参加者一人ひとりに感じるものとなるよう、努めていきましょう。

年間第 15 主日(マタイ 13:1-23)

年間第 15 主日 (マタイ 13:1-23)

あなたにも神のことばは百倍の実を結ぶ



「ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。」(13・8) 「聖書と典礼」のアレルヤ唱に、「種は神のことば、まぐ人はキリスト」とありますから、ここから少し掘り下げていくことにしましょう。最終的にイエスは、私たち自身が蒔かれた種の実りを分け合える人となれるように招いています。

神のことばが、イエスによって種蒔かれます。今日ここに集まったすべての人に、神のことばが蒔かれます。ただし、受け取る私たちの心の状態はさまざまです。体はここにいるけれども、心はここにはない。そんな状態の人もあるかも知れません。第一朗読・第二朗読・福音朗読を通して神のことばが蒔かれても、鳥が来て食べられてしまったことすら気が付かない。そんな状態の人もあるかも知れません。

また、心も体もここにいると感じていますが、「自分が聞きたいことば」しか聞こうとしない状態の人もあるでしょう。儲かりそうな話やうまい話。そうした話しか聞く気がなければ、心に届く神のことばは僅かでしょうし、根付くこともないでしょう。

渴きを覚えて、できるだけ神のことばを受け入れたい。そんな状態でミサに来た人もいるでしょう。心を開こうと努力しているので、神のことばに確かに触れ、なるほどそうだなあと思うのですが、今の厳しい社会の中で暮らすうちに、神のことばに根を張って生きている人があまりにも少ないため、挫折してしまう人もあるかも知れません。

ただ、そんな中であっても、「私が今あるのは神様のおかげ。神のことばに養われて私は生かされている」と固く信じている人は、神のことばを百倍、六十倍、三十倍にも実らせるのです。

「そうは言っても福江の商店街を歩いて『私は神のことばに生かされている』と考えている人なんていやしない」実際そうかもしれません。たとえそうであっても、「私は神に生かされている」あなたがこの信仰にしっかり立っていれば、ミサで受けた神のことば、家庭で聖書を開いて目に留まった神のことばは、あなたの中で必ず実を結ぶのです。

金曜日に、お告げのマリア修道会が経営している「マリアの園」という特別養護老人ホームにミサをしに行きました。その日の福音朗読で、迫害が始まっていた当時の社会の中で証しをするように励まされますが、「引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる」(マタイ 10・19)という箇所が中田神父の目に留まりました。

そこで入所者の皆さんに「皆さんはとっさの時、自分の信仰をちゃんとと言えると思いますか？イエス様は、『心配いらない。言うべきことは教えられる』と言いますが、本当にちゃんと信仰を表せるでしょうか？」と投げかけたのです。その答えとして私は、「中田神父の体験から言う

と、ちゃんと信仰は言い表せます。心配いりません」とお伝えしました。

言葉だけでは納得いかないでしょうから、体験談を添えました。かつて上五島の「頭ヶ島」に空港がありました。大村空港と福岡空港に、八人乗りのプロペラ機を運行していました。紙飛行機みたいでした。「物は試し」ということで、お金を払って大村空港行きの便に乗ったのです。

断崖絶壁の、小さな島のでっぺんを削って作った空港です。「この距離の滑走路でちゃんと離陸できるのかいな」と思いつつの離陸でした。案の定と言いますか、離陸した途端断崖絶壁に沿って10m、いや20m、機体が降下したのです。「あっ！」と思った次の瞬間に口をついて出てきた言葉は「めでたし聖寵、めでたし聖寵！」でした。「ちゃんと信仰を表せるものなんだなあ」と、我ながら感心しました。

あの時中田神父が「助けて！」とだけ言っていたら、カトリックの信仰はひとかけらも見えなかった。けれども「めでたし聖寵、めでたし聖寵！」と叫んだおかげで、もし飛行機が墜落して私以外の誰かが生き残った時にきっと「めでたし聖寵、めでたし聖寵と叫んでいる人がいた」と証言してくれたはずです。

仮に、今週の説教を「めでたし聖寵の説教」と名付けたとしましょう。すると皆さんは、来週になっても再来週になっても、ひょっとしたら一年後でも、「あー、あの話ね」と思い出してくれるのではないのでしょうか。思い出すきっかけは十分与えたつもりです。

これが神のことばの種蒔きです。中田神父がイエスからいただいたみことばを思い巡らし、分かち合ったことで、今週のミサに参加した30人の心の中に神のことばが根付きます。この時点で蒔かれた神のことばが三十倍になって実を付けた。そういうことではないのでしょうか。おそらく「マリアの園」の30人にも実を付けてくれたと思いますから、「めでたし聖寵の説教」は六十倍の実を結んだと思っております。

今日、ミサが始まるまで何人かは「心ここにあらず」だったかも知れませんが、何人かは自分の聞きたいことだけを探していたかも知れませんが、いろんな状態の人が集まっていたはずですが、神様は中田神父を使って、今週の聖書のみことばがどうにかして根付くように働いてくださったのです。神様に感謝します。

一人ひとり、自分に問いかけてください。今日いただいた神のことば、「あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶ」これを自宅まで忘れることなく持ち帰ることができるのでしょうか？来週まで、再来週まで、あるいはもっと長く、保ち続けることができるのでしょうか。

一年のうち何回かでも、「あのみことばを説明してもらったあの日のミサは今でも覚えている」そんな日曜日があれば、神のことばは皆さんの中で百倍の実を結んでいるのだと思います。

年間第 16 主日 (マタイ 13:24-43)

イエスの業を微塵も疑わない



この説教は6年前の説教の焼き直しです。年間第16主日は先週の「種をまく人のたとえ」と結びつけて考えてよいと思います。イエスによってまかれた種は実を結ぶ。しかも、実を結ぶことに何の疑いもない。先週と合わせて、このように今週の朗読を読み解くことができます。

「毒麦のたとえ」「からし種とパン種」のたとえ、ここにも未来について微塵も疑いを持っていない雰囲気が伝わります。「『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と、刈り取る者に言いつけよう。」(13・30) 良質な麦と毒麦の区別は果たしてつくのか。そういった疑いすら微塵も感じられません。

また「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」(13・33) ここでも、天の国が豊かになり、発展することに何の疑いも持っていないのです。パン種がうまく生地にいきわたるのかなど、わたしたちが心配しそうなことが何も語られていないのです。

これはイエスが、神の国の成長・発展について微塵も疑いを持っていないことをよく表しています。まるで毒麦を抜き集め、良い麦を倉に納める様子をすでに確かめて来たかのように。あるいは三サトンの粉が膨れる様子を確認済みであるかのように。イエスにとって神の国の成長は、神が成長させてくださるのだから何の疑いもないこと、疑いをはさむ余地すらないことなのです。

もう一つ、マタイ福音書が読まれていた共同体の中では、イエスがメシア(救い主)であることについて微塵も疑いを持っていませんでした。マタイ福音書第11章には洗礼者ヨハネのように「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」とイエスがメシアであるのか心の揺れがある人たちも登場しますが、マタイ福音書が書き上げられた西暦80年ころにはイエスが死んで復活し、救いを成し遂げられたこと、イエスがメシアであることは疑いのない真実だったのです。

では、同じようにマタイ福音書の朗読を聞いた現代のわたしたちは、神の国の成長が疑う余地のないことであり、イエスが救い主であることもまた疑いようのない真実であると、表明できているのでしょうか。苦労が多いのに結果が見えてこない。召命がみるみる減っているのに働き手を送ってもらえない。イエスさまがわたしを見ておられるのか、救ってくださるのか、疑問に感じるときがある。

周りの出来事を考え合わせれば、イエスのたとえもイエスのみわざも、今のわたしたちにとっては疑いをはさみたくなるかもしれません。ここに、「見えないものを見る信仰」が必要です。いつの時代にも、見えないものを見ることができるのは「少しも疑いを持たない人たち」なのです。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

マルコ福音書 11 章 23 節のイエスの言葉が思い出されます。「はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる。」

せっかくなので、わたしの体験も挙げておきましょう。長崎の滑石教会で助任司祭をさせてもらった時期がありました。当時お見舞いをしているおばあさんの中に、九十歳を過ぎた方がいて、常々こう言っていました。「神父さま、わたしは滑石教会が栄えますように、滑石教会が栄えますようにと、いつも祈っています。」

滑石教会には、このような人が何人もいました。お世話になっている教会が栄えることを微塵も疑わずに祈り続けてくれる人がいたのです。このような人に、神さまが応えてくれないはずがないと思います。このおばあちゃんは、生きていた間に、滑石教会の繁栄を見ることができたのでしょうか。

おばあちゃんの祈りは一つの形で聞き入れられました。30年前、当時の信徒の規模に合っていない小さな聖堂しか持っていなかった滑石教会は、その数年後に500人以上入ることのできる立派な聖堂と司祭館、信徒会館を完成させました。あのおばあちゃんの祈りがあったので、あのおばあちゃんの祈りが滑石教会全体を動かしたので、立派な教会施設が完成したのだと思います。少しも疑わない祈りは、祈ったことを神が必ず完成させてくれるのです。

マタイ福音書時代の教会共同体は、イエスが示した神の国の姿を微塵も疑わない人々が証ししてくれました。わたしたちの時代も、わたしたちの教会に注がれる神のまなざしを微塵も疑わずに祈ることで、必ず実を結ぶのだと証ししたいと思います。イエスの働きを微塵も疑わない人々に、神のみわざは実を結びます。この真理はいつの時代にも変わりません。

年間第 17 主日(マタイ 13:44-52)

年間第 17 主日 (マタイ 13:44-52)

あらゆる出来事に神の働きを見る弟子になる



木曜日まで、中田神父が応援している広島カープが10連勝しまして、ついにセ・リーグの首位に立ちました。あまりの嬉しさに金曜日の朝ミサでは「主任司祭に何かおねだりするなら今ですよ」と話したのですが、金曜日のナイターでは阪神にメッタ打ちに遭い、一日で首位を明け渡してしまいました。今日何をおねだりしようとしても、もう手遅れです。

皆さんはどう思いますか。私は「あらゆる出来事に神の働きを見いだす人」が、世の中にはいるなあと感じます。どんな些細な出来事からでも、それがたとえ思い通りでない場合にも、あらゆる出来事に神の働きを見つけ、感謝したり謙虚に受け入れたりできる人です。

同じ場面でも、神の働きを見いだせない人には不平や不満、時には怒りが生じたりします。中田神父も、「ここは当然私の出番であろう」という場面に備えていたのに出番が無く、残念を過ぎて怒りを覚えた経験があります。しかしそんな場面にも神の働きは確かにあるわけで、備えが役に立つのはもう少し後なのかもしれないと思い直しました。

駆け出しの司祭の頃、主任神父様の説教を、告解場や香部屋で何度も聞いておりました。「あんな単純な説教なら、自分にだってできる」と思わせるような素朴な説教でした。実際には、易しい言葉で説教をするのは至難の業なのです。考えれば考えるほど、何かを参考にすればするほど、主任神父様の単純な語り口から遠のいていくのでした。

あれから30年が経ちました。今なら分かります。お仕えした主任神父様は「あらゆる出来事に神の働きを見いだす司祭」でおられたので、どんな些細なことからも福音に繋げて話すことができていたのです。今まさに話題になっている出来事からでも、過去の出来事からでも、自由自在に天の国の、持ち物をすっかり売り払ってでも得たいと思わせる有難い説教を、届けることができたのでした。

今週の福音朗読に「畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。」(13・44) また、「商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。」(13・45-46)とあります。ひとたびこのような宝物を手にしたら、他の物は一切横に置くことができる。これは本当だと思います。

中田神父は、この「畑に隠された宝」「高価な真珠」を中学生の時に見つけました。それは二十六聖人ミサの説教でした。その年、説教師に指名された神父様は冒頭次のように語りかけました。「あなたがたは何を見に、ここに集まったのか。預言者か。そうだ。言っておく。預言者以上の者である。」

2月5日の夜、凍えるような寒空の中、神学生だったので義務的にミサに参加していた少年に、説教師の言葉は心を打ちました。「司祭になったら、いつかきっと今日の神父様のような心に残る説教をしたい」

と思ったものです。当時は、説教中も「はよう終わらんかな」とばかりに下を向いていたので説教師がどなただったのか知りませんでした。

司祭になり、浦上教会の助任となり、最初の復活徹夜祭を無事に終えて司祭館食堂で一杯やろうということになりました。主任神父様がおもむろに「司祭になろうと決心した出来事を何か一つ皆で分かち合おう」と誘ったのです。先輩の助任神父様から順に体験を分かち合い、私の番になったので先ほどの二十六聖人の説教の話をしました。

その時初めて知ったのです。主任司祭の川添神父様が「その説教をしたのは私だ。よく司祭になってくれた」と答えたのでした。私は中学生の時に見つけた「高価な真珠」を手に入れ、すべてを横に置いて司祭になったわけですが、その高価な真珠にもう一度出会わせてくださったのは、単純素朴な説教でミサ参加者の心を掴んでいた川添神父様だったのでした。

「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」(13・52)一つの道も、歩き始めたときは真っ直ぐに前を見つめて歩くとはいりません。天の国のことを学び始めていてもこの世の景色もたくさん目に入り、よそ見をするかも知れません。

しかし「天の国のことを学ぶ」という一つの道を歩み始めたのなら、よそ見をせず、真っ直ぐに歩いてほしいと願っています。「天の国の宝」は「畑に隠された宝」であり、「高価な真珠」です。持ち物をすっかり売り払って手に入れるのにふさわしい宝なのです。中田神父はそのことを自信を持って言えるようになるまで30年かかりました。

天の国のことを学んで、一人前の学者になるには、もしかしたら数十年かかるのかも知れません。「自分の倉から新しいものと古いものを取り出す」これができる必要があるからです。「新しいもの」と「古いもの」両方を自在に使えるようになって、ようやく一人前ではないでしょうか。

新約聖書のヤコブの手紙1章25節に次のように書かれています。「しかし、自由をもたらず完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。」

あなたが、人生という持ち物をすっかり売り払って手に入れるのにふさわしい宝であるイエス・キリストを見つけたのなら、ほかには目を向けず、一心に見つめましょう。すると、イエス・キリストがあらゆる出来事に働きかけてくれていることに気付くでしょう。

主の変容(マタイ 17:1-9)

主の変容 (マタイ 17:1-9)

イエスみずから近づき、恐れを取り除いてくださる



聖書愛読が始まりました。戸惑いの中でのスタートでした。主任司祭の指導力不足もあったと思います。詩編朗読は、かたまりことに、例えばオルガン側が先に読み、朗読台側が次を読みます。こうして、詩編を読むことと、詩編に耳を傾けること、両方を深めることができます。

予定では今後四年間、詩編を聖書愛読の材料に使います。その中で詩編の特徴や、どの詩編がどの典礼聖歌に使われているのか、詩編をより身近に感じられるようになると思っています。詩編をすべて読み終える経験は、生涯にわたる貴重な経験となるでしょう。

期間中、主日のミサが長いと感じるかもしれないので、主任司祭も協力しようと考えています。説教は短かめにして、奉献文も聖書愛読期間中は第二奉献文にします。これでかなりコンパクトになるでしょう。

イエスの姿が変わる場面が福音朗読に選ばれました。イエスの姿がこの世のものとは思えないものになっていった。これはイエスが「人間の姿」から「神の姿」に変わっていったということでしょう。イエスはまことの神・まことの人です。イエスが望めば、望みのままに、より神の姿を強調したり、より人間の姿を強調したりできるわけです。ここでは、より神の姿が強調されました。

私たちはどうでしょうか。ペトロと仲間たちが光り輝く雲に覆われ、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5)という声が雲の中から聞こえたとき、弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れたのです。人が、ほんの少し神の側に近づいただけで、恐ろしさを感じてしまうのです。

だからこそイエスは、みずから弟子たちに近づいてくださるのです。神が人間に近づいて、恐れを感じる神と人との間の距離を近づけてくださるのです。私たち人間が決して埋めることのできない距離を、イエスが埋めてくださいます。

典型的なのは「死」の神秘です。私たちはいつかこの地上の生活を終えなければなりません。そのときが近づいてくると、多く人は恐れを感じます。より神に近づくはずなのに恐ろしいのです。この距離を埋めることができるのはイエスただ一人です。イエスだけが「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ 11・25)と約束してくださる方なのです。

イエスが私たちに近づいてくれなければ、私たちが人生で感じる恐怖を乗り越えることは非常に難しい。難病を発症したり重大な交通事故に遭遇したりして、思い描いていた人生が見通せなくなることもあります。そうした恐怖を、イエスはみずから近づいてくださり、「恐れることはない」と力づけてくださいます。

8月6日、広島原爆の日、9日は長崎原爆の日です。数え切れない人が恐れに捕らえられたでしょう。人が恐れを感じる時、そのときこそイエスがみずから近づいてくださり、力づけてくださるときなのです。「起きなさい。恐れることはない。」(マタイ 17・7)

年間第19主日(マタイ 14:22-33)



年間第 19 主日 (マタイ 14:22-33)

イエスから「数段難しい課題」を与えられたら

井持浦教会から福江に帰るとき、大宝地区で三叉路になりますね。井持浦からですとこの三叉路を左に曲がって福江に帰ります。これまで三叉路から右の道を使ったことはなかったのですが、好奇心にかられて、主任司祭が休暇を入れている水曜日にバイクで三叉路までやって来て、その先をまっすぐ走ってみました。

なんとか福江には帰り着きました。帰り着きましたが、まあ遠いこと。自動車学校のそばを通ったことだけは覚えています、あとはどこをどうやって帰り着いたのか、まったく覚えていません。もう二度と、あの道は通らないでしょうね。

ミサ中の福音朗読は、説教するのが難しいときがあります。今週の「湖の上を歩く」という物語がまさにそうです。私たちに当てはめやすい物語はよいのですが、水の上を歩くイエスと、「水の上を歩いてそちらに行かせてください」(14・28)と願うペトロを、どのように当てはめたら良いのか。ずいぶん苦労しました。

こう考えてみました。私たちが「数段難しい課題を与えられた時」どのように向き合えば良いのかをイエスは問うている。今週の朗読をこのように考えてみました。それが「もう一段難しい課題」でしたら、努力を重ねれば、また長い年月をかければ、できるようになるかも知れません。しかし「数段難しい課題」は、どれだけ努力しようと、年月を重ねようと、たどり着けないと感じるのではないのでしょうか。

ペトロは、「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」と願いました。これは「もう一段難しい課題」だったのでしょうか。ペトロの願いは「数段難しい課題」であり、努力などではとてもたどり着けない願いだったのです。

イエスは、「無茶言うなよ」と言いましたか? 「来なさい」(14・29)と言ったのです。常識的に考えれば、「来なさい」とは言いませんよね。ここに、「数段難しい課題を与えられた時」の振る舞いかたが示されているのです。それは、「安心しなさい。わたした。恐れることはない。」(14・27)この言葉を全面的に信頼するということです。

中田神父はこの30年で、「もう一段難しい課題」をイエスから次々と与えられてきました。それが今回は「三つの小教区の主任司祭と、初めての地区長」でした。私にとっては「数段難しい課題」でした。今回示されたイエスの「来なさい」に、私は応えることができるだろうか。気分は沈みそうでした。

ペトロが強い風に気がついて怖くなり、沈みかけ、「主よ、助けてください」と叫んだとき、イエスはどうなさったのでしょうか。「すぐに手を伸ばして捕まえ」(14・31) たのです。イエスはペトロのすぐそばで、見守ってくださっていたのです。

中田神父に今回与えられた任務が「これまでより数段難しい課題」であるなら、イエスはすぐに手を伸ばして捕まえることのできる場所で見守ってくださっているはず。疑わず、深い信頼を寄せること。必要なのはこれだけだと思います。

皆さんにも、イエスが「数段難しいこと」をお願いする時があるでしょう。その時イエスは必ず、手を伸ばして捕まえることのできるすぐそばで、見守ってくださっている。そのことを信じましょう。

いちばん大切な人を失ってしまった時。これまでの生活が一変するような災難に遭った時。沈みそうになるその時、イエスは必ずあなたのすぐそばで見守っておられるのです。イエスの次のことばを、励ましと受け取りましょう。「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」(14・31)。

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

神の計らいを信じ、真っ直ぐに生きる人

下五島地区の教会を、この四ヶ月つとめて見て回りました。その中で、貝津教会だけ一度目にたどり着けず、二度目の教会巡りでたどり着きました。国道 384 号線を進んでいくと、貝津教会に分かれる道があります。写真、前は見えると思いますが遠くの方は聖体拝領の時にでも見てください。

この写真を見ると、「ここから貝津教会」というのは分かるはずなのですが、250cc バイクで流しているとマリア様の大きな御像だけが目に入り、「おや？こんなところにマリア様だけぽつんと立っている。保育園も見えないし、どうしてだろう？」考えるうちに通り過ぎて、そのまま国道を進んでしまいました。結局この日は着けずじまいでした。

違う日に、再度貝津教会目指してバイクで出かけました。バイクを停め、気になって写真に収めたマリア様がこれです。そのときようやく貝津教会の案内板に気づき、通り過ぎてしまったのだと分かりました。マリア様に見とれて道を間違えた経験でした。見とれた経験ありますか？

どうすれば、間違えることなく貝津教会に行けたのでしょうか。本日の福音朗読によると、「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した」とあります (1・39-40) 道に迷わず、エリサベトに挨拶しています。考え事をしていたらこうはいかなかったでしょう。

マリア様は神の不思議な働きかけのことだけを考えていたのでしょうか。本来なら、出来事を受け入れてヨセフは何か言われないうちからヨセフとの生活は続けられるだろうか、いろいろ考えたはずですが、ところがマリアは、迷いは一切横に置いて、ただ一つ、神の不思議な働きかけを喜び合えるエリサベトを訪問することだけ考えたので、道に迷わなかったのです。

神は必ず、目を留めてくださる。心に掛けてくださる。必要なことを見つけたなら、あとは神様に全面的に信頼する。中田神父もそのようにして貝津教会を目指していたら、道に迷うことはなかったのでしょうか。

天に上げられたマリアは、私たちが生涯を通じてどのように生きるべきか、模範を示されました。この世では低くされて生きている人、常に主を恐れ敬いつつ生きる人に神は目を留めます。だから神の憐れみ深さを一心に信じて、他のことには気を取られずに生きる。これが大切です。

このように生活する中で教会に集うひとときは、同じ思い、同じ喜びを体験した人と出会うひとときです。ここに集まった人は皆、神が私に目を留めてくださっていることに気づき、感謝しに集まった人です。神が見守っているかどうか気づかないままここに集まっても、少なくともその人も神が呼び集めてくださった人です。

すると、ここに集まって神の計らいを喜び合う私たちは、だれもがエリサベトであり、だれもがマリアなのです。私たちはマリア、エリサベトなのですから互いに神をほめたたえ、平和のあいさつを交わしましょう。

私たちと私たちの先祖は教会に集い、互いに神のはからいを喜び合いました。残るは「わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」 (1・55) これが実現するために私たちの応答、次の世代への信仰伝達が必要です。

神のいつくしみ、計らいがとこしえにあることを一心に信じて、次の世代も途切れることなくこの聖堂に集まる。こうして私たちは天に上げられたマリアの生き方は正しいと世に証しし、私たちの人生を幸いな人生とすることができると信じています。



年間第 20 主日 (マタイ 15:21-28)

神の計画に従う信仰、機知に富んだ彼女の信仰

持ち物を売り買いするサービスで「メルカリ」というのがありますね。中田神父も利用したことがあります。なんとこのサイトに、私の説教集「取って食べなさい」がABC年三冊セットで売りに出されていたんです。

初め、「けしからん！」とムツときたのですが、考え直しました。説教集を売りに出した人も十分味わったはずだ。せっかくだから、他の人にも味わってもらおう。そう考えたのだと受けとめることにしました。

説教集「取って食べなさい」がどうなるのか、しばらく様子を見ていますと、なんと中古の本であるにもかかわらず千円でどなたかが買い取ってくれていたのです。読者が増えることは有難いことです。

説教集「取って食べなさい」で引っ張りますが、最初は説教集を作る予定などありませんでした。伊王島馬込小教区に赴任した際、すぐに司祭館建設の話が持ち上がりました。司祭館落成が見通せる頃、建設に協力いただいた小教区の皆さん、寄附をくださったたくさんの方々に感謝のしるしが必要でしたが、これといって特別なものが思い浮かばなかったのです。

そこで役員に、「説教集を作れば、ここまでの司祭館建設のいきさつも盛り込んだ記念品が用意できるよ」と投げかけました。ではそうしましょうと二つ返事で決まりまして発行に至ったわけです。本来は司祭館建設に関わった方への返礼の品でしたので、関係する場所や人に行き渡るだけの部数を用意しました。用意した部数はすぐに無くなりました。

ところが「取って食べなさい」には続きがありました。司祭館建設の御礼として出したのは「B年・C年」の二冊でしたが、当時の馬込小教区の信徒におだてられて「A年も発行してください。新しい司祭館に住みながら生まれてきた説教を読みたいです」と言うのです。上手に言うよね。そこで、小教区のみだけ用意してみたのですが、協力いただいたほかの方々からも「ABC年揃えたい」ということになり、追加で印刷する運びとなりました。

その後も声がかかりまして、ABC年三種類とも追加印刷をしましたが、今現在は残っていません。馬込教会の後、浜串、田平、そしてこちら福江にお世話になり、それぞれで配ってもうどこにも在庫はありません。

しかしそれでも、願う人はいるのですね。「もう残っていないのですか？」私はそう言われて、製本するには100万円単位のお金が必要なので難しいけれども、答える方法を思い付きました。パソコンが必要になりますが、PDFファイルでしたらお渡しできます。こんな感じです。

イエスは、今週の箇所、カナンの女性から「私たちがあなたのいつくしみに与る方法はないのですか？」と求められて、マルコ福音書の該当箇所では「それほど言うなら、よろしい。」(マルコ7・27)と答えておられます。イスラエルの民が優先順位は高い。けれども救いの計画の順番を壊さないなら、よろしい。そうしてイエスも女性の願いに答えてくださいました。

「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」(マタイ15・27)無理を承知で何かを願う時、「主よ、ごもつともです」と素直に認める信仰をまず持ちたいものです。その上で、「それほど言うなら、よろしい」と応じてくださる願い方があるのだと思います。私たちも、常に機転の利いた言葉で信仰の恵みを願いましょう。教会の善のために、神の力あるわざを願いましょう。

年間第 21 主日(マタイ 16:13-20)



年間第 21 主日 (マタイ 16:13-20)

私にとってでなく、私たちにとってイエスとは誰か

8月27日、学生たちはすでに二学期が始まっているようで、忙しいなあと思います。8月31日までしっかり休んでいた頃の記憶は、遠い昔の話になったようです。夏休みの間に日頃会わない人と出会ったことでしょう。その機会に一緒にお祈りしたり、一緒にミサに参加できたなら、貴重な信仰体験になったと思います。

福音朗読はペトロが信仰を言い表す場面でした。弟子たちは、人々が言っている評判を伝えます。人々は「洗礼者ヨハネ」「エリヤ」「預言者の一人」など、優れた人物の一人と言っていました。一般の人々にとってイエスは、「偉大な人物の一人」とどまっていたのです。

しかし弟子の頭であるペトロは違っていました。「あなたはメシア、生ける神の子です」(16・16)と答えます。その答えは、イエスが「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」(16・17)と指摘したとおり、天からの照らしを受けての答えだったのですが、「偉大な人物の一人」とどまらない立派な答えでした。

人が何かを言い表した時、それはその場しのぎであってははいけません。言葉に責任を持つ必要があります。説教のあとに私たちは信仰宣言をします。「天地の創造主、全能の父である神を信じます。」ミサの中で父なる神を信じますと言っておきながら、ミサを終えて一步教会の外に出た途端に神をないがしろにする人のような態度(人の悪口を言ったり人を軽んじたり)、そうした態度を取るべきではありません。生涯、父である神を信じる者として言葉に責任を持つべきです。

ペトロは表明した自分の信仰に忠実であろうとしました。熱心さのあまりイエスに叱られることもありましたが、「あなたはメシア、生ける神の子です」この信仰に恥じない生き方を貫こうとしました。これは私たちへの模範でもあります。私たちも、イエスを誰だと思っているかみずから問いかけ、その信仰に忠実に生きなければなりません。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」(16・15)弟子たちはそれぞれ、何かしらの答えを持っていたでしょう。ただ「自分よりも立派な答えを他の弟子に言われるかも知れない。それは嫌だなあ。」そんな余計な考えが邪魔をしていたのかも知れません。

そんな中で、ペトロが答えます。「あなたはメシア、生ける神の子です」。ペトロは自分にとってイエスが誰なのかを答えたというより、「自分たちにとって」イエスは誰なのかを答えてくれました。他の弟子がどう答えるかは分からない。けれども、弟子を代表して、「自分たちにとってすべてである方」そう思った時に天の父の照らしによって答えることができたのです。

「私にとってイエスは誰か」それは、狭い考えに陥るかも知れませんが、「私たちにとってイエスは誰か」を考えてみましょう。あなたの家族にとってイエスはどんな存在ですか。私たちの教会家族にとってイエスはどんな方ですか。それがしっかり答えられるようになったら、生涯にわたってその答えに忠実であり続ける努力を重ねていきましょう。責任も任せられることもあるでしょうが、「あなたは幸いだ」という約束の言葉をイエスから受け取ることになるのです。

年間第 22 主日(マタイ16:21-27)

年間第 22 主日 (マタイ 16:21-27)

私の十字架もきつと両手の長さより長い十字架



「あなたは・・・神のことを思わず、人間のことを思っている。」(16・23) このお叱りをペトロがイエスから受けた時、ペトロは「え？」と思ったのではないのでしょうか。ペトロは直前に、イエスに対する立派な信仰を言い表していました。少なくとも、弟子たちの中でいちばんイエスのことを理解していると思っていたはずで

それなのに、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」(16・23) といさめると、叱られたのです。立派に自分の信仰を言い表し、イエスのことをいちばん理解しているのは自分だと思っていたわけですから、叱られたのは予想外のことだったでしょう。

「神のことを思わず、人間のことを思っている。」よくよく考えたら、ペトロが考えを巡らせたのは「人間のこと」だった。だからイエスに叱られたわけですね。イエスがエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺されるというのは考えたくないシナリオです。それはきつと私たちが同じことを打ち明けられても同じでしょう。

ペトロはのちに、どのような形で死を迎えるかを予告されたことがありました。「あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」(ヨハネ 21・18)

「行きたくないところへ連れて行かれる。」この経験を通してようやく、人間のことを思うだけでは最後までイエスに付き従うことはできないと悟るのです。「神のことを思わず、人間のことを思っている。」神のことを思う人にならなければ、よりイエスに従うことはできません。

その、神のことを思う最も優れた方法がイエスの次の命令です。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(16・24) 私たちは年齢を重ねるにつれて何かを背負う必要が生じます。ただ、何を背負うかをよく考えなければなりません。

自分のしたいことだけ、自分の気に合うことだけを背負うならば、その人は「自分の命を救いたいと思う者」であり、結局は命を失うことになります。しかし、自分に与えられた十字架を背負うならば、それは神のことを思う生き方なので、最終的に命を得ることになるのです。

しかし、神から与えられる「自分の十字架」は、なんと重く、大きな十字架なのでしょう。祭壇の十字架を見てください。イエスの両手より長く、その背丈よりも長いのです。イエスの十字架がそうなのですから、きつと私たちの十字架も同じでしょう。

もともと「背負いたい十字架」などあるはずがありません。「この十字架は私の背負うことのできる限度を超えている」誰もがそう思うでしょう。「主よ、とんでもないことです」と言いたくなります。しかしここで、「神のことを思う」のか、「人間のことを思う」のかが問われるのです。

次のように考えてはいかがでしょうか。私たちは自分の十字架を背負い、苦しみを通してイエスに近づく経験も必要だということです。イエスは必ず苦しみを通って三日目に復活すると言われたのです。私たちも苦しみを通ってイエスに近づき、復活の栄誉に与ります。誰であれ、イエスに従う道は、喜びと苦しみ、両面が用意されているのです。

年間第 23 主日(マタイ18:15-20)

年間第 23 主日 (マタイ 18:15-20)

十字架山は二人三人が集まって祈り合う尊い場所



今週は「兄弟の忠告」という具体的な問題を福音朗読で取り上げています。兄弟姉妹間で「心からの忠告」をすることはしばしば困難を伴いますが大切な務めです。朗読を通して学びを得たいと思います。

中田神父は五人兄弟姉妹の長男です。あとは弟三人と末の妹一人です。実家に帰ると次男と顔を合わせます。良好な関係ではありますが、母親からすればいつまでも親を頼っているの、いろんな忠告を私から言うように頼まれます。長男の果たす責任を次男が果たしてくれているので、お願いしたくても中田神父から言いにくいことも多いです。

これは一例ですが、兄弟姉妹間の「心からの忠告」は、困難を伴うことが多いのではないかと思います。忠告がすぐに結果を出すとも限りません。また忠告をいったん受け入れても反故にされたりして、他人でないだけに辛いなあと思ったりします。

福音朗読では「兄弟」という言葉は肉親よりも広い意味で使われています。「同じ国民・民族」あるいは「教会共同体」と考えて良いでしょう。その中で、忠告がどうしても必要になった時、粘り強く心を込めて忠告します。排除するための忠告ではありません。何とかして、神を信じる者同士繋がりを断ち切らないための忠告です。

長崎教区には、ローマ教皇庁に認定された巡礼所が二ヶ所あります。一つは西坂の「二十六聖人殉教地」もう一つは浦上小教区の辻町にある「十字架山」です。今日は十字架山について少し取り上げます。

この十字架山は、「旅」と言われた浦上村キリシタンの一斉流配から帰った信徒たちによって、信仰の自由が認められたことへの「感謝」と、それまでの罪の「償い」、そしていったん教えを棄てて立ち帰った人や為政者との「和解」のために、カルワリオの丘に見立てた辻町の丘の上に大きな石で三段の礎を築き、その上に十字架を立てたものです。

そして今年は、「旅」の終わり 150 周年の締めくくりとして本日 14 時から十字架山でミサがささげられます。かつて中田神父も、浦上の助任司祭の時にこの場所でミサをささげましたが、先祖の苦労を思うまでは至っていませんでした。再び機会を頂いたので、厳しい迫害が解けて 150 年経って、十字架山でミサをする意義について考えてみたいのです。

十字架山までは階段を上っていきます。ロザリオしながらミサをする現地まで上りますが、息が上がるきつきです。それでも、浦上の先祖たちも信仰の自由を得た感謝のため、上って行きました。

今週の福音に結びつけると、「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなげて一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれを行なうことと約束する」(18・19)とあるように、かつて十字架山に共に集まって、やっと取り戻した信仰の自由が決して失われないように、立ち帰った信徒たちともずっと信仰の喜びを分かち合えるように、喜んできつい階段を上っていった、その姿に倣うために、今日午後から十字架山

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

でのミサがささげられるわけです。

迫害の「旅」から信徒を連れ帰ってくださった神を信じる者の信仰は、あちこちで後の人々の信仰に繋がっていきます。五島もそうです。信仰を同じくする兄弟姉妹が、互いをいたわり合い、時には忠告し、二人三人が集まって祈り合う姿を、これからも大切にしていきたいと思います。

年間第 24 主日(マタイ 18:21-35)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第 24 主日 (マタイ 18:21-35)

わたしが憐れんでやったようにあなたも憐れむべき



前回浜脇教会でミサをした時、港まで送迎してもらった話をして、高く付かなければ良いがなあ、と言っていたところでしたが、結果的に高く付きましたか。皆様にご迷惑ご心配おかけしましたこと、責任者としてお詫びします。申し訳ありませんでした。

その代わり、9月3日の聖書と典礼、中田神父の説教が回ってきたと思います。毎週、あのような原稿を用意して説教をしております。中田神父がミサに来る時はみんなの分を用意しても良いかなと思っておりますが、何部必要なのか見極めてからにします。今日は10枚あります。

福音朗読は、次のように結んでいます。「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」(18・35)人はときおり、どうしても赦せない出来事や赦せない事情を抱えることがあります。しかしイエスは、物語の主人の憐れみ深さをお手本にして、周りの人に憐れみ深い態度を取るよう勧めるのです。絶対に赦せないことにでも、それは当てはまります。

中田神父の母親の口癖は、「世の中に絶対は無い」これでした。小学生の頃、口酸っぱくこれを教えられてきました。当時は、何か欲しいもの、身につけたいものを念頭に、手に入らないものは無いとか、たどり着けない能力は無いとか、そのように受けとめていました。

あらためて考えると「世の中、絶対に赦せないものは無い」と当てはめることもできると思っています。母親は父親のことで絶対に赦せないことがあったと思いますが、それを赦してきました。「絶対に赦せない」「相手が死んでも赦せない」そう思っていることでも、「絶対というものは無いのだよ」という、人生の先輩からの教えなのだと思います。

これで皆さんが納得してくだされば、説教もここで終わりなのですが、最近「絶対に赦せない」「相手が死んでも赦せない」という事情を二つも三つも抱えている人がいることを知りました。絶対赦せない事情のうち一つは親子関係のことで、「赦せないけれども切り替えている」そう言っていました。しかし「絶対に赦せないこと」が二つも三つもあれば、それは絶対なのだろうかと思うのですが私からはとても言えません。

頭では理解していても、行動では受け入れられない。人間の限界が、どこかにあるのかも知れません。「わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」(18・33)返せない借金を帳消しにしていたのです。仲間の借金を免除できないはずがありません。頭では理解できていたでしょうが、行動で示せないのです。私たち人間が父なる神への負い目を返せないから、イエスが十字架にかかって、借金を帳消しにしてくださいました。

「心から兄弟を赦す」とは、限度を付けずに実行しようとする時、初めてその域に達するのだと思います。「相手が死んでも赦せない」その限度を、どうか取り除いてほしい。「相手が死んでも赦せない」と限

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

度を付けているあなたを、イエスはそばにいて赦し、今日も生きさせてくださっているのですから。

年間第 25 主日(マタイ 20:1-16)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

あなたはぶどう園にまる一日いたのです



今年度の聖書愛読、前半が終わろうとしています。「詩編」を、交互に読み、聞く今回の取り組みは、少し慣れてきたでしょうか。予定では四年間で詩編を読み終えることにしています。詩篇 150 編を読み終えるための長い旅ですが、これからも協力お願い致します。

今週の福音朗読は「ぶどう園の労働者」のたとえですが、ぶどう園が天の国のたとえであるとしたら、ぶどう園の主人に不平を漏らした労働者が見落としていたのではないかと思う点が一つあります。見落とした点を拾って、私たちの糧としましょう。

「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」(20・12) 早くからぶどう園で働いていたこの労働者は、自分が「ぶどう園」というすばらしい場所に一日いたことを、いつの間にか忘れていたのではないか。中田神父はそう考えました。

「天の国」を、イエスは「ぶどう園」にたとえました。天の国に早くから案内されてまる一日いた。たとえ、ぶどう園での時間が暑い中汗まみれになって働く必要があっても、天の国にずっと留まっていたことは間違いありません。ぶどう園の主人(おそらくそれは天の父なのだと思います)がまる一日働くために必要な環境を用意してくれたその中で働いたのです。これは十分感謝できることなのではないでしょうか。

そう考えると、ぶどう園にあとから雇われた労働者は、天の国にたとえられたぶどう園に、わずか一時間しか留まれません。誰も雇ってくれなかった。自分たちを天の国に招いてくれる人に出会えなかったわけです。最後の最後、こんなすばらしい場所に雇ってもらえた。招いてもらった。その感謝の気持ちで、僅かの時間でも懸命に働いたのではないのでしょうか。

この考えに立って、私たちの生活を振り返ってみましょう。私たちの多くは、早くに洗礼の恵みを受けてさまざまな恩恵に与ることのできるぶどう園に招かれました。ぶどう園は、小教区と言っても良いでしょう。このぶどう園で汗を流し、暑い中辛抱して、信仰の実りを実らせ、それを収穫しようとしています。

ひょっとしたら私たちも、自分とは違う導きをいただいて信仰に入った人に不平不満をぶつけているかも知れません。「私たちは長くこの信仰に留まっているのに、途中から来た連中と同じ扱いをされている。」この不平不満は、妥当でしょうか？ 早くから信仰の恵みにあずかってきたこと、早くから、今日まで、ずっと神様の恵みのぶどう園にいた事実を、いつの間にか忘れていたのではないのでしょうか。

「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。」(20・14) 最初に招かれた人も、最後に招かれた人も、天の国に招かれたすべての人が、慈しみ深い主人に覚えられていて、皆が同じ慈しみを受けます。神の慈しみを受ける物差しは、神の側にあります。信頼し、感謝して、神の慈しみにあずかりましょう。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

年間第 26 主日(マタイ 21:28-32)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第 26 主日 (マタイ 21:28-32)

父なる神の願いに、生き方を割いているか



10月に入りました。聖書愛読はしばらくお休みして、ロザリオの月を充実させるためロザリオの信心に取り組みます。きっと、5月・10月だけでなく毎日ロザリオを唱えている方もいるでしょう。今月はそんな方々も、唱える人が増えることに感謝してロザリオを唱えましょう。

今週与えられた「二人の息子のたとえ」の朗読箇所、兄と弟の時間の使い方に注目してみました。兄が父親から「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」(21・28)と呼びかけられ、「いやです」と言ったのは、父親のために時間を割きたくなかったのだと考えてみました。

弟も父親から同じように言われました。弟も、父親のために時間を割きたくなかった。ここまでは同じですが、弟は色よい返事をして最後まで父親のために時間を割きませんでした。兄は後で考え直して、時間を割いたのです。ここで差が付きました。

たとえ話は親子の間でしたが、「人のために」「誰かのために」時間を使うことと考えるのも良いでしょう。人間は基本的に自分のために時間は使いますが、人のためには使いたがりません。たとえ話の兄(ここでは善良な人の代表だと思えます)、この兄も父親のために時間を割きたくなかったのですが、後で考え直して父の願いに応えたのでした。

来週、福江文化会館で中村哲医師のドキュメンタリー映画が上映されます。初めパキスタンとアフガニスタンで医療活動に従事していましたが、そもそも清潔な水が得られないのでさまざまな病気が発生する。その解決のために畑違いの水路を引く事業に心血を注ぎ、貧しい人々の健康に寄与しつづけました。ところが志半ばで凶弾に倒れます。

中村哲さんの思いを理解できず、苦々しく思っていた人たちに未来を断たれたのですが、彼の意志は、今もアフガニスタンで生き続けています。それは、純粹にアフガニスタンの人々のために時間を使ってくれたからです。人生の多くの時間を、アフガニスタン国民の向こうに見える父なる神のために割いて捧げてくださったからです。

洗礼者ヨハネが示した「義の道」も、利己的な生き方を棄てて積極的に人のために自分の持ち物や時間を割いていく生き方でした。それがそのまま父なる神のために持ち物や時間や都合を割く生き方につながりました。当時の宗教指導者たちは、その生き方を受け入れませんでした。

私たちはどうでしょう。今回「人のために時間を割く」という切り口で考えてみました。実は私たちの周りには、お手本になる生き方の方がちゃんといらっしやいます。神と人のために時間を割く生き方を生涯貫く人たちがいます。また、それを天職としている人もいます。

たとえその生き方が、途中で断たれたとしても、たくさんの方が「あの方は、父なる神のために時間と都合を割く『義の道』を示してくれた」と覚えていてくださいます。覚えられているなら、これからも「後で考え直して生き方を学ぶ」そういう人も現れるに違いありません。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

中田神父は特に、自分を戒めなければならない生き方に召されました。父なる神のために働かなければ、私の働きは意味が無いのです。人のための働きでなければ、働きには意味が無いのです。召された生き方を、自分が食べるための働きにした時、私の価値は下がるのです。

ミサにお集まりの皆さんも、生活の中で人のために時間や都合を割いているなら、神に感謝しましょう。あなたは先に神の国に入る生き方をしています。もし、自分のためにしか時間や都合を割いていないのなら、「後で考え直せるように導いてください」とお願いしましょう。私たちは神の国に入れなくなることだけは避けなければなりません。

年間第 27 主日(マタイ 21:33-43)

年間第 27 主日 (マタイ 21:33-43)

捨てられた御独り子を拾って救いの計画の親石とした



今週の福音朗読箇所「ぶどう園と農夫のたとえ」は、先週の朗読箇所に引き続き、社会で指導的立場にあった「祭司長」や「民の長老たち」への強い非難が込められています。先週は、「あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じなかった」と非難します。

今週の朗読では「だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」と非難します。イエスはただ単に非難しているわけではなく、耳を傾けてもらいたくて強く言うているのです。

このような結果になるには、それなりの原因があるでしょう。今週の朗読で言えば、ぶどう園の主人が農夫たちに送った人々をすべて拒絶した、もっと強い言葉で言えば、捨てたことが原因です。農夫たちは三度捨てます。しかも、順を追うごとに強く捨て、ぶどう園の主人の悲しみは深くなっていくのです。

「これを捨てるのですか？」何を捨てられてガッカリするかは人によって少し違うかも知れませんが、誰が見ても「これは捨ててはいけません」というものはあると思います。ぶどう園の主人が送った僕を捨てることは、どう見てもやっけてはいけないことでした。捨ててはいけないものを捨てられて悲しんでいるのに、それでもぶどう園の主人は農夫からの収穫を期待しているのです。

人間的には、「いい加減にしろ」と叫びたくなる状況です。それを、ぶどう園の主人にたとえられている父なる神は、赦そうとしておられます。父なる神は、より深く捨てられたのにより深く赦し、実りに変えてくださる憐れみ深い方なのです。この神に、すべての人は心を開き、耳を傾けるべきです。

中田神父も、自分の感覚では決して捨てるはずのないものを捨てられているのを見て心を痛めたことがあります。結局そのときは中身を開けて取り出しました。私は人間に過ぎないので、「いい加減にしろよな」と思ったものです。しかし同時に、捨てられていたものを拾ったのだから、必ず収穫に変えて神さまにお返ししたいとも決意しました。

もちろん、中田神父が捨てたもので人を悲しませたり、神を悲しませたりしたことがあったかも知れませんが、もしそうであれば、ゆるしを請う以外にありません。捨ててはいけないものを捨ててしまった弱い人間を神が赦してくださったのですから、心を開き、耳を傾ける日々を積み重ねることにしましょう。

神は、御独り子を遣わし、捨てられても諦めませんでした。捨てられたのにみずから御独り子を拾い、隅の親石とし、救いを完成してくださいました。今日も私たちは、この憐れみ深い神に赦され、愛されて生きています。

年間第 28 主日(マタイ 22:1-14)

年間第 28 主日 (マタイ 22:1-14)

救いを成し遂げてくださった方を証明する生き方が必要



私たちの教会は、定期的に巡礼団が来てミサをささげますが、今月特別な方がおいでになります。大阪高松大司教区の教区長となられた前田万葉枢機卿様が 28 日(土)巡礼団と一緒においでになって、午後 3 時 50 分から福江教会でミサをささげてくださいます。浜脇教会でも、29 日夕方 4 時からミサをささげてくださいます。特に浜脇教会では主任司祭を務められた方です。可能でしたらそれぞれ参加してください。

今週の福音朗読は、天の国を「王子の婚宴」にたとえています。「王子」は、イエス・キリストでしょう。ただ、イエス様のご生涯のどの部分を「婚宴」と言っているのでしょうか。イエス・キリストのとても大事な場面に、招いておいた人々は来ようとしなかったのです。

また、見かけた人はだれでも集められたと言うのですが、どの場面が当てはまるのでしょうか？中田神父は、「婚宴」が王子の生涯の決定的な場面であるなら、それはイエス・キリストの十字架の場面なのではないか、と考えました。

たとえ話の「招いておいた人々」は、おそらくユダヤ人です。先に、ユダヤ人が救われるはずでしたが、彼らは心を開くことなく、イエスを死に追いやったのです。

一方で、町の通りで見かけた人はだれでも婚宴に連れて来られました。当時の習慣では、貧しくて礼服を持たない人がいれば、招いた側が礼服も用意してあげることになっていました。しかし客の中に、礼服まで調べたのにそれを拒んだ人がいたのでしょうか。その人は目の前にあったチャンスをみすみす逃しました。

これは、イエスの十字架上の出来事を振り返るとよく当てはまります。イエスの十字架のそばには、犯罪人も十字架にかけられていました。そして一人は回心して救われ、一人はそれをみすみす逃したのです。

ここで私たちは考える必要があります。「礼服」とは一体何だったのか、ということです。中田神父はこの「礼服」を、「救いを成し遂げてくださったイエスを証明する生き方」と受けとめました。「救い」そのものはイエスが十字架上で成し遂げてくださいました。しかしその救いは、私たちが生き方で証してこそ、一人ひとりに実現するものなのです。「イエス様が救ってくださったのだから、私たちは墮落した生き方をしても構わないのだ」ではない、ということです。

あらたまった場所に紺のスーツとネクタイをして出席すれば、ふだんは汚れが付いても気にしない人も、スーツにブラシをかけたりして常に良い状態を保とうとします。それはその人が、招かれていることを態度で証しているわけです。そのように、自分がイエスによって救われていることを忘れず信仰の良い状態を保とうとする時、私たちの救いは確かなものとなるのではないのでしょうか？

私たちは一人残らず、イエスの十字架によって救いの宴に招かれた

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

のです。私たちにできる生き方で、救いに招かれた者であることを証しましょう。あなたがどこでも十字架の印ができる。その一つ取っても、礼服を身につけているのだとすべての人の前で証明することになります。

年間第 29 主日(マタイ 22:15-21)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第 29 主日 (マタイ 22:15-21)

生き方で神のものは神に返す



「偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。税金に納めるお金を見せなさい。」(22・18-19) イエス様のように私も問いかけてみましょう。「皆さん。ふだん使っているお金を見せなさい。」たとえば千円札は、だれの肖像と銘でしょうか。

毎日利用しているお金ですが、このお金に刷られている人物と私たちは、いったいどれくらい関わりがあるのでしょうか。千円札には野口英世が印刷されていますが、果たしてどれくらいお世話になった人物でしょうか。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」(22・21) ユダヤの国をローマは征服し、支配していました。生活に行き渡っていた貨幣にはローマ皇帝の肖像が刻まれていましたが、当時の刻印技術ではぼんやりとした姿だったでしょう。そのように、人々とローマ皇帝との結びつきと言っても、ぼんやりしたものに過ぎませんでした。

それでも、何かしらの便宜は得ていたでしょうから、必要に応じて貨幣を使用することで世話になった分は返します。しかしそれよりも大事な「神のものは神に返しなさい」と言っているのではなく、強い命令として「神のものは神に返しなさい」と言っておられます。

ここで「どれが神のものか」を考えるのはあまり意味がありません。私たちの命は私たちが手に入れたものではないし、私たちに用意されている時間(人生と言っても良いですが)も、私たちが工面したものではありません。命と、どれくらい生きられるかの時間。どちらも神のものです。ですから私たちは命ある限り生きて、神にお返しをしなければなりません。

神にお返しをする生き方にもさまざまな形があります。森の木々は、成長する中で枝を伸ばしていきます。枝を切っても、また枝が伸びます。枝を神さまにお返しするものと考えたら、木の幹は失わずに神さまにお返しすることができます。両立した生き方で神のものを神に返します。

ある人は、木の幹も最後に神さまにお返しします。自分の人生があるのは神様のおかげだったのだから、ありったけのものをお返しして構わない。幹の部分も喜んでお返しする人もいますでしょう。海外での話ですが、2022年、「パタゴニア」というキャンプ用品メーカー創業者が、すべての株式を環境団体に譲渡したことが話題になりました。毎年100億円を売り上げるメーカーですが、枝ではなく木の幹を手放しました。神さまが作られたこの地球環境のために、すべてを神に返したのです。

ここまでできる人はそんなにいませんが、これほど偉大な人でも、本人が生活に困るわけではありません。生きられなくなるわけではありませんし、時間も残されています。もし、本来なら残るはずの時間まで「神のものは神に返しなさい」と要求されたらどうなるのでしょうか。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

ほとんどの人は、「全財産を手放したのだから、時間まで手放す必要があるのですか？」と考えるでしょう。少なくとも、納得できないと返せないと考えるでしょう。人間ですから、「私の人生の残りの時間を、こんな形で返せと言われても困ります」そんな場面もあるでしょう。

無理とも思えるような形で「神のものは神に返しなさい」と言われて、私たちは従うことができるのでしょうか。「なぜですか」とさえ言いたくなる求めに、英雄的な形で応えた人々がいます。続きは、「牢屋の窄殉教祭」で話しましょう。どうぞ、おいでください。

年間第 30 主日(マタイ 22:34-40)

年間第 30 主日 (マタイ 22:34-40)

無関心を捨て、神への愛と隣人への愛に力を注ぐ



10月のロザリオ、本当にご苦労さまでした。朝ミサ前のロザリオも立派でしたが、月・水・土曜日の子もたちのロザリオは、本当に立派だったと思います。中田神父は子どもたちが集まってロザリオしていることに途中で気づき、何回か参加しました。教会の動きにまだついて行けず、申し訳なく思っています。

今週の福音朗読で律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねます。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」(22・36)これがなぜ「試している」となるのか。律法の専門家は、神が守るように示した律法を、どんな些細なことも漏らさず守ろうと努力していました。それが正しい道であり、それをできない人々は神の救いから外れていると考えていたのです。

そのような律法の専門家ですから、「どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねたのは巧妙な「罠」でした。律法のうちのどれかを指して「これが最も大事だ」とイエスに答えさせて、「イエスは律法を漏らさず守ろうとしていない」と非難する口実を得ようとしていたのです。

律法の専門家たちの偽善が、ここに見えます。彼らは神が人をこよなく愛しておられること、人を愛しておられるから神は掟を守るように期待している、この点には関心がなかったのです。神が人を愛しておられることを何より大切に考えなければならないのに、掟だけを切り離して考え、掟を忠実に守っている自分にしか関心がなかったのです。

神が私たちが愛しておられることを心から感じられるなら、神の愛に、生活や掟で精一杯応えようとするでしょう。しかし神の愛に無関心であるなら、私たちは神の計らいに何も答えようとしません。

同じように、神が身近にいる人を心から愛しておられるのだから、自分もその身近な人を心から愛するように期待されています。しかし身近な人に無関心であれば、その隣人を愛しようとしません。神が時代時代に私たちが心から愛して働いてくださっているのに、私たちが隣人に目を向けず、手を差し伸べないとしたら、神は悲しむことでしょう。

掟だけを切り離して考える人は、掟を守ろうとする目の前の人が見えなくなり、無関心になります。先日教皇はイスラエルとパレスチナの住民のために、祈りと断食を呼びかけました。私たちはどうしても、テレビの中で起こっている出来事として切り離して考えてしまいます。神が愛しておられる身近な人として見るために、教皇は祈りと断食を呼びかけました。今からでも遅くはありません。教皇がイエスの代理として、身近にいる人ですと示されたイスラエルとパレスチナの人々のために、祈りと犠牲をささげましょう。

掟には、神の愛が込められています。神を心を尽くして愛する。その答えとして、十戒や教会の掟を理解します。今泣いている人、今悲しんでいる人を神はいちばん近くにいて愛しておられます。その

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

神に応えるために、私たちも泣いている人、悲しんでいる人を愛しましょう。そして具体的に手を差し伸べましょう。

神が私たちを愛してくださっている、そこに根ざして生活を整えていく時、私たちはイエスの愛の掟に生きる人になっていきます。

年間第 31 主日(マタイ 23:1-12)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第 31 主日 (マタイ 23:1-12)

神の権威を徹底的に認めることから



「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである。」

(23・2・3) これは宗教指導者たちに向けられた非難ですが、私は教会の司祭たちにこれが当てはまっていないか、ご迷惑をかけているのではないかと心配しています。

かつては分かりませんが、今、信徒の司祭に対する見方は非常に厳しくなっていると思います。司祭が祭壇でお世話することよりも、司祭の日常の言葉や振る舞いで迷惑をこうむっていることのほうが多いかもしれない。それでもかつての信徒は黙っているかも知れません。

今は違います。司祭が説教台から話すことは、司祭のお手本がなければ聞いてもらえません。「自分がしていることを棚に上げている」と、はっきり指摘を受けます。自分自身、下五島地区に来てからのことを振り返ってみると、自分のしたいことのためには時間を使うけれども苦手なことや面倒なことには時間を使わず、それでいて信徒の皆さんへの要求は天井知らず。これでは説教に耳を傾けてはもらえません。

川原義和神父様という先輩がおられました。教区の会計を長く務めていました。私が半年間カトリックセンターに住まわせてもらって、センターから滑石教会に通勤していた時期があり、そのご縁でいろいろな話を聞かせてもらいました。その中でいちばん印象に残っている言葉が、「長崎教区の司祭は『なんもせんもん家』が多い。驚くほど何もしない。」という話です。専門的な勉強をしている「専門家」ではなく、何もしない「せん・もん」家だ、と言っていたのです。

教区に提出する予算・決算、年6回やってくる特別献金の送金、年一度の現勢報告と財産目録の提出など。都度提出してくだされば何も問題ないのに、その時期になると報告のない小教区があって教区会計の仕事が止まります。しかたなく、教区会計職員の方が電話で催促します。結局対応したのは評議会役員でした。

特別献金も日本の教会全体でまとめるために一定の期限を切って受け付けています。送金がまだの小教区に、またも職員の方が催促の電話です。司祭は役員に務めを押し付け、当たり前なのが当たり前できません。それを揶揄して、「教区司祭はなんも『せん・もん』家だ」と言っておられたのです。二つ目の教会の助任だった中田神父はその話を身のすくむ思いで聞いておりました。

そんな「せんもん家」の司祭にも、態度を改める機会は何度かあったと思います。長い司祭生活です。思い通りにいかない時期もやって来ます。その時期に「自分の言葉や態度がうまくいかない原因ではないだろうか」と考えて、本来の「仕える者」になる。へりくだる者として一つ一つの奉仕に心を込める。そうすると、結果も付いてくるわけです。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

どんな務めでも、心がけや取り組み方が違えば果たした務めの価値は違ってきます。司祭が急に呼ばれる場面と言え、病者の塗油だと思えます。「忙しいのに・・・」と心の中で考えて病者の塗油に出かけていくのと、「これは、イエスが言われた『病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ』（マタイ 25・36) に倣う絶好の機会だ」と思って出かけるのでは、果たした務めの価値は違うわけです。

「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。」

(23・11) イエスの招きを真に理解するためには、「権威」は神お一人にあると、心から受け入れることが必要です。教会の中では「権威」は神のもので、それを心から受け入れる時、「権威」を振りかざし、言うだけで実行しない「なんもせんもん家」の司祭は長崎教区から居なくなるのだと思います。

年間第 32 主日(マタイ 25:1-13)

年間第 32 主日 (マタイ 25:1-13)

神に呼ばれるそのときには用意を整えて待つ



今週の福音朗読の半ば、賢いおとめたちも愚かなおとめたちも、皆眠り込んでいて起こされる様子が描かれています。「ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。」 (25・5-7)

これが何を表しているかということ、賢いおとめも、愚かなおとめも「花婿だ。迎えに出なさい」と眠っているところを起こされた。この条件は同じだということです。違いが出たのは、眠り込む前に、賢いおとめは次に必要になることを備えていたこと、愚かなおとめは備えがなかった、ということです。

中田神父が「備え」ということでいつもたとえに使う出来事があります。それは新生児の誕生の出来事です。新生児はお母さんのお腹の中で10ヶ月過ごし、生まれてきます。もし、お腹の中の10ヶ月さえ過ごせばそれで良いというのであれば、何かを食べるための「口」も、匂いを嗅ぐ「鼻」も、必要ないかも知れません。

しかし、10ヶ月経って生まれ出てくれば、その瞬間からさまざまな能力が必要になります。目・口・耳・鼻、数え上げればきりがありませんがそれらがすぐに必要になってくるのです。「しまった！準備してなかった。今から準備しよう」では間に合わないわけです。

これは朗読のおとめたちの心がけをよく教えてくれます。おとめたちは、ともし火をともしことで働かれます。ともし火のための油を切らしてしまえば、自分の働きを果たせなくなるのです。「ともし火を、今さえともしておけば大丈夫」愚かなおとめたちはそう思ったのでしょう。眠気が差して、起こされた時、次の場面で必要な油を用意していませんでした。「今さえ良ければ」という考えしかなかったからです。

賢いおとめたちは違いました。彼女たちは次の場面で必要になるものを、ちゃんと準備していました。眠りから覚めた時、賢いおとめたちも今必要な油はなくなっていて、次の場面で必要な油、準備しておいた油を用意したのです。

花婿と一緒に招かれる婚宴の席。それは戸が閉められ、私たちが過ごす「今」とはきっちり分けられる場所のようです。次の場面で必要な準備がなければ、「開けてください」と言っても「はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない」 (25・12) と言われてしまうのです。

賢いおとめたちが準備していた壺の中の油とは何でしょうか。それは「神への愛と信仰」かも知れません。今さえ良ければ構わないという生活であれば、神への愛も信仰も、整えなくても生きられるでしょう。日曜日に早起きして一時間二時間、神様のために時間を使う必要もないでしょう。

しかし天の国では、「あなたを信じて生きていました」と証明する

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

ものが必要なのです。あるいは朝晩の祈りであるとか、隣人に手を差し伸べて愛のわざを行うとか、教会のために維持費を納めるとか、そうしたことが「油」となって、宴に招かれるのではないのでしょうか。

「今は忙しい。歳を取ってゆっくりしてから信仰も愛のわざも取り組みます。」本当にそれで良いのでしょうか。ある人は「今取り組まなければ、残された時間は数ヶ月です」と宣告されるのです。今週の福音朗読の結びはこうです。「目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」 (25・13)

年間第 33 主日(マタイ 25:14-30)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

年間第 33 主日 (マタイ 25:14-30)

あなたは何を差し出して「御覧ください」と言いますか



私は寝ていると夢を見ていることが多いです。どこで寝ていても夢を見るのは才能と言えるかも知れません。何せ世界史の授業中に寝ていて、すばらしい光景を見ていたら、山中寛先生から頭をゴツンとたたかれて授業に戻されたことがあるくらいです。

夢は見ても、寝言は言わないと思っていたのですが、どうやらそうでもなさそうです。30代頃の記憶になるのでしょうか。地区の司祭たちで泊りがけのお出かけをした時です。翌朝の食事中、先輩方が私の顔をのぞき込んで深刻そうに言うのです。「おい。昨日はどがん夢ば見たとや? 『ごらんください!』って叫びながら万歳しよったぞ。」先輩方がそう言うのですからそうだったのでしょうか。しかし当の本人は、どんな夢だったか思い出せませんでした。

そこで自分なりに想像してみました。すぐに思い付きました。まさに今週の、タラントンのたとえです。預けられたお金をうまく運用して、ご主人にこう言っている場面です。「御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。」(マタイ 25・20)

しかし、「忠実な良い僕」だけが「御覧ください」と言ったわけではありません。「怠け者の悪い僕」も、「出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です」(25・25)と言っています。

私が夢で叫んだのはどちらか。「喜んでください」のほうの「御覧ください」だったに違いないと思っていますが、いずれにしても私は何かを差し出して、主人に「御覧ください」と言ったのです。これを今週の学びにしたいのです。

人は皆、命の主人から能力に応じて預けられたものがあります。命の主である神が、「忠実な良い僕だ。よくやった」そう答えてくれる人生を期待されているのです。預かったものはそれぞれですが、決してそれを土の中に埋めて放置し、主人の思いに背いてはいけないのです。

私は、「タラントン」を「才能」に結びつけて考えることが多かったと思いますが、今回は違う見方を示したいと思います。人によっては大きな十字架を背負わされている人もいるでしょう。何かしらの障害や、長く続く病気などは、できれば避けたいものかも知れません。

しかしその人が忠実に十字架を背負い、または病と常に向き合うなら、その生き方は「御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました」これに匹敵するのではないのでしょうか。それを見て神様は「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」(25・21)と言ってくれるのです。

病や障害が、決して「少しのもの」でないことはそれを与えた神様

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

が十分承知です。その苦しみ、痛みも知った上で「主人と一緒に喜んでくれ」と答えてくれます。人が羨むような才能でも、神様の期待に背を向けて、神様の喜ぶ使い方をしなければ、それは土に埋めて活用せず過ごすことと同じです。才能も、十字架も、神が預けてくださったものです。要は預けられたものに忠実であったかということです。

お一人お一人、命の主である神様が精算を求める時が来ます。その時に私たちは何を差し出して「御覧ください」と言うのでしょうか。「置かれた場所、境遇の中で神の期待に忠実に生きる」この思いを持ち続けましょう。「御覧ください」と、正直に自分の一生を報告する。そのために日々を大切に生きることにはしましょう。

王であるキリスト(マタイ 25:31-46)



王であるキリスト (マタイ 25:31-46)

いつわたしは、あなたの食卓に席に着きましたか

初聖体クラスのお友だちは、長い準備を終わって、今日御聖体をいただきます。とても楽しみです。中田神父様は、皆さんが今日までしてきた長い準備を、立派だなあとと思っています。

実は中田神父様も、マラソン大会の準備をしています。司祭団マラソン大会と言って、だいたい1月の最後の火曜日に、長崎教区内から20人とか、30人の神父様が集まって、堂崎教会から福江教会まで9キロ、走ったり徒歩で向かったりするんです。

ただ、中田神父様が練習を始めたのは11月15日、大会まで2ヶ月しか残ってなくて、準備したのはたったの2ヶ月です。初聖体のために、ここにいる三人は9ヶ月準備しましたよね。初聖体のために9ヶ月も準備したお友だちと比べたら、マラソン大会のために2ヶ月しか練習しない中田神父様は恥ずかしいです。

これも正直に言いますが、神父様はたぶんマラソン大会が終わったら「あーやっと終わった。これでしばらく走らなくて済むぞ」と走るのをやめてしまうと思います。30年間、ずっと同じ事の繰り返しでした。この日のためにしばらくのあいだ練習して、あとはやめちゃうんです。

初聖体を受けるお友だちは、そうならないと信じています。9ヶ月という長い準備をして初めてイエス様をいただきます。それなのに「これで御聖体はもう受けなくていいかな。年に一回で十分だ」そんなことにならないように、ぜひこれからも日曜日(前晩の土曜日でもいいけど)には教会に来てミサに参加して、御聖体を拝領してください。

自分への言い聞かせも含めて、親子とも次のことをお願いしたいです。ミサに参加して、御聖体を受けて、イエス様にこれからも養われ、導かれていってください。ミサと聖体拝領を続けると、毎週の、必ず必要な恵みになっていきます。本当は私のトレーニングも、大会のあとも続けていけば、心と体の健康を保つために必ず必要なものになるのです。教会のお恵みが私には必ず必要だと分かる日が来ます。その日のためにも、これから続けてミサに来て、御聖体を拝領しましょう。

休まずミサに来て、御聖体を拝領するお友だちに、イエス様はきっとこのように声をかけてくれます。「あなたはわたしが会いたいなあと考えた時に会いに来てくれた。わたしのからだを分けてあげたいなあと考えたときにみことばと聖体の食卓に席に着いてくれた。」

続けてミサに来て、聖体拝領していると、何月何日ミサに来たと言われても思い出せないかも知れません。「いつわたしは、あなたが会いたいなあと考えた時に会いに行ったのでしょうか。あなたの食卓の席に、いつわたしは着いたのでしょうか。」覚えていなくても大丈夫です。このようにイエス様に答えたあなたは、回数を覚えていないくらいミサに来て、御聖体拝領したはずだからです。クリスマスだけ来たとかではなく、何回ミサに来て御聖体拝領したか覚えていない。これくらいミサと聖体が当たり前のことになるように願っています。

では最後に、初聖体を受けるお友だちに御聖体のことをどれくらい学んだが、共通テストをすることにしましょう。

待降節第1主日(マルコ 13:33-37)

待降節第 1 主日 (マルコ 13:33-37)

家族



待降節、イエス様の誕生を心待ちにして過ごす季節が始まりました。朗読の最初と最後に、「目を覚ましていなさい」とあります。気を抜かずに、待ち構えている人のようにして過ごす必要がありますが、私たちはどれくらいの時間だったら、気を抜かずにいられるのでしょうか。30分でしょうか。

11月15日から、司祭団マラソン大会に向けてトレーニングに入りました。今は、福江教会から片道30分で3.4キロ先のバス停、南河原口(なんごうらぐち)まで行って往復しています。最終的には、堂崎天主堂から福江教会まで約9キロ、1時間でゴールしたいと思っています。

中田神父は、本来は運動嫌いです。トレーニングに行くのもおっくうなのですが、一つのことを組み合わせる外に出る動機づけにしています。それは、ある三人の人の健康回復を願って祈りながら往復することです。三人のうち一人は大腸がんです。あと二人は病気の親子です。

祈りながら、トレーニングも緩めずに往復できるか。気を抜かずにいるのは難しいです。気分転換でなくトレーニングですから、楽に歩くわけにはいきません。平坦な道も上りも下りも速度に気を配ります。それでいて、気になる三人の健康回復の為、「AさんとBさんとCさんの健康回復をどうかお願いいたします」とイエスに繰り返し願っています。

好きではない運動も、お祈りと結びつけて続けられるようになりました。しかしすぐに気が緩み、どちらかを忘れてしまいます。歩く速さが緩んできて、「ペースを上げなければ」と考えるし、さっきまで祈っていたのにしばらくお祈りが止まって「お祈りを続けなければ」となります。呼吸するようにお祈りできたらなあと思っています。

途中、私を知っている人ともすれ違います。福江教会の信者なのか、「神父様」と声をかける人と会います。ただどこで会うのか分かりません。調子が出ているときに会えば、「さっそうと歩いている。さすが」と思うでしょうが、トボトボと歩くときに会うかも知れません。

同じく私の祈りにいつイエスが耳を傾けてくださるかも分かりません。意識しているときなら良いですが、景色に気を取られたり、トレーニングに気を取られているときに耳を傾けているかも知れません。せっかくなら、いつ耳を傾けてくださってもよいように、目を覚まして祈り続けたいです。トレーニングしながらでも、目を覚まして祈ることができるになれば、生活のどんな場面でも気をつけて、目を覚まして祈り続けることができるかも知れません。いちばん難しいときに祈れたら、どんな時にも祈ることができるでしょう。

皆さんも生活のどこかで、「気をつけて、目を覚ましていなさい」このイエスの呼びかけを体験してほしいと願っています。でも本当に忙しい生活の中であって、ゆっくりとイエスの呼びかけを体験する時間は取れないかも知れません。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

そうであるなら、いっそのこと必ずしなければならないことと組み合わせ、「気をつけて、目を覚ましていなさい」この呼びかけを体験するのが良いと思います。中田神父は、今はマラソン大会のための練習をどうしてもしなければならぬので、これと組み合わせってみました。

皆さんの生活でも、どうしてもしなければならぬこと（買い物とか、掃除、洗濯、通勤の行き帰りなど）があつて、その時間と、「気をつけて、目を覚まして」イエスの誕生に備えることを組み合わせたらと思っています。

イエスの誕生を、ただ待つのではなく、その時に備える、気をつけて、目を覚ましてその日を迎える。このための日々として、これからの待降節を過ごしていきましょう。

待降節第 2 主日(マルコ 1:1-8)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。



待降節第 2 主日 (マルコ 1:1-8)

主の道を整え、道筋を真っ直ぐにせよ

「主の道を整え、その道筋を真っ直ぐにせよ。」(1・3) イザヤのことばは、洗礼者ヨハネによって実現しました。曲がりくねった道、まあ言えばこう言う、これが現実です。それでもヨハネは、ダメなものはダメと、曲がったことと決して妥協せず救い主到来を準備させました。

しかし周りを見れば、曲がったことと妥協したり折り合いを付けたりして生きています。たとえ人の道に反すると思っても、「人の道に反しています」とはつきり指摘を受けてさえも、臆病になり真っ直ぐにすべきことができない、哀れな現実があります。洗礼者ヨハネの、竹を割ったような真っ直ぐな歩き方に合わせる人ができない人は、うつむくばかりです。

しかし、あとから来られる救い主は、弱くて道筋を真っ直ぐにできない哀れな人にも、憐れみをかけ、赦しを与えようとされます。私たちはその方を今まさに待ち望んでいるのです。仮に「悔い改めます」と、日に七度告白するような人にも、希望を持たせてくれるお方です。

まことの罪の赦しを届けに来る救い主は、どんなに有難いことでしょう。洗礼者ヨハネの洗礼は、「悔い改めの洗礼」と言われました。ヨハネの洗礼は、律法に背く状態から、律法にかなう状態に改めるところまででした。一方、後から来られる救い主は、掟によっては救えないような深い闇に住む人々にも光となってくださる方です。

先週から、クリスマス前の赦しの秘跡を案内しています。全員クリスマスの前に受ける必要は無いかも知れませんが、この秘跡は自分の努力だけでは道を真っ直ぐに歩けない私たちを赦して、大きな愛で包んでくださるイエス様の恵みです。よりよい降誕祭を迎えるために、積極的にあずかりましょう。

赦しの秘跡で、償いとして「愛のわざを一つ果たしてください」と言われたら皆さんどうしますか。もし、今日でしたら9時のミサ後に青年会がミニバザーを用意しています。ミニバザーに顔を出して協力してくださるなら、それは確実に「愛のわざ」となります。ほかにも、主日のミサ参加にとどまっている人が、月曜日から土曜日、平日のミサに一回でも参加するなら、それは立派な「愛のわざ」だと思います。

平日のミサに参加するには眠気に打ち勝ったり、忙しい時間をやりくりしたり大変だと思いますが、それをあえて引き受ける。その「愛のわざ」は、ご降誕のその日に必ず、報いとなって返ってくる。中田神父はそう思います。バザーに顔を出すか、平日のミサに参加する。私は具体例を示しました。どちらでもけっこうです。

「歩く道を真っ直ぐにするように、私たちは期待されている。」あなたがそう思うなら、ぜひ自分にできることを考え、実行しましょう。待降節にささげた私たちの愛のわざに、おいでになる救い主ははるかに優れた喜びで報いてくださいます。洗礼者ヨハネもこう言っているのです。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。」(1・7)

待降節第 3 主日(ヨハネ 1:6-8,19-28)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

待降節第 3 主日 (ヨハネ 1:6-8,19-28)

私たちの教会に光について証しする人はいますか



この前、青年会のミニバザーに参加して愛のわざを実践しましょうと言ったら、去年の二倍の参加者だったそうです。宣伝しすぎましたかね？青年会もとても喜んでくれました。ありがとうございました。

今年は待降節が短いです。来週待降節第 4 主日ですが、その日のうちに主の降誕・夜半になります。12月3日から、待降節は3週間しかありませんでした。先週と今週、洗礼者ヨハネの証しを通して私たちはご降誕の準備をしています。洗礼者ヨハネは光について証しをします。

クリスマスが近づくと、決まって一種類の電話が繰り返しかかってくる。この時期に、うんざりするほどかかってくる電話です。この前の電話はこうでした。「24日のミサは何時ですか？」中田神父は意地悪なので、「24日朝は6時と9時です。」と答えます。

すると、「それってクリスマスのミサですか？」と聞き返してきます。「いいえ。待降節第 4 主日ミサです。」すると更に聞き返してきます。「クリスマスのミサはないのですか？」「ありますよ。夜半のミサは夜7時からです。」「ちなみに25日はミサはありますか？」「25日は朝6時と9時です。」この電話がずっと続きます。

この電話の対応で、私は罪に罪を重ねてしまいそうです。「そんなことでいちいち教会に電話かけてくるな」とか、「全部のミサに来ないくせに、ミサの時間を全部聞く必要があるのか」など、罪深いことを心の中で叫んでいます。

ここでようやく、洗礼者ヨハネの使命に思いが向かいます。「彼は光ではなく、光について証しをするために来た。」(1・8)中田神父は光ではなく、光について証しをするための存在です。「クリスマスのミサは何時ですか？」この電話はきっと、イエス・キリストに出会いたいから電話をかけているのでしょう。電話の対応は光について証しをすること、光である御子イエスの誕生に導くこと。そう自分に言い聞かせて、何度同じ事を聞かれようとも、誠実に対応しなければと思いました。

洗礼者ヨハネは、一度も自分に誉れを受けることなく、光であるイエスに誉れがもたらされるように働き続けました。彼はほかの箇所でもこうも言っています。「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。」(3・29)

イエス・キリストがおいでになるために、洗礼者ヨハネの働きはどうしても必要でした。彼の働きはのちにイエスから「ヨハネは、燃えて輝くともし火であった」(5・35)と称賛しています。世間的には「日の目を見ない働き」と映るかも知れませんが、それでも、救い主の準備のために、必要な人なのです。私たちの教会がイエス・キリストの輝きを映し出す鏡になるためにも、洗礼者ヨハネのような働きが必要です。

待降節第 4 主日(ルカ1:26-38)



待降節第4主日 (ルカ 1:26-38)

マリアの答えが想定を上回っていたので去って行った

人間も還暦が徐々に近づいてくると、非常にずる賢くなるようです。誰かが自分に説明して聞かせているとしましょう。その話の中身を、話している相手よりも数倍詳しく知っているのに、「ほお。そうか。なるほど」と、初めて聞いた話であるかのように聞いたりします。

内心は「誰に向かって話しよう」と思っているのですが、それを顔に出さず、「おお。お前詳しいんだな」と返したりします。話している相手は大満足です。思い返すと中田神父も、30年前には主任神父様に同じように何かを得意になって話していたのかも知れません。

主の降誕がもうそこまで来ています。準備を急ぎましょう。イエスの誕生の予告が、本日の福音朗読箇所です。朗読で目に留まったのは、天使ガブリエルとマリア、ともに「言った」場面が二度ありまして、マリアの語られた言葉が、特に印象的です。

天使ガブリエルが神から託された言葉は、心の清いマリアでさえも、戸惑い、考え込むほどでした。一般的に何かの挨拶は、相手を間違えていない限り、思い当たることであって、「あー、そうなんだな」と受け入れることができるのですが、「いったいこの挨拶は何のことか」(1・29)と感じたのです。

マリアの一回目の「言った」では、天使ガブリエルの二度の「言った」を受けとめるため、マリア自身を完全に解き放ちました。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」(1・34)これは心を閉ざす方向にではなく、何とかして受けとめようと、心を解き放って尋ねた言葉でした。

そして天使ガブリエルが答えます。天使の答えを聞いて、マリアの二度目の「言った」は次の通りです。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」(1・38)ご自身をすっかり委ねるマリアの言葉は、天使に託された言葉を包み込むものでした。

マリアの「言った」が十分だったので、天使は満足し、これ以上何も語る必要がないので去って行きました。人間の言葉が、神から託された言葉を包み込むほどであったのは、これが最初で最後だったことでしょう。マリアは二度の「言った」の中で、心を神に向けて完全に解放し、ご自身をすっかり委ねたのです。

これが、私たちに示されたご降誕への最後の準備です。ご降誕は目の前です。私の心を御子の住まいとして、完全に解放しておきましょう。「準備しますから、しばらくお待ちください」ではありません。すぐに泊まっていただけのように、完全に解放しておきましょう。

そして、御子イエスの願いに、自分自身をすっかり委ねましょう。新生児に必要な場所は、静かで温かみのある部屋です。いざとなったら、イエスのとどまる部屋を保つためにこの世の騒がしさから逃れましょう。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。
「お言葉どおり、この身に成りますように。」神に自分を委ねる決意を
ささげて、夜半のミサに備えましょう。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

にぎやかな場所から少し離れてお生まれになった



主の降誕おめでとうございます。中田神父にとっては初めて、福江教会でクリスマスを迎えます。夜半のミサでは、宿屋ではなく家畜小屋で生まれた救い主を強調したいと思います。

朗読では次のように記されています。「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」（2・6-7）

住民登録で自分の町に戻っていたヨセフでしたが、宿屋に恵まれませんでした。マリアのことを考えると、宿屋を見つけられなかったことはどんなに辛かったでしょう。けれども、ヨセフとマリア、もうすぐお生まれになるイエスに泊まる場所は与えられなかったのです。

しかし、イエスの誕生の場所は確保されました。「布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。」家畜小屋に、誕生の場所が恵まれました。ここは、人々にぎわう真ん中ではなく、にぎやかな場所から少し離れた場所でした。私はこう考えます。神様の計画は、人々にぎわう真ん中ではなく、そこから少し離れた場所で、始まっていくのです。

救い主誕生の知らせが、まず羊飼いに知らされました。羊飼いや家畜を飼っているのも、人々の真ん中には住みません。家畜が、少し離れた場所で飼われているように、羊飼いやにぎやかな場所から少し離れたところで暮らす人々です。救い主誕生は、この「にぎやかな場所から少し離れた人」に、まず知らされたのでした。

ご降誕夜半のミサが示していることを、私たちもよく考える必要があります。クリスマスがやって来る、そうやって世界中の人々が浮き足立っています。クリスマスの飾りを用意しましたが、豪華なものはほかにもあるでしょう。しかし私たちキリスト者は、そのにぎやかな場所から少し離れた場所に、目を留めなければなりません。

中には、「それは私の人生と重なる」と考えている人もいるかも知れません。これまで、にぎやかな場所からは少し離れた、あまり目立たない場所に置かれていた人もいるでしょう。自分の居場所がないまま、何とかその日その日を暮らしてきた人もいるでしょう。

そうしたにぎやかさから少し離れた人生だった人には、救い主の誕生は強く心を惹きつけるはずです。イエスは、あなたと同じようにして生まれました。にぎやかさから離れた場所、あなたのような人生だった人のすぐそばで生まれた。飼い葉桶に眠る幼子は、それを全身で伝えようとしているのです。

福江教会で今ご降誕のミサをしています。同じ時間に、私たちよりも商店街は人が集まっているかも知れません。にぎわっているかも知れません。私たちはお生まれになった救い主を、そのにぎやかな場所に探すものではありません。そこから少し離れた、この聖堂に、救い主を探し

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

に来たのです。

闇を照らす光を、まぶしい光に満ちた場所に探し求めるのではなく、ほかに頼る光もない私たちは、静かな場所に探しに来ました。そして、暗闇を照らす唯一の光を見つけたのです。この光は、私たちから決して奪われることのない光です。救い主誕生を、正しい場所で確かめたので、私たちの喜びは決して奪われることがないのです。

天使から救い主誕生を知らされた羊飼いは、直ちにその姿を確かめに急ぎました。この夜半の朗読にはそのことは書かれていません。そう考えると、現代の私たちこそ、救い主を最初に礼拝する人ではないでしょうか。

私たちは降誕節のうちに、いただいた喜びを出会う人に届ける必要があります。にぎやかな場所から少し離れた人々は、私たちの受けた光、受けた喜びを今の時代にも必要としているのです。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

毎日眺めてもよい救い主です



あらためて主の降誕おめでとうございます。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」（1・14）ここにお集まりの皆さんは、「誕生の喜び」を特別に知っている方々だと言えます。夜半のミサでご降誕を祝い、翌日の日中のミサも続けて来てくださっているからです。

中田神父は経験できないことですが、自分に家族がおられて、誕生の喜びを分け合ったことがあるなら、新しい命がずっと見ても見飽きないという経験を持っているのではないのでしょうか。鯛ノ浦に住んでいる私の母親は、妹夫婦に男の子が生まれ、祖母となった時に、毎日見ても見飽きないと、素直に喜びを表していました。

毎日眺めていると、小さな変化にも気がつくことでしょう。日々の成長を、細かく記憶していることでしょう。その体験は、今日ご降誕の日中のミサを祝うために大いに役立ちます。なぜなら、救い主としてお生まれになったイエスは、これから日々成長して、神と人ともに愛されるようになります。

私たちは、昨晚に続けて幼子イエスを訪問に来たのですから、イエスの成長と共に、私たちも前に進んでいきましょう。イエスは神殿に奉獻され、幼いときに命を狙われ、エジプトに避難します。12歳の時には神殿で学者と議論します。

さまざまな場面が、人となられた神の子の成長を確かめる場所です。私たちは、その一つ一つの出来事にミサの典礼の中で立ち会いたいと願っているのでしょうか。それぞれの出来事に私たちが立ち会うなら、私たちにとっても霊的に成長する糧をいただくことになります。

降誕夜半のミサで、具体的には触れませんでしたでしたが、何十年もルカ福音書の誕生物語を朗読し、説教しているわけです。その中で「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」（ルカ 2・7）これはどういうことだろうと毎年考え抜くのです。

たまたま、宿が満席だったのでしょうか。面倒を避けたくて、宿屋が泊めさせてくれなかったのでしょうか。金持ちが何部屋も貸し切って、宿を取れなかったのでしょうか。中田神父が20代30代だったとき、面倒を避けようとしたことは想像できませんでした。金持ちが何部屋も貸し切ったかもしれないという発想は、50代になるまで浮かびませんでした。けれども想像したどの理由も、人間の世の中ではあり得るのです。

何十年も思い巡らして気づくこともあります。だから、イエスの一つ一つの出来事に、私たちもついて行くことは意味があるのです。毎週あずかっているミサは、同じ事の繰り返しですが、何年何十年と参加して参列者が気づくこと、ミサをささげる司祭が気づくこともあるのです。

日中のミサで朗読されたヨハネ福音書の始まりの部分も、何十年も朗読してきましたが、今年、初めて次の箇所が目が留まりました。「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

に恵みを受けた。」(1・16) とっくにこの箇所が目が留まり、取り上げていてよいはずですが、この歳になって特別に目が留まったのです。

今年のクリスマス、一人の神父様は大腸がんという大病を患った中でミサをおささげします。だれがそんなことを想像できたでしょうか。けれども私は、ヨハネ福音記者が捉えた「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」このメッセージは今年のためにあると、信じたいのです。

わたしたちの間に宿られたみことば、イエス・キリストのおかげで、例外なく皆が、恵みの上に、更に恵みを受けた。絶対にそうなんだと、言い聞かせています。あなたにとって、おいでくださったイエスは毎日眺めてもよいと思える救い主でしょうか。来年また見に来ます。そのような存在でしょうか。今日ここにお集まりの皆さんは、毎日眺めていたい、毎日私の心に留まっていてほしいと願っている、そんな皆さんに違いないと信じております。

聖家族(ルカ 2:22-40)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。



聖家族 (ルカ 2:22-40)

イエスは、ご自分が触れるすべてを聖別してくださった

今年は12月31日が聖家族の祝日となりました。一年納めの日が日曜日でした。中田神父にとってまるまる一年ではありませんが、皆さんのお祈りとお支えによって何とか今日を迎えることができました。感謝いたします。8ヶ月で、何年分もの経験をさせてもらいました。最近気づいてビックリしたのは、もみあげが白くなっていました。苦労も経験させてもらったということでしょうか。

この一年でいちばん新しさを経験したのはミサの儀式書です。皆さんはずいぶん慣れてきたでしょう。司祭たちは儀式書の細かいところまで注意して唱えるので、この一年大変な思いをして唱えてきました。助任司祭のように若くて記憶力も衰えていなければ、変更点にもすぐ慣れていくかも知れません。しかし私のような30年選手には、今回の儀式書の変更にはずいぶん手こずりました。何せ30年同じ唱え方をしてきたことを切り替えるわけですから簡単ではありません。

今もって悔しいのは、これまで顔を上げて唱えていた部分も、顔を上げてささげることができない、ということです。去年までは、皆さんの顔を見ながら、第二奉献文を唱えることができていたのです。「まことにとくとくすべての聖性の源である父よ・・・」ところが今は儀式書を見て唱えないと不安になります。唱え始めて一年しか経っていないからです。30年選手の威厳も貫禄も見せられない。そこがいちばん悔しいです。もっと上の先輩は、もっと悔しがっていることでしょう。

ところで、奉献文の中でパンの聖別の言葉があります。「皆、これを取って食べなさい・・・」司祭は、大きなホスチア一枚だけを手に取って唱えていますが、この聖別の言葉で、祭壇の上にあるすべてのホスチアが聖別されます。イエス様は、司祭を通して、触れている物だけでなく、祭壇上のすべてのものを聖別してくださるのです。

今日、福音朗読はイエス様が神殿で献げられる場面の朗読でした。中田神父はここにも、パンの聖別と同じことが起こっている。そう考えたのです。律法によれば、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるわけです。出エジプト記13章2節「すべての初子を聖別してわたしにささげよ。イスラエルの人々の間で初めに胎を開くものはすべて、人であれ家畜であれ、わたしのものである」これがもともとなっているのでしょうか。

しかし、神の独り子イエス・キリストの神殿奉献は、これまでとは違ってイエスによって触れるものすべてが聖別された、そう考えてみたのです。幼子を抱いて、ヨセフとマリアが神殿に出向きます。幼子イエスによって、ヨセフとマリアが聖別された。両親が連れて来た幼子を、シメオンが抱きました。シメオンは幼子イエスによって聖別されました。のちに女預言者アンナも、幼子イエスに聖別されます。もっと言うなら、

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。
エルサレム神殿と、すべての聖所が、イエスによって聖別された。司祭を通してイエスが祭壇上のすべてのパンを聖別なさるように、イエスによって聖別された。私はそう考えたのです。

さてこのイエスによって聖別されるすべてのの中に、皆さんは含まれないのでしょうか。説教の流れをよくご理解の皆さんでしたら分かるでしょう。私たちも、幼子イエスによって聖別され、聖家族に加えられるのです。聖体拝領が可能なら、拝領することで私たちが聖別されます。もし何らかの事情で聖体拝領できない人でも、ここに集まっていることで聖別される。そう言って良いのではないのでしょうか。

もちろん、幼子イエスによって私たちが聖別されたとしても、私たちはいつか罪によって聖なる状態を失ってしまいます。それで私たちは、頻繁にミサに与り、聖体を拝領するのです。12月10日に触れましたが、日曜日だけミサに参加していた人は年に一度でも良いから、平日のミサ参加を考えてください。あなたの生活全体を、イエスは聖なるものとしてくださるはずです。

誕生日や、結婚記念日、年に一度の日にぜひ検討してください。私たちはイエスによって聖なるものとされ、聖家族に加わる。このことを今週の糧として持ち帰りましょう。説教が長くなってしまいました。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)